

折々のことば

1 3 4 1 ~ 1 3 4 5

病める貝の吐き出した美しい異物、それが真珠です。

澁澤龍彦

折々のことば

鷺田 清一 1341

「ダイヤモンドは買うもんじゃありませんか？」「お坊ちゃんまはこれだから。掘って掘って、掘り当てるもんです。」

木皿泉

かつて自作の一部を「ばくられ」、また「ばくり」だと疑いをかけられたこともある男女ユニットの脚本家は、何のかんの言っても最初にそれを編みだした人の独創にダイヤモンドの輝きは宿るという。表現者は知らぬ間に自分をばくっていることもあるから要注意と。対話体の連載エッセー「ばくりばくられ」(Scripta 50号)から。

2019・1・10

折々のことば

鷺田 清一 1342

どの人にも……母国の歴史が背後霊のように絡みついている。それから完全に自由になることは不可能よ。

米原万里

ロシア語通訳・文筆家の米原は、ルーマニア人の旧友、アーニャと31年ぶりに再会し、故国の人々の惨状に冷ややかなその言動に戸惑う。共産党幹部の娘として例外的に英国に留学しそこで家庭をもった貴女のように、母国の歴史と無関係でいられる人は「紙っぺらみたいにならべら」だと。「嘘つきアーニャの真つ赤な真実」から。

2019・1・11

折々のことば

鷺田 清一 1343

この雪いかを見ると一筆のたまはせぬほどの、ひがひがしからん人の仰せらるる事、聞きいるべきかは。

兼好法師

一面雪景色の朝。ある女人に頼み事があり文をやると、早速に、「君はこの雪をどう思う、とほんの一言たずねもしないような無趣味なお方の頼みなど、だれが聞いてあげるのですか(杉本秀太郎訳)との返事。「今は亡き人なれば、かばかりの事も忘れがたし」と。いとしき人の思い出は、些細なもののほど身に沁みる。『徒然草』から。

2019・1・12

折々のことば

鷺田 清一 1344

病める貝の吐き出した美しい異物、それが真珠です。

澁澤龍彦

人生とは長患いみたいなもの。思うようにはゆかぬその思いを、人は内に溜りのように溜め込む。その溜りがもし、吐瀉物のように形の崩れたものではなく、瑕のない美しい球となって吐き出されたなら、それこそ思ふ人性への究極の慈悲といえるかもしれない。幼き頃よりの夢を叶えるべく、老いて天竺に向かう親王の幻想と怪奇の旅を描いた小説『高丘親王航海記』から。

2019・1・13

折々のことば

鷺田 清一 1345

「どうせ」という認識を受けて、「いっそ」といっか、あるいは「せめて」とでるか

竹内整一

どうせいつか死ぬなら、だめになるなら、散ってしまうなら、いっそこっちから先に見限ってやると言うのか、それともせめてこれだけは、今だけはと希うのか。自分に言いかけせるのか、何かにすがることか。「いっそ」と言いつつ「せめて」と希う、そんな「あわい」で揺らめくのが人性だと、日本思想史家は言う。人はつねに限界の前に佇む。無常を論じた『ありてなければ』から。

2019・1・14

折々のことば

1 3 4 6 ~ 1 3 5 0

常識はいつか古いものとして変わられる自分を意識した寛容な哲学です。

なだいなだ

折々のことば

鷲田 清一 1346

常識はいつか古いものとして代わられる自分を意識した寛容な哲学です。

なだいなだ

「説明などしなくても、社会の全員が一致できる意見」をかつては「当たり前」、今は「常識」という。それらは時代とともに変化する。つまり常識には、それが相対的なものであることの理解が含まれている。大事なものは、いつも社会の片隅までよく目配りし「偏らない」こと、多くの人々がそれを他の人たちと「分かち合っている」ことだと、精神科医は言う。『常識哲学』から。

2019・1・15

折々のことば

鷲田 清一 1347

本家に気兼ねすることなくやっているときに、日本人は結構おもしろいものをつくることができたんじゃないか

高畑勲

中国や西洋という「本家」を模倣しようとしながらそれが叶わないところで、日本文化は限界を逆手に取って多くの創発を生んだと、アニメ監督は言う。例えば漫画で独自のコマ割りの手法を編みだし、躍動感溢れる表現を可能にしたように。外交にもそうした創発があれば。評論家・加藤周一著『日本 その心と私たち』での対談から。

2019・1・16

折々のことば

鷲田 清一 1348

過去が大きな物語としてしか存在せず、過去へアクセスするための道具が「強いられる」ものでしかないような状況は……つまらない。

佐藤知久・甲斐賢治・北野央

官製の記録でなく、当事者がビデオカメラを鉛筆のように用い、自ら作り手・使い手となって記録し活用する。東日本大震災後のこの活動を伝えようとする3人は、未来世代が岐路に立った時「過去に潜在している、さまざまな物語の多様性」にふれられるようにとの希いがあったと言う。『コミニティ・アーカイブをつくろう』から。

2019・1・17

折々のことば

鷲田 清一 1349

「あさんって、ぼくがうれしいと、いつもうれしいっていうんだね」

戸田和代

子狐を亡くし憔悴する母狐。通りがかった電話ボックスで少年が、速く入院している母親に今日あったことを嬉しそうに伝えていた。ある夜、電話が突然使用中となり、母狐は新しい電話ボックスに化けた。内で響く少年の弾んだ声。それが母親の哀しみを溶かせることを身をもって知り、母狐の心に再び灯りが点る。絵本『きつねのでんわボックス』（絵・たかすかずみ）から。

2019・1・18

折々のことば

鷲田 清一 1350

木は数百年もの時間をかけて養分を地面から取り込んで体内にためる。これが子どもたちにとってかけがえのない遺産となる。

ペーター・ヴォールレーベン

樹も子育てをする。親は若木の頭上に枝を広げ光を遮る。ゆっくり生長するので、組織も緻密になって、折れにくい。代わりに根を通じて栄養を送る。朽木や倒木も、菌類や昆虫による分解で養分が豊かだから苗木を育てる土壌となる。人も做らすべき教育法だ。ドイツの元森林管理官の『樹木たちの知られざる生活』（長谷川圭訳）から。

2019・1・19

折々のことば

1 3 5 1 ~ 1 3 5 5

「砂時計は、時間を丸見えにするんだね」

水無田気流

折々のことば

鷺田 清一 1351

「涙」とは「心のメイク落とし」で、ちょうど肌と同じような具合で、休ませてくれるもののかな、と思いました。

ある雑誌編集者

執筆依頼の書簡に添えられていた文章。人は悲嘆に暮れて涙を流すというよりも、涙が零れるという出来事に身を委ねるのではないか。零れるという自然に抗うことなく。流すまいとこらえようと、こんどは人がその姿を見て涙を零す。涙腺がゆるむともいうが、身体を弛緩させることで感情の澱を洗い流す。人はときに生理に救われる。

2019・1・20

折々のことば

鷺田 清一 1352

貧困はけっして自分には関係のない問題ではなく、すぐとりにあるものなのです。

もやい

貧困問題をめぐるNPO法人自立生活サポートセンター「もやい」のレクチャーブック『先生、貧困ってなんですか？』から。家族や友人の援助、まともな教育環境、雇用の確保、制度的な保護など、困難に陥った時に私たちが頼れるものを「溜め」と呼ぶなら、その「溜め」を失った状態が貧困である。その意味で、「経済的な貧困」は「つながりの貧困」と複雑に絡みあっている。

2019・1・21

折々のことば

鷺田 清一 1353

「砂時計は、時間を丸見えにするんだね」

水無田気流

今日も子どもの通院。診察まで長時間待ったり、治療後で褒美にカフェでケーキを食べさせたり。その間もしきりとパソコンのキーを叩く社会学者。時間を必死でやりくりする彼女に息子が、紅茶の飲み頃を知らせる砂時計を見ながらこう呟いた。堰き止めを許さない時間の残酷？ 男女間に横たわる「巨大な時空の歪み」を論じた『居場所』のない男、「時間」がない女から。

2019・1・22

折々のことば

鷺田 清一 1354

部分部分はそれぞれうまく組み合わせられているのだが、それが全体としてどのような絵柄になるのか想像する者がいなくなった

猪木武徳

技術が高度化してくると、個々の工程が全体の文脈の中でしか意味をもたず、労働内容もそれ自体で完結したものではなくなる。相互に分離され、巨大なジグソーパズルの隣接部分を埋めるようにしか意識が働かない。誰も全体を把握しないというこの危うさは、現代、科学も行政も抱え込んでいる。経済学者の『自由の思想史』から。

2019・1・23

折々のことば

鷺田 清一 1355

市場経済のなかで生きている人間は……すべて市場で投機家としてふるまわざるをえない

岩井克人

投機家とは、自らが必要とするものを買うのでも生産するのでもなく、「短期的な値上がり益のみを目的に」売り買いする人。市場価格はそこでは「実体的な価値」を失い、あやふやな情報や噂で乱高下し、ひどく不安定になる。消費者も生産者もこれに沿って消費を計画し、仕入れや在庫調整をせざるをえず、この不安定さを免れない。経済学者の『二十一世紀の資本主義論』から。

2019・1・24

折々のことば

1 3 5 6

~ 1 3 6 0

煮えたぎる釜の口に、早苗ちゃんは、水を一杓さした。／と、ピタッと松風が止んだ。

森下典子

折々のことば

鷺田 清一 1356

用もないのに行く、顔を出しておきなくなる場所が「コミュニティ」だと僕は思っています。

津田大介

「コミュニティが持続する条件は、人々が目的や価値観を共有することではない。'なんとなくみんな顔見知り'でかつ思いがけず面白いことが起こること。それには、外の人間を迎えること、各々が自分のこだわりを他の人に「翻訳」することを楽しいと思える素地が不可欠だとジャーナリストは言う。美術家・小山田徹との対談「集まりは可能か?」(「ASSEMBLY」02号)から。

2019・1・25

折々のことば

鷺田 清一 1357

僕は、ちょっと足りなくて「あとは自分たちでなんとかするわ」くらいが状態としていいばん好き。

小山田徹

規定の枠内でやらされるのは窮屈だし、ゼロから自分でやるのもしんどい。「組織」として閉じるのを回避するには、あらかじめそこに「ずらし」と「曖昧」を仕込んでおく必要があると美術家は言う。地域も大学も自分だけで完結しようとするのは逆に潰れる。昨日と同じ津田大介との対談「集まりは可能か?」(「ASSEMBLY」02号)から。

2019・1・26

折々のことば

鷺田 清一 1358

煮えたぎる釜の口に、早苗ちゃんは、水を一杓さした。／と、ピタッと松風が止んだ。

森下典子

茶室でいつも静かに鳴り続ける音。「松風」。釜の底に鉄片が漆で貼りつけてあり、沸きたすと「し、し、し、し」と断続的に鳴り、やがて「し——」と一つになる。煮えたぎる中、水を一杓さすと松風は止み、一瞬沈黙が訪れる。迷い、後悔、心配が切れ目なくつながる人生。その煮えたぎりに拮抗しうる「自由」がこの「数秒の空白」には潜む。エッセイストの『日は好日』から。

2019・1・27

折々のことば

鷺田 清一 1359

何の予備知識もなくすごいものすごい

神田松之丞

講談師は「客」の時代が長かった。講談、落語、浪曲と聞きまくった。気持ちを「こじらせて」いて、めったに笑わぬ嫌みな客だった。が、ある日聞いた立川談志の噺は「コギャルからじいさんまで」みなを打ちのめすかのよう。こんな世界もあるのかと震えた。噺にかぎらず秀でた芸は不可解なままに人の胸を鷲掴みにする。「絶滅危惧職、講談師を生きる」(聞き手・杉江松恋)から。

2019・1・28

折々のことば

鷺田 清一 1360

「では、繁殖もしないし、生きる意味もない私たちの自由は乾杯!」

高村薫

山村に暮らす老人四人組。ある日訝えない中年男が現れ、「世の中に必要とされていない」、意味なくむだに生きているだけと嘆き節。柿の皮剥きに忙しい四人組は、仕事にも繁殖にも意味や「承認」が要るとは何と「肩が凝る」こと、だったら意味など考えずにいる自分たちは自由そのものだとして蹴する。人は「悩まなくてもいいことで悩んでいる」と。小説「四人組がいた。」から。

2019・1・29

折々のことば

1 3 6 1 ~ 1 3 6 5

オレンジの実だけ喰って、皮を捨てるようなわけにはいきませんよ。

アーサー・ミラー

折々のことば

鷺田 清一 1361

言葉を持たないゴリラは、心だけではなく全体で過去に戻るのかもしれませんが。

山極寿一

霊長類学者は、かつてアフリカの森で一緒に遊び、木の洞で眠りもしたゴリラと26年ぶりに再会する。「グッ、グフーム」と挨拶をするも反応がない。数日後、やっと近寄って来て眼を見る。そして仰向きに寝転がる。他の子ゴリラと取っ組み合いを始める。子どもに戻ったのだ。そっくり過去の体感に還る。そんな思い出し方、一度してみたい。『サル化』する人間社会から。

2019・1・30

折々のことば

鷺田 清一 1362

おじいちゃん、おばあちゃんの最後のつとめは、孫や家族に自分が死ぬところを見せることではないか。

池田清彦

死がベールの向こうに置かれる。街には犬の死骸すらない。延命措置で「いまわの際」をしかと看取るのも難しくなった。生と死は一続きなのに、死は見えなくされる。死を特別扱いせずに、死骸が鳥たちに啄まれ、きれいな白骨となって「土に還る」という自然のサイクルに心を留めるべしと、生物学者は言う。『ほどほどのすすめ』から。

2019・1・31

折々のことば

鷺田 清一 1363

暇見て電話下さい。

ある父親

東北のある市職員のスマホには、ほぼ週に1度、父親からこんなメッセージが届く。日頃から娘は、緊急時には家族の力になれないと伝えている。震災の時もただちに救援活動に入り、4日間放っていた。このメッセージからは逆に、「大事な仕事についているのだからこっちは後回しでいいよ」との思いやりが聞こえる。関係の落ち着きどころというのは、家族それぞれなのだ。

2019・2・1

折々のことば

鷺田 清一 1364

問題は、「自立」的であろうとしすぎることであり、それを促す社会の側にある。

岩田正美

貧困のただ中にある人の「意欲」を喚起し、制度的な支援によって再び労働市場へと戻すという「自立支援」の施策には、貧困は個人が引き受けるものという前提がある。が、それ以前に「働いても貧困から抜け出せない構造」への対策が不可欠だ。貧困問題では就労機会や住宅の確保など「トータルな見方」がまだまだ希薄だと、社会福祉学者は言う。『貧困の戦後史』から。

2019・2・2

折々のことば

鷺田 清一 1365

オレンジの実だけ喰って、皮を捨てるようなわけにはいきませんよ

アーサー・ミラー

長年の旅回りに疲れたセールスマンは、配置換えを訴えるもとりのあわない社長に怒りをぶつけ、解雇される。息子には僕は所詮「ひと山十セント」の人間なんだと言われる。給与生活者の月賦づけの生活。最後の誇りも蝕まれ、ついに命を絶つ。葬儀の後、妻は家のローンもやっとなだのりと嘆く。戦後まもなく米国で上演された戯曲『セールスマンの死』（倉橋健次）から。

2019・2・3

折々のことば

1 3 6 6 ~ 1 3 7 0

もう少し「金」曜日を減らし意識して
自然と触れ合ったほうがいいんじゃないか

本田亮

折々のことば

鷺田 清一 1366

お前が絵を描くなら、文章を書くなら、この
まの住人になるなよ。距離を取れ。

陸前高田（岩手県）の写真館店主

東日本大震災後、消防団長として復旧に
尽くした写真館店主は、被災者の言葉を必
死で写し取ろうと移住してきた東京藝大の
院生（当時）・瀬尾夏美に、その張りつめ
た思いを汲みつつも毅然と告げた。表
現者は土地に密着してはならないと。これ
がのちの瀬尾の仕事の支えとなった。エッ
セー「さみしさ」という媒介についての試論
（FIELD RECORDING 2号）から。

2019・2・4

折々のことば

鷺田 清一 1367

プロジェクトを起す際に、プロジェクト全
体を表す詩を作る

ある自治体の職員

文化・観光政策を担当する幹部職員は、
年度始めの挨拶文の中にこう記した。米国
西海岸ではよく、プロジェクトを立ち上げ
る時に、みなで詩をつくり、それを部屋に
飾って取り組むという。現時点で想定でき
る目標より遥か向こうに届くイメージを喚
起するためか、あるいは「絶対こっちはよ
な」という方向感覚を共有しようとしてか。
いずれにせよ人の心を波打たせる提案だ。

2019・2・5

折々のことば

鷺田 清一 1368

私たちは「三人目」を探さなければいけない
のではないだろうか。

小松理度

自分たちは今どの辺りにいるのか、ここ
での真の課題は何かを知るには一度、他者
の眼を通すことが必要だと、いわき市の地
域活動家は言う。（仮構された内／外、出た
人／戻る人など「様々に二極化される福島」
だからこそ、現場の内向きの議論や「手に
分かれての応酬ではなく、遥か未来を生きて
る人、物見遊山の人も含め、〈外〉の声に
ふれることが肝要だ」と、『新復興論』から。

2019・2・6

折々のことば

鷺田 清一 1369

口をぬぐって、ないことにしないでよか
った。

樹木希林

誰にも消しゴムで消したいような過去が
ある。過ちや失態、人を深く傷つけた経験。
それらは折にふれて自分の中で疼き、関係
した人にもしかと痕跡を残したのに、齢を
重ねるとそれすらとても「懐かしい」と、
女優は語る。人生、どうもがいても「結果」
がついて回る。だったらそのつど「しっか
り傷ついたりへこんだりすれば、自分の足
しや幅になる」と。「一切なりゆき」から。

2019・2・7

折々のことば

鷺田 清一 1370

もう少し「金」曜日を減らし意識して自然と
触れ合ったほうがいいんじゃないか

本田亮

元CM制作者の漫画家・エッセイストは、
勤務が続く中も、週末よく家族とキャンプ
に出かけた。ある日ふと思う。曜日の名は
もっと自然と触れ合えと伝えている。月を
見る、火を煖す、水と遊ぶ、木に触れる、土を
踏み、陽光を浴びる。満員電車で鉄筋のビ
ルに通い、プラスチックのパソコンを操作
して「金」を稼ぐばかりだと、心が乾いて
しまうよと。『転覆家族が行く!!』から。

2019・2・8

折々のことば

1 3 7 1

~ 1 3 7 5

僕は、芝居で大事なのはリアクションだと思っているところがあります。

岸部一徳

折々のことば

鷺田 清一 1371

日常的でないものにぶつかったとき、即座に応用がきくということ、それが教養ということです。

福田恆存

劇作家・評論家は、信州へ向かう列車内で隣の高齢の女性から「窓を開けたいと思うが、迷惑ではないかと問われた。粗末な身なりで地の人らしい彼女に西洋風の作法で接せられたことに驚く。見なれぬ人には「距離を保って自分を位置づける」という躰けが行き届いていたからだろうと言う。1950年代の随想・教養について」から。

2019・2・9

折々のことば

鷺田 清一 1372

落語は正面きって述べたてるものではない

桂米朝

落語は「汗を流して大熱演する芸」ではないと、噺家は言う。人の心を震わせ、引っぱり込みつつも、でもこれは「おどけ話」ですと、外したり、かわしたり。そして最後は「落ち」(サゲ)で決める。そう、本気になったら台無しなのだ。そういう遊びと軽みの感覚で、「大きなことは望まない」、みなが無事に生きられたらいいという、庶民の思いに寄り添う。『落語と私』から。

2019・2・10

折々のことば

鷺田 清一 1373

しっかり蒸し煮すること、にんじんが汗をかいたようになり……甘く蒸されていきます

有賀薫

香味野菜で風味を、ブイヨンでうまみを、ケチャップで甘みを、バターでコクを、バジルで香りを加えるというふうに、スープをおいしくする方法は多々ある。が、「スープ作家」は「旬の野菜を単体でたっぷり使う」簡素な味つけをめざす。野菜そのものが「すでに十分においしい」という信頼感が、加算によらない生活の充実を教えてくれる。レシピ本『スープ・レッスン』から。

2019・2・11

折々のことば

鷺田 清一 1374

料理はあれこれ決めつけない。いつもどこか緩んでいる。だから偶然が巻き起こる。

坂口恭平

料理とはありあわせの材料との対話だ。それに何より、頭で考えるより先に手や鼻が、いろんな感覚が、うじゃうじゃ動きだす。「体の素直さ」が意識を引っ張ってくれる。躁鬱病で苦勞する建築家・作家は料理を毎日作りだして思う。「僕は死にたい」と時々思っていたのだが、そう感じてしまふことの原因に料理をしていないことがあったのではないかと。『cook』から。

2019・2・13

折々のことば

鷺田 清一 1375

僕は、芝居で大事なのはリアクションだと思っているところがあります。

岸部一徳

棒読みのような口調で異形を演じるのが巧い俳優は、台詞を言うより、相手の台詞を受けてどう応じるかのほうが大事だと言う。だから「自分が映っていないカットでも、誰かがやっているのならちゃんと向こう側に座って相手をする」と。出るのではなく受けるという演技。映画史研究家・春日太一の連載「役者は言葉でできている」(「週刊ポスト」昨年11月23日号)から。

2019・2・14

折々のことば

1 3 7 6

～ 1 3 8 0

「ものわकारのよさ」こそ、私たちが
駆逐しなければならない最大の敵
である。

稲垣喜代志

折々のことば

鷺田 清一 1376

私だって、そうしたいわよ。けどね。あの
人といないと、生きているばかばかしいはす
みつもものがなくなっちゃって寂しいのよ。

佐野洋子の友人

ミラノでルームメートの絵描きの卵二
人。テルはしまりがなくていいかげん。あ
こは何事にもそつがない。テルのボーイハ
ントの後始末ばかりさせられるあこに、別
々に住んだらと絵本作家が言うのと、こんな
答えが。腐れ縁というより、自分にないもの
を抱えることで自分を閉じないでおく素敵
な生き方。随筆集『ふつうがえらい』から。

2019・2・15

折々のことば

鷺田 清一 1377

人が生きているって深いことなのだ、それゆ
えに人生ってあなどれないのだ

渡辺一史

〈障害〉という文化について考え続ける
ノンフィクションライターは、「障害者も健
常者も同じ人間である」という言い方自体
がさらに事態をこじらせるような場面に何
度も立たされる。「障害」は社会の中に生
まれるとか、人の「価値」ではなく「価値を
見いだす能力」の有無が問題だといった、事
態を反転させてゆく当事者の思想に力をも
らう。『なぜ人と人は支え合うのか』から。

2019・2・16

折々のことば

鷺田 清一 1378

部屋にゐても別に用もないことですから、同
じことなら暖簾の蔭で、意見を聴いてゐる
と、あとで心持よく台詞が言えます

四代目・山下金作

六代目・尾上梅幸著『女形の事』から。
江戸期の役者、金作は、出番の前も舞台で
の長いやりとりを袖でじっと聞いていたと
いう。舞台のみならず普段の暮らしも、見
えない所で淡々となされる努力に支えられ
るものだろう。ちなみに梅幸によれば、立
ち聞きのはぐさは「耳を出して聞く」より
「顯顯で聞く」ほうが俄然リアルになる。

2019・2・17

折々のことば

鷺田 清一 1379

人々は自分のかわりに働いてくれる道具では
なく、自分とともに働いてくれる新しい道具
を必要としている。

イヴァン・イリイチ

機械を人間の奴隷と考える社会は、翻っ
て人間をも機械の奴隷にする。産業の「生
産性」が人々の「自立共生」や自然との創造
的な共生を損ない、人を「消費者」に降格
させると、現代産業文明批判で知られる思
想家は半世紀前に書いた。では機械がAI
に変われば？ 『コンヴィヴィアリティの
ための道具』（渡辺京二・渡辺梨佐訳）から。

2019・2・18

折々のことば

鷺田 清一 1380

「ものわकारのよさ」こそ、私たちが駆逐し
なければならない最大の敵である。

稲垣喜代志

地方出版の魁の一つ、「風媒社」を起こ
した反骨の出版人は、空気を読むとか、老
後のことまでそつなく考えるといった「さ
めた人間が溢れる時代に異を唱えた。『仁
王立ちになって』時代に立ちほだかれと言
った。今なら遠吠えにも聞こえようが、世
の趨勢から身を外し、自前の道にそつと踏
みだすのも、立ちほだかりの一種だろう。
遺稿集『その時より、野とともにあり』から。

2019・2・19

折々のことば

1 3 8 1 ~ 1 3 8 5

あ、生きてた。ああ、そんならいっぺんに飲まなきゃよかった。

五代目・古今亭志ん生

折々のことば

鷲田 清一 1381

向かっていく対象を持っていないことを貧しいって解釈してる。

北村道子

お金がないのは貧乏だが、何をすればいいのかわからず「いつも指示を待っている」のはもっと貧しいと、映画衣装の制作に取り組むスタイリストは言う。そんな放心状態でいる時に、例えば音楽にふれ、自分には「こうして感動できるものがあつたんだ」とはたと気づく時、その音楽は人を支える。「なんでも浅くできる」というのは豊かさの印ではないと。『衣裳術』（新装版）から。

2019・2・20

折々のことば

鷲田 清一 1382

あ、生きてた。ああ、そんならいっぺんに飲まなきゃよかった

五代目・古今亭志ん生

噺家はその昔、旧満州の居候先で、一気に呑んだら危ないよとの忠告つきで老酒を6本貰った。先方の生活苦を察し家を出るが、食うにも困る日々。気持ち荒れ、呑みながら死ぬなら本望と飲み干すが……。存在自体が落語のような人。高座で眠りかけた時も客は大喜び。そっとしといてやんなど、口々に言ったという。娘、美濃部美津子の『志ん生一家、おしまいの噺』から。

2019・2・21

折々のことば

鷲田 清一 1383

情報は正確なときに真理となり、詩は自立したまとまりを持つときに真理となる。

E・M・フォースター

情報については誰がどうで目撃したかが重要。だからそこには署名が必要だ。が、詩は逆。重要なのは誰が書いたかではなく、目の前の事象以上に「本質的」な世界を生み出す作品そのものであって、作者も読者もそれに「創造的」にかかわる時、作者が誰かはもはや問題ではない。文学は「無名の状態を目ざす」と英国の批評家は言う。評論「無名でいい」(小野寺健訳)から。

2019・2・22

折々のことば

鷲田 清一 1384

そう「健常」が「障害」になっているのだ！

稲垣えみ子

例えば老いて、「できない」とだらけになつてはじめて「できる」ともあるのに、人は「人生を否定される側」に回らないかと怯え、「できない」ことをもぐら叩きのようになくそうとする。「健常者」という心の「栓」を外せば「イライラは笑いに」裏返るのに、それがなかなかできないと元記者は嘆く。障害福祉NPO理事長、木ノ戸昌幸の著書「まともがゆれる」への寄稿から。

2019・2・23

折々のことば

鷲田 清一 1385

前例がそもそもないのだから、失敗しようがない。やろう。

佐藤泰

東日本大震災の直後、仙台市の公共施設「せんだいメディアテーク」の職員たちは、ふつうの市民が日記のように撮った映像記録を集め、それについてみなで語りあい、発信し、未来の活動への資源とするという前代未聞の活動案をまとめた。不安げに提案を差し出すと当時の副館長は迷わず背中を押した。周りが「泰さん、優しいね」と言う、と、「ただの無責任だよ」と照れた。

2019・2・24

折々のことば

1 3 8 6 ~ 1 3 9 0

「家がのうなっても、仏さんはついて来るけえの、安心し……」

藤原新也

折々のことば

驚田 清一 1386

お菓子がすべてじゃないからね。

友人の孫

友人には6、4、2歳の孫3姉妹がいる。バレンタインデーに、長姉は学校から持ち帰った「友チョコ」を妹たちにねだられる。「これほしい、それもいいな」と妹たちのおねだりは底知れず。姉はチョコしか頭にない妹たちをこう戒めた。が、そういう理屈で自分を納得させようともしていた。ダブルミーニングを一文に込められるところがすごい。小さな〈社会〉の小さな始まり。

2019・2・25

折々のことば

驚田 清一 1387

「家がのうなっても、仏さんはついて来るけえの、安心し……」

藤原新也

家が破産し、母とともに列車に乗った高校生が、隣席の男に「ぼく、どこに行きよるん？」と訊かれる。鉄輪と答えると「遠いん？」と。「知っちゃらん」と答えると、「知らんどこに行くんかいね」と畳みかけられ、「家が無くなってしまったから」と呟くと、こう声をかけられた。大切に思うものは、死者と同じく、心を去らねば消えはしない。写真家の自伝小説『鉄輪』から。

2019・2・26

折々のことば

驚田 清一 1388

出来ゴコロこそ、文化ともいえる

カモカのおっちゃん

作家・田辺聖子の夫は戦時下、家族を疎開させ父と2人暮らし。空から機銃掃射を受け逃げまどう時、とっさに手にしたのは、父が柱目の下駄一足、自分は小説本だった。粹な遊び人と文学好きの青年。人からすればどうでもいいものだが、そこに思わぬ本音が出た。その小説本も戦後はすぐ売って焼酎に化けた。それもほんの「出来ゴコロ」と惚ける。田辺の随筆「非常持出」から。

2019・2・27

折々のことば

驚田 清一 1389

馬の耳に念仏

いなかや

道理の通じない相手には何を言っても無駄。自身痛い目にあって悟るまで待つしかない、道理を説く者はため息をつく。が、はたしてそうか。道理を知る自分は論す側で、相手は論される側、という前提を微塵も崩そうとせずに、ただ嘆くばかり。その意味で、耳を貸さないのはじつは道理を説く側なのかもしれない。論すより先に、相手の心をほどこすことに意を向けねば。

2019・2・28

折々のことば

驚田 清一 1390

彼はここでも過す人たちがとうまく話したいとは思っていない

近藤雄生

フリーライター近藤の近著『吃音』から。近藤が取材した男性は、吃音の苦しみから高校中退後に自死を図り、そののち正社員の職を見つけられないまま若い娘と暮らし続けた時期がある。彼を支えたのは発達障害の人たちが集うカフェ。発話を制御する技も習得したが、彼が心底安らうことができないのは、「素のまま」で人と深く交われる実家のような場所だったと、近藤はいう。

2019・3・1

折々のことば

1 3 9 1

~ 1 3 9 5

辛さはときに愚かということの裏返しだ

幸田文

折々のことば

鷺田 清一 1391

最も賢い処世術は社会的因襲を軽蔑しながら、しかも社会的因襲と矛盾せぬ生活をする
ことである。

芥川龍之介

社会の歪、もしくは不全を、憂い顔で、しかも自身は安全地帯に身を置いたまま批判するというのは、批評家の偽善であり狡知であると、作家は自戒の念を込めつつ揶揄する。だが、噂話のような情報を基ににぎにぎしく同時代の政治を嘆く現代人も、意識せずしてこの「批評家」の列に連なっているのだろう。『俳儒の言葉』から。

2019・3・2

折々のことば

鷺田 清一 1392

動きは早くても荒くならぬよう、型は多くても粗雑に流れぬよう、そのためにこのような重い装束をつけるのはかえって助けになる

白洲正子

能で鬼を演じる時にも、「つよいばかりであつてはこれはいないのであつて真につよいことにはならない」し、また美しくも面白くもない。そう世阿弥は説いたと随筆家はいう。抑えることで力がこもる、形が整うと。衣は外見を演出するものでなく心を容れるもの。人のふるまいを、生きる構えを象るためにある。『お能・老木の花』から。

2019・3・3

折々のことば

鷺田 清一 1393

生き方を学んだとか、そんなことをちっとも
いってほしくないの。とにかく読み始めたら
止まりませんでしたといわれた。

大沢在昌

作品を通して何かにふれるのではなく、
作品そのものにどっぷり浸ってほしい。こ
んな世界もあるのかと頭をくらくらさせて
ほしい。そんな声が推理作家の言葉から聞
こえる。読書とは、すれ違いざま他人にい
きなり胸倉を掴まれるような体験なのだろ
う。作家、増島拓哉との「小説すばる新人
賞受賞対談」(「青春と読書」3月号)から。

2019・3・5

折々のことば

鷺田 清一 1394

辛さはときに愚かといふことの裏返しだ

幸田文

作家はその昔、一人の少年の就職を斡旋
した。彼は雇われ先で、さらに戦地で苦勞
を重ねたが、作家の「好意」への感謝は忘れ
ず、年に幾度か作家を訪ねる。どんな辛さ
も時を経ないとほつきりしない。後で「あ
んなくだらないことに辛がついてたのか」
とあきれることもある。彼がふと口にした
この感懐にかえってその「苦勞の深さ」を
思ったと作家は言う。随筆「包む」から。

2019・3・6

折々のことば

鷺田 清一 1395

話せばわかる。

犬養毅

昭和7年のいわゆる五・一五事件。狙撃
せんと乱入してきた青年将校らを、時の宰
相はこう制したといわれる。直後、「問答無
用」の一言とともに惨殺された。犬養がと
つさに憂えたとおぼしきは、対立の激化そ
のことでなく、意見の対立が対立として認
められる場が損なわれることであつた。そ
ういう形で理路を交わらせる公分母が消失
し、社会そのものが壊れることだつた。

2019・3・7

折々のことば

1 3 9 6 ～ 1 4 0 0

人間には
行方不明の時間が必要です

茨木のり子

折々のことば

鷺田 清一 1396

人間には
行方不明の時間が必要です

茨木のり子

「うたたねにしろ／瞑想にしろ／不埒なことをいたすにしろ」、人には「ふっと自分の存在を掻き消す時間」が要ると詩人はいう。「日々アリアバイを作るいわれもないのに」携帯電話は鳴る。でも出ない。むしろ時の隙間をこじ開けて一人「ボワン」としていたい。自分を大切に思うのも大事だが、ときに自分に厭きる、自分をチャラにすることも必要だ。詩「行方不明の時間」から。

2019・3・8

折々のことば

鷺田 清一 1397

包丁で切るんでねぐ、包丁で切らすっていうのは、むずかしいのさ。

奥海良悦

食生活誌の研究者・赤嶺淳の『鯨を生きる』から。赤嶺が聞き取りをしたこの「鯨人」（捕鯨産業従事者）は、半世紀にわたり鯨を解剖してきた。ぐさっと包丁を入れた時、当たったのが鉾か骨か瞬時にわかる。そして骨に当たれば、剣術でいう「寸止め」のごとく刃先がびたり止まる。余計な力を入れずに包丁にさっと切らせるという技を身につけるまで、五年、十年かかるという。

2019・3・9

折々のことば

鷺田 清一 1398

臣は神を以て遇い、目を以て視ず。

莊子

料理人が牛を料理する、その手さばきと刀がたてる音はまるで音楽のよう。料理人は、初めのうちは牛の姿ばかり目に入ってきたが、やがてそれは目を去り、それこそまさに心眼で骨と肉の隙間を切り開き、「天理」（牛の体にある自然の筋目）に沿って難なく切れるようになったという。無理がないから、自分の刀には刃こぼれ一つないと。『莊子（内篇）』（森三樹三郎訳）から。

2019・3・10

折々のことば

鷺田 清一 1399

言わば震災後八年ではなく震災八年。

和合亮一

詩人は原発の爆発のあと、何かこれまでとは「全く違うこと」をしなければならなと思う、誰に届くかも知れない呟きを、「苦手」なツイッターに書き込み続けた。この事故の「不条理」に向き合ってそれを「ありのままに」書くことの難しさが、以後の詩業の原点にあるという。民俗学者・赤坂憲雄、アートプロデューサー・相馬千秋との鼎談（『現代詩手帖』3月号）から。

2019・3・11

折々のことば

鷺田 清一 1400

自分は傷ついたらしいけれど、でも何かがどう傷ついているのかも当時はわからなかった

福島出身の大学生

中学の卒業式の日には震災に遇った彼は、東北で催されたあるワークショップでこう語ったと、アートプロデューサー・相馬千秋はいう。そして、「頑張ろう」「忘れない」と無理やり前を向かせる言葉が嫌で書いた「敗北宣言」。それが逆に、彼が自身の傷をボジティブに受けとめ直すきっかけになった。詩人・和合亮一、民俗学者・赤坂憲雄との鼎談（『現代詩手帖』3月号）から。

2019・3・12

折々のことば

1401

～1405

一般に思いつきというものは、人が精出して仕事をしているときにかぎってあらわれる。

マックス・ウェーバー

折々のことば

鷲田 清一 1401

歌って、怖いよね。本気にさせちゃうし。

赤坂憲雄

歌は人のこころを揺さぶる。こころの底に溜まった濁を洗い流してもくれる。みなで歌えば気分はさらに高揚する。歌は人の思いを過剰なまでに煽り、結びつけることもあれば、人びとの「抵抗」の最後のかたちともなりうる。その揺れ幅が怖いと、民俗学者は言う。昨日、一昨日と同じ詩人・和合亮一、アートプロデューサー・相馬千秋との鼎談（『現代詩手帖』3月号）から。

2019・3・13

折々のことば

鷲田 清一 1402

なぜ、そんなに続きをほしがる？ 皆、それほど想像力がないのだろうか

フェデリコ・フェリーニ

映画「道」は戦後イタリアの名作中の名作。上映後、別バージョンの制作やアニメ化などの打診が殺到するも、監督はこれをすべて拒絶した。後の作品がみなそうだったかは別として、彼はこの時、自己の模倣だけはすまいと心に誓っていた。映像にできなかった余白の中にこそ創造の別の種が潜むと信じてか。ジョン・バクスターによる評伝『フェリーニ』（椋田直子訳）から。

2019・3・14

折々のことば

鷲田 清一 1403

ハイ、売名です。あなたも売名したら？ みんな助かるよ

杉良太郎

15歳での刑務所慰問を皮切りに、国内外での福祉活動歴は60年になる。歌手になる前、知人のカレー店で無給で働いたのも、「見返り」を求めない人生の道を貫く覚悟を決めるため。東北の被災地で炊き出しのカレーを混ぜている時、リポーターに「それって売名ですか」と訊かれた。寒空の下、人々が並んで待っている。反論する時間も惜しかった。「週刊朝日」3月8日号から。

2019・3・15

折々のことば

鷲田 清一 1404

一般に思いつきというものは、人が精出して仕事をしているときにかぎってあらわれる。

マックス・ウェーバー

突然のひらめきは機械的な計算や実験からは生まれない。探究への果てなき「情熱」に貫かれていなければ。だが、不思議なことに探究に没頭しているさなかもため。散歩中や、ソファでたばこをのんでいる時に、それは靈感のように訪れると、ドイツの社会学者は続ける。ずっと没頭してきた思考のその枠組みが、ふっとほどける瞬間に。『職業としての学問』（尾高邦雄訳）から。

2019・3・16

折々のことば

鷲田 清一 1405

私、結婚は、自分の人生に飽きないためにしたんですけど

トミヤムキコ

家族という他者の前で、妻でも母でもない「むき出しの個人を立ち上げ」る、その工夫を事あるごとに楽しんでいるとライターは言う。夫婦も、恋愛の延長上に「ユニット」としてあるのではなく、「ぐいぐいによ動く」もの。「たわいない話でいいからキャッチボールを続けるスキル」が大事だと。漫画家・瀧波ユカリとの対談「私たちの曖昧でネオイ結婚」（すばる）4月号から。

2019・3・17

折々のことば 1406 ～1410

記念日を祝うって、テスト前だけ勉強するようなものですね。

瀧波ユカリ

折々のことば

鷲田 清一 1406

記念日を祝うって、テスト前だけ勉強するようなものですね。

瀧波ユカリ

記念日を無視したくはないが、その日に何かイベントをし、SNSに「夫に感謝と書き込んでそれを「愛の証明」とするのは、性に合わない」と漫画家は言う。「世間一般で合格印をもらえるラブラブの形」は演じられないと。愛は、すり減っても一夜潰けで元に戻せないから？ 昨日と同じ、ライターのトミヤマユキコとの対談「私たちの曖昧でネオイ結婚」(「すばる」4月号)から。

2019・3・18

折々のことば

鷲田 清一 1407

内向きで周囲の声に耳を貸さない人だけが指導者になれるというのは、時代がそこで止まってしまっているからだ。

橋本治

「そい」とは、家長として一人に「家」を、全体の統率者として一人に「国」を、代表させる慣習のこと。代表を無理に一人に限るのも、誰か一人に権力を預けるのもなく、「代表者が複数いてもいいあり方」を具現できるまで「成熟」しようと、作家は最後に書いた。連載評論「指導者はもう来ない」(小説トリッパー「昨年冬号」)から。

2019・3・19

折々のことば

鷲田 清一 1408

辛抱。それしかなかった。勝ちにいなかったのが良かった

高安

大相撲今場所7日目。押し込まれ俵に足がかかるも、巻き返して勝利した大関は、記者の質問にこう答えた。本紙3月17日大阪本社版朝刊から。勝機はやみくもに探るものではなく、満を持して待つもの。そのつど一喜一憂していたら運も逃げる。人生も相撲と同じく試練の連続。観衆は力士の姿に、生きるということをめぐる自らの矜持を、こだわりを、そして願いを重ねる。

2019・3・20

折々のことば

鷲田 清一 1409

「自分の権利を擁護することは、自分の利益を擁護することだろうか?」「自分自身の文化から自由になれるだろうか?」

フランスの大学入学資格試験問題

フランスの知人に、貴国ではなぜ高校で哲学教育を重視するのかと質問したら、例えば公務員。誰もが幸福に暮らせる社会をめざす者が、幸福の何たるかを考えたことがなければどうなる」との当然すぎる返答。ちなみに2017年の記述式問題は右のごとし。しかもこれ、理系の課題。哲学研究者、坂本尚志の『バカロレア幸福論』から。

2019・3・21

折々のことば

鷲田 清一 1410

あーそー、なにかあったの?

新宿駅東口前の交番にて

1993年、北海道南西沖地震で壊滅的被害にあった奥尻島に募金を送ろうと、都内で「ひとりフォークゲリラ」を敢行した歌手、泉谷しげる。近くで騒いだので一言挨拶をと交番を訪ねると、奥から出てきた警官はこう惚けた。誰を護るために自分たち「公僕」はあるかをまず考え、組織の規律との辻褄合わせはその次と腹を括っていたのか。泉谷の『お前ら募金しろ!』から。

2019・3・22

折々のことば

1 4 1 1 ~ 1 4 1 5

世界がぜんたい幸福にならない
うちは個人の幸福はあり得ない

宮沢賢治

折々のことば

鷲田 清一 1411

東京の立ち食いそば店「ファミリ」の女将の言葉。吸う／吐く、食う／出す、覚める／眠る、働く／休む……。いのちは同じことの果てしなく繰り返す。だからその世話と下支え、休まない手入れが何より大事。仲間の食事を作ったり、職場の環境を整えたり、人を育てたり看病したり。エッセイスト、平松洋子の『そばです』から。

2019・3・23

ふじいさん

折々のことば

鷲田 清一 1412

日本語には、「お」をつけると意味が大きくずれる例が少なくないと、日本語・古典文学研究者は言う。「ひや」と「おひや」、「めでたい」と「おめでたい」、「しゃれ」と「おしゃれ」、「はい」と「おはい」、「ふくら」と「おふくら」。音の僅かな差が世界を緻密に分けてゆく。濁点の有無もそう。江戸期には「はげに毛があり、はげに毛がなし」と言ったそう。『谷間の想像力』から。

2019・3・24

糸井通浩

「にぎり」と「おにぎり」では食費の予算が変わる

折々のことば

鷲田 清一 1413

世界がぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない

詩人の「農民芸術概論綱要」から。人は自己のみならず他者の不幸をも悲しむ。他人のみならず他の生き物、さらに宇宙の苦しみをも苦しむ、つまり共感が「人」の本性であるかぎり、「世界」が幸福でなければ自分も幸福でない。そういえば演劇家・歌人の寺山修司も『幸福論』に、とある接客業の女性の言葉を書き入れた。「ひとり」で幸福になろうとしても、それは無理よ

2019・3・25

宮沢賢治

折々のことば

鷲田 清一 1414

芸術はもちろん宗教行事もまた、読経や讃歌、花や香、踊りや食事と、人の感覚を震わせ賑わす。暮らしの空気を入れ換えるのだから何だか楽しい。楽しいことは進んでやれる。この楽しみを生活の芯となしうれば、それは自治と抵抗の原点ともなりうる。詩人はそこに「希望」の水源地を見た。昨日と同じ「農民芸術概論綱要」から。

2019・3・26

宮沢賢治

折々のことば

鷲田 清一 1415

共感を呼ぶストーリーは問題を知る入り口には必要です。ですが、そのベースになるのはファクトです。

共感とは社会の地盤をなす重要な感情だが、共感できない人との間に壁を作り出す。だからたとえば同性婚についても、共感とは難しくても理解はできる。人を増やしてゆくことが大事で、そのためには社会保障や相続をめぐる法の不整備を一つ一つ正確に伝える必要があると、日本文学研究者は言う。ハフポスト日本版(3月14日)から。

2019・3・27

ロバート・キャンベル

折々のことば

1 4 1 6 ~ 1 4 2 0

オーケストラ奏者はキョロキョロして
なきやいけない

古部賢一

折々のことば

鷺田 清一 1416

だって敵じゃないですから

元山仁士郎

辺野古埋め立てをめぐる県民投票の全県実施を訴えハンガーストライキを敢行した青年は、意見が対立しても「別の場所でも仲たがいする必要はない」と言う。関係はどこでも多層的。彼は容認派の人とも直に話せた。そこには、分断に終止符を打ち沖縄の未来をこそ考えたいとの共通の思いがあった。石戸諭のルポ「沖縄ラプソディ」(「ニユーズウィーク」日本版2月26日号)から。

2019・3・28

折々のことば

鷺田 清一 1417

私たちが音楽的だと考えていることが、ほんとうは人間の不幸の始まりかもしれない。

小泉文夫

歌唱の形式は社会生活の形態と連動していると、民族音楽学者は言う。小規模な狩猟採集民は声を揃えて歌うことが少なく、他民族との抗争や巨大な獲物を狙うなど結束した行動が必要な民は、日頃から歌や踊りで拍子を合わせる練習をしている。権威や規則で生活が「がんじがらめ」の社会ではじめて「複雑」で「個性的」な音楽が誕生すると。「音楽の根源にあるもの」から。

2019・3・29

折々のことば

鷺田 清一 1418

オーケストラ奏者はキョロキョロしてなきやいけない

古部賢一

ステージの前方と奥、端と端は、たがいの音がほとんど聴こえないと、オーボエ奏者という。譜面に目を凝らすのではなく、指揮者の棒の動きに目を奪われるのでもなくて、離れた仲間の姿に視線を泳がす。音はじかに聴こえなくても目を遣り、目くばせしあう。その意味でデモクラティックな社会の雛形でもある。精神科医・和田信との対談(「文明と哲学」第10号)から。

2019・3・30

折々のことば

鷺田 清一 1419

あなたに似合うと思うからプレゼントするわ、終わり。すっきりしたもんだ。

チヨ・ナムジュ

出産のため離職した主人公は、なぜ夫ではなく自分が仕事と子育ての択一を迫られ、社会とのつながりを一旦停止するよう強いられるのか、納得がゆかない日々を送る。ある日、元同僚からリップグロスを贈られる。でも元同僚は「母親だって女なんだから」などとは言わなかった。それが何より嬉しかった。韓国の作家の小説『82年生まれ、キム・ジヨン』(斎藤真理子訳)から。

2019・3・31

折々のことば

鷺田 清一 1420

「どうか——愛をちよっぴり少なめに、ありふれた親切をちよっぴり多めに」

カート・ヴォネガット

人生で大事なものは「運命と真剣に取り組むこと」が、真剣であればあるほど人生はどたばた喜劇のようになる。米国の作家は言う。結婚生活も「愛で通そうとすればそうなる。それより、だれかを大切に扱い、そして相手もわたしを大切に扱ってくれた」という体験をささやかながらも積み重ねることで悲喜劇は回避できる。SF小説『スラップスティック』(浅倉久志訳)から。

2019・4・1

折々のことば

1 4 2 1

~ 1 4 2 5

夜が心地よいのは、記憶と同じように、退屈な細部を消してしまうからだ。

ホルヘ・ルイス・ボルヘス

折々のことば

鷲田 清一 1421

地域での活動の入り口には、「正しさ」ではなく「楽しさ」が必要なのです。

山崎亮

地域包括ケアにおいては、職業意識で働く医療職と余暇を割いて動く住民との間にずれがあると、コミュニケーションデザイナーは言う。さほど関心がない住民にも参加してもらうには、合理的理由より先にまずは「面白そう」と感じてもらわねば。やがて「もっと知りたい」となった時が医療職の出番だ。インタビュア「ケアするまち」をつくる《週刊医学界新聞》3月25日号から。

2019・4・2

折々のことば

鷲田 清一 1422

Plan・Do・Check・Action

ビジネスでよく耳にする言葉

計画・実行・評価・改善、一巡したらさらに高次の循環へ。品質管理や業務改善のための手法で、PDCAサイクルと呼ばれる。この手法については、Plan(計画)・Delay(遅延)・Cancel(中止)・Apology(謝罪)と揶揄するむきもある。設定された計画が真に十全なものか、よく吟味せずにそれを始点とすれば、前例主義や上意下達、減点主義といった「畏縮」の慣習になってしまうからだろう。

2019・4・3

折々のことば

鷲田 清一 1423

「また、おじいさんがはじまった」

ある地方のばあば

絵本ナビ編集長、磯崎園子の義母は、孫が駄々をこねるとすべに「言う。」「じい」は「自良」。じらをくる(思いと違うとぐずる)子は思いが明確だから「大きくなってちゃんと判断できるようにする」と。きかん坊の息子に手を焼く磯崎は「新しい怪獣」のような語の響きに心が軽くなる。大人にも違和感を手放さずに「ぐずる」権利はある。『ママの心に寄りやつ絵本たち』から。

2019・4・4

折々のことば

鷲田 清一 1424

夜が心地よいのは、記憶と同じように、退屈な細部を消してしまうからだ。

ホルヘ・ルイス・ボルヘス

雪の朝も人はきつと同じ思いにとらわれるだろう。ここで心しておくべきは、記憶というものが、夜の闇や雪の覆いと同じく、「事実」を装い、さらに覆い隠し、膨造することを免れないこと。記憶はいわば編集のようなもので、つい自分に都合よく創られる。そこでは世界も「私」の存在も、往々にして劇的に脚色される。アルゼンチンの作家の『異端審問』(中村健二訳)から。

2019・4・5

折々のことば

鷲田 清一 1425

いつも「二二」にいて、徳を積めるんです。

瀬戸内寂聴

人に笑顔を施すことを「和顔施」という。そのために普段からユーモアの感覚を磨いておくよう僧・作家は奨める。そして好きなことしかないこと。何かに呆けると悪口を言う暇もなくなる。日本文学研究者、D・キーンとの対談『日本の美德』から。演出家の久世光彦は、寂聴姉は「女」をやめなかったから「死んで桃色の骨になるだろう」(『美の死』)と書いて、先に逝った。

2019・4・6

折々のことば

1 4 2 6

~ 1 4 3 0

人間の欠点てのは長所になるときがある。その欠点の長所になったときがその人間の活躍するとき。

萩本欽一

折々のことば

鷺田 清一 1426

面は冷ならんことを欲し、背は暖ならんことを欲し、胸は虚ならんことを欲し、腹は実ならんことを欲す。

佐藤一斎

思考や判断は冷静になし、心根は温かく、私は遠ざけ虚心坦懐でいて、肝は据わり動じることなければ過つことはない、江戸後期の儒者は言う。憶えておくべきことを一つ一つ身近な物や場所に関係づける記憶法と同じで、心得も体の部位に関係づけておけばとっさの自戒として生きてくるかも。『言志四録』(川上正光全訳注)から。

2019・4・7

折々のことば

鷺田 清一 1427

人間の欠点てのは長所になるときがある。その欠点の長所になったときがその人間の活躍するとき。

萩本欽一

「虫が大嫌い」という女優に、突然「虫だよ」と突きつけるふりをする欽ちゃん。女優ははっと退き、身構える。その動作体のあらゆるところを使っているところがいいんだと指南する。自分がコケるのも鳩がコケるのに感動してそれに習った。「私の師匠ってのは鳩ですから」と。BSフジの番組「欽ちゃん劇場」(3月1日放送)から。

2019・4・8

折々のことば

鷺田 清一 1428

あと、追悼文とは、亡くなった人に読んで貰いたくて書くのだということにいま気付いた。

船曳建夫

真にかけがえのない人には、目下思い煩っていることを面と向かって言えない。はぐらかしたり、どうでもいいことを言って核心を外したり、「人生、いろんなことあるね」とどばけたり。人は遺影に向かってようやっと積年の思いを搾りだすことができる。そう、最初で最後に。文化人類学者が親友の作家・橋本治に宛てた追悼文「おい、橋本」(「群像」4月号)の末尾の言葉。

2019・4・9

折々のことば

鷺田 清一 1429

「普通じゃないから不幸せだ」と思っている人に、「どんな人でもそれぞれ幸せなんじゃないの?」と伝えたくて

南和行

南と吉田昌史は弁護士「夫夫」。8年前、結婚式を挙げた。「親不孝」だとなじる人もいたが、他人の幸福を否認することではか自身の幸福を確認できないのは寂しいと、南は思う。自分を大切に思ってくれる他人がいることは人生の礎の一つ。だから一方の吉田も少年事件の付添人に進んでなる。共著「僕たちのカラフルな毎日」から。

2019・4・10

折々のことば

鷺田 清一 1430

イラッとするのは甘えているから。そうか「お母さん、ありがとう」なのだ。

南和行

南は同性のパートナー・吉田昌史と共同で弁護士事務所を運営する。初めは二人の関係にとまどっていた南の母も、やがて事務所の雑用を受け持つことに。その母に南は「こは仕事場やねん。家とちゃうねん」と怒鳴る。けじめをつけたつもりだったが、横にいる吉田の表情から、「母だから甘えていられる」のだと気づく。昨日と同じ二人の共著「僕たちのカラフルな毎日」から。

2019・4・11

折々のことば

1 4 3 1 ~ 1 4 3 5

みんなコーナーを狙わなくなり、今のゾーンはかなり狭くなった。

土屋敏男

折々のことば

鷲田 清一 1431

ええ、夫はわたしのことを忘れてしまいましたとも。で、それが何か？

中島京子

夫が認知症だと知ると、人は気の毒そうに声をかけてくる。妻は「忘れてますとも。わたしが誰だかなんてまっさきに忘れてしまいましたよ」と心の内で憤然と呟く。妻の名を、結婚記念日を、住所も忘れても、私がそばにいないと不安げに探る。そう、触れている。夫が「この人」以外の者になったわけではない。小説『長いお別れ』から。

2019・4・12

折々のことば

鷲田 清一 1432

母親に似ないようにする、って力いっぱい入れて変顔で過ごすみたいなことなのかもしれない。

田房永子

幼少期より母親の過干渉に悩んできた漫画家は、『女の子だからピンク・花柄』という方程式」にも抵抗してきた。が、ある日、同じ圧迫を自分も娘に別な形で向けていることに気づき、戸惑う。漫画『お母さんみたいな母親にはなりたくないのに』から。母娘関係の胸苦しいまでの描写に、現代社会の歪な構造が重ね描きされている。

2019・4・13

折々のことば

鷲田 清一 1433

みんなコーナーを狙わなくなり、今のゾーンはかなり狭くなった。

土屋敏男

数々の、時に鬱鬱もののバラエティ番組をヒットさせたTVプロデューサーは、「取れない球を取れてこそバラエティ」と言う。コーナーぎりぎり。「そこをやらないうと、テレビは終わる」。このところの番組が横並びなのは、「問題を起こさず偉くなりた」と縮こまり、ストライクゾーンを狭くしているからだと言破する。日刊スポーツ(3月12日)でのインタビューから。

2019・4・14

折々のことば

鷲田 清一 1434

尊敬できる人間を持つて人間が光るんです。尊敬される人間は別に光らない。

倉本聰

「高倉健さんの映画は必ず上に人がいることで成立している」と、脚本家は言う。権力者も反逆児も「上に立つ人」がいないお山の大将。そこがだめなんだと。自分の不完全を知り、自分に優る者のほうから自分を量る。その人が後生大事にしているものは命を張ってでも護る。そういう「重し」が人には要ると。元TVプロデューサー、碓井広義との共著『ドラマへの遺言』から。

2019・4・16

折々のことば

鷲田 清一 1435

世間から忘れられてもいい。そうすれば一から蘇生できるんだから。

萩原健一

俳優の仕事は「撮影が終わることにリストラ、職探しの連続」だが、役を得るために媚びを売るとは意地でもしなかったシヨーケン。性懲りもなくあえて火傷しそうな場所へと自身を追い込んだのも、何ごともほどほどにという小賢しさに染まりたくなかったからか。自分をいつも自由のゼロ地点に置いておきたかったからか。本紙東京本社版2010年1月14日夕刊から。

2019・4・17

折々のことば

1 4 3 6

～ 1 4 4 0

じつは私は水のような文章が書きたい。

吉行淳之介

折々のことば

鷲田 清一 1436

「君はよく読んでいますね」

浅生鴨の高校時代の教師

劣等生だった高校時代、教師からの小説がらみの超変化球の質問に正答し、いたく感心された。贈られた一言に心の鍵が解けたと作家は言う。祖母に「優しい子」だと言われ、まさかと思うも以後、祖母の前ではそうあるとした。引き受けることで人は変わる。後に「お前がディレクターだ」と仕事を委された時、最終判断から逃げたのを今も悔やむ。『どこでもない場所』から。

2019・4・18

折々のことば

鷲田 清一 1437

多数のご遺体を、合同で、集団でどうしようが異常事態なんです

西村恒吉

東日本大震災時、ご遺体は、一旦仮埋葬したのち「改葬」することになった。ご遺体の掘り起こしという苛酷な作業を担う宮城県殯儀社の部長が、石巻市で異例な事態の中ずっと腐心したのは、ご遺族の別れの儀の工夫と、動揺するチーム9人の心の世話だった。東北学院大の学生・小田島武道による「改葬」の調査報告（金菱清編）呼び覚まされる霊性の震災学』所収』から。

2019・4・19

折々のことば

鷲田 清一 1438

自分の言葉に違和感を抱いているという君は、見込みがある。言葉に疑いを抱かないような人間の書く文章なんて碌なものじゃない

言葉で輪郭をなぞらないとそれが存在することすらわからないのだけれど、言葉にしてみようと何かを逸してしまった気がする。何か零れ落ちたような、あるいは逆に何か余計なものを抱え込んだような。いつも過少か過剰。そんな不均衡というちぐはぐが、言葉と感情のあいだにはある。詩人の人生相談集『ぼくの人生案内』から。

田村隆一

2019・4・20

折々のことば

鷲田 清一 1439

じつは私は水のような文章が書きたい。

吉行淳之介

「水道の水では駄目で、あれはカルキのにおいがする」と作家は続ける。妙な混じり物を嫌うのだ。「二オクターブ高い口調」とか、おもねりとか、そんな言葉の過剰な身振りを排す。「五月なら五月だけでいいじゃないか」と。が、それを文章作法として意識すると、また文章が引き締まる。随想「水のような」（萩原魚雷編）吉行淳之介エッセイ・コレクション3 作家』から。

2019・4・21

折々のことば

鷲田 清一 1440

声出すこと、堂々としていることは、何があっても絶対できるんですよ

里崎智也

ロッテ球団の元捕手は、キャッチャーとして一番大事なことは何かと同じ捕手の後輩に訊かれ、こう答えた。調子が悪くてもこれはタタでできる。成績よりも、こいつに任せておけば大丈夫という信頼を得るのが先だと。新しい職場で早く結果をと焦る人たちに贈りたい言葉。ニッポン放送のラジオ番組「高嶋ひでたけと里崎智也 サタデーバッテリートーク」（2月9日放送）から。

2019・4・22

折々のことば

1 4 4 1 ~ 1 4 4 5

「今日は、私があなたを生んだ日です」

ヤマザキマリの母

折々のことば

鷲田 清一 1443

漫画家の誕生日。珍しく電話をかけてきた母は開口一番こう告げた。「生むのになんかに頑張った自分もおめでとうだな、と思ったわけよ」と。ヴィオラ奏者でシングルマザーでもあった母は、奔放さでは娘より数枚上だった。人生に失望も落胆もなかった。「お母さん」然としない、最も身近な「大人のサンブル」だった。そのことに娘は救われてきた。『ヴィオラ母さん』から。

ヤマザキマリの母

「今日は、私があなたを生んだ日です」

2019・4・25

折々のことば

鷲田 清一 1441

南／北に分断されたままの祖国。その二つが「同居していられたただひとつの場所」が在日だと、かつて詩人は語った。「国」に帰るのは現時点では「お互いが背を向ける関係」へと立ち戻ること。だから理不尽な苦難に塗れながらも、二つを一つの視野に収められるここに留まると。そのための空き地を、この社会はどれだけ用意できたか。『クレメンタインの歌』から。

2019・4・23

ですからわたしは帰りません。

金時鐘

折々のことば

鷲田 清一 1442

あの人、「伝える」言葉を「伝わる」にする名人でした。

かたち

井 上 一 夫

伝えたいものが伝わっていないこと。放送作家・作詞家の永六輔は、どんな思いをこめること、市井で耳にした大事なことを伝える時は、逆に丁寧に「笑い」を集めて「いたと、彼の本を手がけた元編集者」は言う。教育もきつと同じ。教養育で育つより、そこにいれば子供が勝手に育つような大らかな場所を用意しておく。が先だろう。『伝える人、永六輔』から。

2019・4・24

折々のことば

鷲田 清一 1444

買物難民のために移動販売を始めたり、循環型社会に取り組む若者のために生ゴミを「仕入れ」たり、ホームレスを正社員に採用したりと「頼まれたら断らない」を旨としてきた山梨の「スーパードット」の元社長。この言葉には商店は地域と共に生きるものという思いがこもるが、巨大資本の攻勢と消費者の漂流への苦い思いもよぎる。その破産願末記『こうして店は潰れた』から。

2019・4・26

人の心はポイントカードのデータや全国平均では測れません

小林 久

折々のことば

鷲田 清一 1445

このスキヤキのぐつぐつという音がとてもよく聞こえただろう？

尺八の大先生

作曲家・武満徹は尺八の先生と料理屋で会食した後、先生に一曲所望した。二人の間には食べ残ったスキヤキ鍋があった。曲を聴くうち鍋の煮立つ音、それに往來の喧騒まで聞こえてきた。が、尺八の音は「害われ」なかった。だからこれはいい演奏だったと先生は言う。静寂の中ではなく、ざわめく竹藪の中を吹き抜ける音でありたいと。武満の随想「さわりについて」から。

2019・4・27

折々のことば

1 4 4 6 ～ 1 4 5 0

食べることは、もっと政治の中心に
あっていいはずなんです。

藤原辰史

折々のことば

鷲田 清一 1446

異常な状況では異常な反応を示すのが正常な
のだ。

ヴィクトール・E・フランクル

人はどんな異常な状況にも慣れる。戦争の惨禍にすら慣れる。ナチスの強制収容所に送られた精神科医は、みなが続々とガス室送りとなる中、次に送られる可能性があるとすればお前だと言われ、思わず「微笑んだ」。ずっとこの酷薄な場を逃れることだけを希っていたから。感情を麻痺させることでしか生き延びられない、極限の状況だった。『夜と霧』（新版 池田香代子訳）から。

2019・4・28

折々のことば

鷲田 清一 1447

誘い球に手を出すと軸がぶれる。

井之頭五郎

ドラマ「孤独のグルメ」シーズン3・第2話（原作・久住昌之、脚本・田口佳宏）D
VDから。輸入雑貨商を営む井之頭は、商
談で訪れた町々で腹捨（はらすて）するのを楽しみに
している。ある中華料理店に入り、「豚で白
い飯。直球勝負だ」と心を固めたのに、漂う
焼きビーフンの匂いにそそられる。で、自
分にこう言い聞かせた。一回一回を大切に
思うなら構えを崩さない。邪心は禁物と。

2019・4・29

折々のことば

鷲田 清一 1448

食べることは、もっと政治の中心に
あっていいはずなんです。

藤原辰史

自然にひたすら負担をかける社会とその
結果としての環境破壊、税収の再分配の歪
な構造、そして貧困、残飯の問題。食べる
ことはこれらの「最前線」にあり、「人間
つばさの終着点」でもあるのに、今そこが
弱っていると農業史家は言う。だからそれ
は社会変革の切り口にもなる。ホスピスケ
アに取り組む医師・徳永進との対談「言葉
がほどけるとき」（『明日の友』春号）から。

2019・4・30

折々のことば

鷲田 清一 1449

正解のなさというのが好きなんです。

徳永進

長くホスピスケアに取り組む医師は、患
者さんは貝みたいなものだと言う。マニユ
アルに変にこだわったつき方をするとか、
かちっと閉じてしまう。逆にスポラな対応
をすると、頼りにならんと思うのか、「ふ
にゃらー」と出てきておもむろに歩きだし
たりする。臨床は一筋縄ではいかない。昨
日と同じ、農業史家・藤原辰史との対談「言
葉がほどけるとき」（『明日の友』春号）から。

2019・5・1

折々のことば

鷲田 清一 1450

類は友を呼ぶ

いじわる

気の合う者は、自然と集まり、仲間とな
る。思いや好みの通じる人たちが寄り集ま
るのは、異質なところがあまりなくて、心
をほどこいていられるから。でも、友人であ
るといのは本来、「もう一人の自分」をも
つことではなく、自分のことを自分とは違
う眼で見ってくれる人がいることであるはず
だ。じっさい、つきあいも長くなると、逆
に相手との違いがより微細に見える。

2019・5・2

折々のことば

1 4 5 1

～ 1 4 5 5

自分で塗りたくった顔をこわがる子供たち。彼らは子供である。

パスカル

折々のことば

鷲田 清一 1451

人間のからだ、それは皮膚という生きた袋の中に、液体的なものがいっぱい入っていて、その中に骨も内臓も浮かんでいるのだ

野口三千三

このことは、床に横たわり、誰かに足首をもって揺らしてもらえはすぐにわかると、野口体操で知られる体操の理論家は言う。物体の運動は中が固体か液体かで拳動が大きく異なる。ゆえ卵は生卵よりよく回転する。身体を使いこなすには、日頃から「皮膚につつまれた液体を実感する」ことが大切だという『原初生命体としての人間』から。

2019・5・3

折々のことば

鷲田 清一 1452

剣をとる者はみな、剣で滅びる。

マタイによる福音書（新約聖書）

暴力で事を解決しようとする者は、いずれ暴力でなぎ倒される。暴力は何も生まない。同じように、金で身を立てる者は金で身を滅ぼす。まるでブーメランのように。が、そうした宿痾から言葉の力で脱出しようとする人もまた、同じ言葉の力で崩壊することがある。人生の苦難は、言葉を得ることで解消されるわけではない。人は同じ苦難にこんどは言葉の世界でぶち当たる。

2019・5・4

折々のことば

鷲田 清一 1453

自分で塗りたくった顔をこわがる子供たち。彼らは子供である。

パスカル

たとえば。物を何でもお金で換算しているうち、自分の家、自分の能力、それどころか自分の存在ですら、お金に直して考えるようになる。最後は自分の葬儀の設えのランクまで。人はみずから編みだした制度に、あるいは思考の性癖に仕返しされる。人は幾つになっても子供と同じ過ちをくり返すものらしい。17世紀フランスの思想家の『パンセ』（前田陽一・由木康訳）から。

2019・5・5

折々のことば

鷲田 清一 1454

檀那（旦那）

仏教語由来のことば

古代インドからやがて西洋に、東は日本にまで伝わった言葉の一つ。「檀那」はサンクリット語のダーナが源。それがラテン語のドーナム（贈り物）となり、さらに英語ならドナーやドネーションとなる。檀那もドナーも、その人にとって最も大切なものを人に施す。人によりそれは金銭であり、自身の臓器である。与えることは、民族を超えて、普遍的な行為とみなされてきた。

2019・5・6

折々のことば

鷲田 清一 1455

私のふるさととは、戦争の道具になったり、利権の対象になる土地ではなく、日本の言葉だと、はつきり言うつもりです。

石垣りん

数え年15で銀行に勤め始めた詩人は、「エラクならなければならないのは、ずいぶん面倒でつまらないことだ」とずっと思ってきた。暮らしは儉しいものだったが、「権利金」など払わなくてよい、言葉という、「人を限りないゆたかさへさそう力を持つ」ものに恵まれていたという。自伝的随想「詩を書くことと、生きること」から。

2019・5・8

折々のことば

1 4 5 6 ~ 1 4 6 0

ダメな部分も抱えた生身の生を、
堂々と突き進んで行って下さい。

西村賢太

折々のことば

鷲田 清一 1456

「かみまず」

動物園の立て札

大阪圏の動物園では猛獣の檻の前にこんな立て札があるそうだ。そういえば大阪府警の痴漢防止ポスターは「チカンアカン」。いずれもとにかくストレート。ただ「おっちゃん、いってるか」と訊かれたら「いってる」と語を重ねる。「一回だけではあいない」と語を重ねる。「一回だけではあいない」という気持ちに働くからだと、日本語学者の尾上圭介は『大阪ことば学』で言う。大阪弁、言葉で人を触りにくる。

2019・5・9

折々のことば

鷲田 清一 1457

ダメな部分も抱えた生身の生を、堂々と突き進んで行って下さい。

西村賢太

作家は母校、東京都江戸川区立二之江第二小学校を訪ね、「創作」の授業をした。自分のダメな部分を粗上（こじょう）にのせる「私小説指南」だ。凹んだ部分はあつてあたりまえ、すぐに整える必要もない。それを隠しつつ生きるほうが「厄介なもの」。それを書き切った児童たちの「捨て身の勇気」を称え、作家は作品集にこう書き添えた。エッセー集『小説にすがりつきたい夜もある』から。

2019・5・10

折々のことば

鷲田 清一 1458

「大人」が手をさしのべる？ ちょっと待ってくれ。大人とは誰だ。

中島も

人というのは、迷い、挫け、おろおろしたあげく、「生きる」というその路上において、たった一人ではつんと立ちつくしている子どものようなものだ、作家は言う。だから「大人」なんて存在しない。「大人」とは、その「迷い子」が、何をまちがえたか、「愚鈍と忘却と教条」でみずから弄んだ末のその「なれの果て」でしかない。エッセー集『砂をつかんで立ち上がる』から。

2019・5・11

折々のことば

鷲田 清一 1459

精いっぱい喉（のど）ったり、茶化（ちあ）したり、すねたり、遊んだりさしてもらいますぜ、というところで成立（なりた）っている。

吉本隆明

それが芸能だと詩人・評論家は言う。芸能人は、道徳や法が幅を利かすところではそれに従うふりをするが、服（う）うことはない。善悪にまみれつつも、それを裁く社会の眼差しに添い寝したりはしない。世間の声に押されて、あるいは「法律の尻馬（しりうま）にのって」人を裁く側に回れば、もはや芸能ではない。評論集『重層的な非決定へ』から。

2019・5・12

折々のことば

鷲田 清一 1460

芸能に近づかなければ怪我（けが）もしないかもしれない。しかしそれがなければ、人間は生きていけない。

爆笑問題・太田光

人の感情は優しくて残酷。グロテスクなものだと漫才師は言う。芸能は音楽と同じく、そういう感情を動かし、思いがけない所へ導きもする。人を救いもするが傷つけもする。芸能は教科書にあるような「単純な綺麗事」をはみ出る部分を引き受ける。そこに蓋（おおい）をしたら終わりだと。《芸人語》第2回「罪」（二冊の本5月号）から。

2019・5・13

折々のことば

1 4 6 1 ~ 1 4 6 5

この世には遊びに来たの。踊って
転んだら笑ってそれで80年よ。

有間しのぶ

折々のことば

鷺田 清一 1461

ボクハネエ、ホソイオツキサマガスキナンダ
ヨ

坂井律子の息子

TVディレクターの坂井は自らのがん闘病を綴る中、昔、保育園で遅くまで迎えを待っていた息子が帰り道、こう呟いたのを思い出す。人には「何の打算もなく」「何かを好きになる」「瞬間」がある。そしてそれを伝えたい人に言葉で伝えられるのだと改めて感じる。闘病中、友人らが送ってくれた日常のとりとめもない報告もまた確かな支えだったと。『へいのちとがん』から。

2019・5・14

折々のことば

鷺田 清一 1462

定められたダンスを踊ることが「楽しい」と
思ってしまう体になりたくない。

村上恵

「貯金」と「定住」を軸とする生活から外れ
たくて、発泡スチロールで作った家を担い
で日々移動する美術家。行く先々で人は面
白いと認めつつも「これじゃ食えないだろ」
と心配してくれる。でも、安定したその収
入と健康な体で何をするかまでちゃんと考
えているのか。面白いこととして食えない世
界のほうが変わるのではないかと独りごつ。
旅日誌「家を せおって 歩いた」から。

2019・5・15

折々のことば

鷺田 清一 1463

この世には遊びに来たの。踊って転んだら笑
ってそれで80年よ。

有間しのぶ

漫画『その女、シルバ』①から。「やり
直すこともとり戻すことも」ついにできな
かったと嘆く主人公は、福島から東京に出
てきて倉庫で働く「恋人なし、貯金なし」の
40歳。ひよんな出会いから、高齢のホステ
スばかりが働くバーで見習いとして働くこ
とに。そこで長老の女性からかけられた言
葉に、体に水気が甦る心地がした。苦労は
人生の「取りこぼし」でないと教えられて。

2019・5・16

折々のことば

鷺田 清一 1464

おれ達よその土地の楽しみ奪うような悲愴
さはいらねんだ。

有間しのぶ

昨日と同じ漫画『その女、シルバ』①
から。震災で家も友人も職場も失い、ぬけが
らのようになっていた弟が、ようやくと前
向きになって動きはじめた。福島から東京
に出てひとり細々と働く姉が「なんかでき
ることない？」と訊くと、「姉ちゃんだって
カツカツだべ」、俺は「さすけね」（なん
ともない）、それより「疲っちゃうら帰って
来」と返した。見守ることにつながる家族。

2019・5・17

折々のことば

鷺田 清一 1465

大きな問いに答えようとするれば、答えは必然
的に大きな言葉になってしまう。

福岡伸一

人間や生命がそもそもなぜ存在するのか
という問いは重要だが、その解像度は低い
と生物学者は言う。それより身近な現象の
有り様を丹念に見るほうが世界の解像度は
上がると。例えばコミュニケーションにつ
いても、その本質は何かと問うより先に、
椅子をどのように並べたらいいか考えるべ
きなのだろう。本紙の連載コラム「福岡伸
一の動的平衡」（昨年6月7日朝刊）から。

2019・5・18

折々のことば

1466

～1470

偏見を得ようとするなら、旅行するにしくはない

伊丹十三が伝聞した言葉

折々のことば

鷺田 清一 1466

八年かけて少しずつ、たぶん私は諦めたのだ。人生の不公平を。いたたまれなさを。

坂本千明

イラストレーターの随想『錨』(筒井大介編『あの日からの或る日の絵とことば』所収)から。自分よりしっかり者だったのに震災直前、病で逝った友。被災を免れた青森の両親も、東京とともに余震に怯えた猫も喪って、足もとの覚束ない日々を送る。彼らの不在が静かに身に沁み入る中、独りこそう思う。生きている限り「たとえじたばたしてでも錨は自分でおろすしかない」と。

2019・5・19

折々のことば

鷺田 清一 1467

「壊れるかもしれない」、「壊れそうだ」というのを、壊さないように大事に存在させたい。

森英恵

ファッションデザイナーはガラス細工が好きで、行く先々でグラスや花瓶を買い求める。「壊れてしまえばおしまい」という儚さに惹かれるのだと言う。服飾のデザインも「今の瞬間をとらえ、それを切り取って形に表わす」仕事。儚さを愛おしむこととしてあったと。あたりまえのように続く日常の生活もそんな愛おしさをもって向きあえればいいな。回想録『ファッション』から。

2019・5・20

折々のことば

鷺田 清一 1468

今まで焦点が当たっていなかった人すべてだと言えはいいんだ

若者自立支援の現場で

労働経済学者の玄田有史は、若年雇用の実態を分析する中、フリーターでも失業者でもない、無業者の存在に気づくが、的確な定義ができずに苦しんでいた。支援者の勉強会でそのことを打ち明けると、ベテランの支援者が「定義なんかできなくてもいい」と言い、こそう続けた。存在するのに見えていない人たちを見えるようにするだけでも大仕事だと。『人間に格はない』から。

2019・5・21

折々のことば

鷺田 清一 1469

人間で強いと思っているうちはすぐ強いんですけれど、弱いと思ったらこんなに弱いものはないんですね。

姉崎等

「アイヌ民族最後の狩人」の姉崎は若い頃、山中で出くわしたクマを間一髪仕留める。日も暮れてさらにとどめの一発をと近づいた時、相手は暗闇でも見えるが自分は見えないことに気づき、青ざめた。後退しようにも足が縛れた。体の留め金が外れたかのように。映像作家・片山龍峯による聞き書き『クマにあったらどうするか』から。

2019・5・22

折々のことば

鷺田 清一 1470

偏見を得ようとするなら、旅行するにしくはない

伊丹十三が伝聞した言葉

俳優・映画監督は滞欧中、こんな言葉を思い出し、ハタと膝を打った。人は旅行中、ある国の印象をごく些末な体験から作り上げる。店で受けた応接とか税関で待たされた時間とか。迎える側も同じ。ともに「儚い印象」から「確乎たる結論」を導く。旅を、現実から離れた「仮の」時間と軽く見ているうちは、人はついそういう偏見に陥ると言う。『ヨーロッパ退屈日記』から。

2019・5・23

2019 · 5 · 28

折々のことば

1 4 7 6 ~ 1 4 8 0

私たちはみんなもともと、神様の養子なの

シンシア・ルーブル

折々のことば

鷲田 清一 1476

ファシズムにおいて禁じられているのは反ファシズムの発言などではなく、沈黙なのだ。ファシズムは「人に沈黙を強いる制度」のように言われるが、実は逆で、誰もが同じことを同じように語る、そういう事態を「さりげなく成立」させる制度だと評論家は言う。今でいえば「付度」をいくらかを揃えて糾弾しても事は解決しない。そこには、語りの同調に抗う、沈黙や外し、時に猫かぶりといったしたたかな戦略が要ると。「前衛と鎧冑」(「すばる」6月号)から。

2019・5・29

折々のことば

鷲田 清一 1477

長い歴史の中でもみくちやになってきたフランスのブルターニュ地方では、人々はよくこう口にする、そこで暮らしたことのある友人から聞いた。ここはいつも厚い雲が垂れ込めているけれど、太陽はいつだって我々の上にある。自虐的な表現の隙間から一条の光が射している。光があるから影もできる。その点、「ガラスの天井」という障壁は、その向こうがはっきりと見える。

2019・5・30

折々のことば

鷲田 清一 1478

しみも ちゃんとして 砂抜きしなきゃ うまいしみ汁は できないんだよ。

漫画『深夜食堂』13から。中学時代の憧れのマドンナと40年ぶりに再会し結婚した男。妻は再々婚で、娘の出産の世話のためしばらく不在に。夫は、妻が昔の男と会っているのではと妄想し、電話で妻を傷つけてしまう。その悔いを飯屋の主人に打ち明けると、「帰るキツカケ」なくして帰りつらいんだから迎えに行つてやんなよと諭される。引っかけを先に洗い流すことだ。

安倍夜郎

2019・5・31

折々のことば

鷲田 清一 1479

「ああおもしろかった」と臨終の際にどこまで言えるかが、限りある生の勝ち負けを決めるものさしだと私自身は思っている。

あえて「勝ち負け」と言うなら、との但し書きをつけて、ジャーナリストはこう書く。社会的な活動も同じで、いくら正しいことに取り組んでも、「それが苦しげに見えたら」「つまり当人がそれを楽しんでいるの」でなければ、共感を集められない。もちろん、「おもしろさ」の中身は多様であれはあるほどよい。『スローライフ』から。

筑紫哲也

2019・6・1

折々のことば

鷲田 清一 1480

私たちはみんなもともと、神様の養子なの

名古屋で、妊娠・中絶のカウンセリングと妊婦や産後の母子のホームステイの受け入れに取り組む団体の代表を務める米国人宣教師は、自身もダウン症の3歳児を養子に迎え共に暮らす。子供を一人で育てられずに他人に託すのは責められるべきことでなく、むしろ家族を拡げること。「社会的養育」のさまざまな形を論じる『フォスター』(著・白井千晶、写真・江連麻紀)から。

2019・6・2

折々のことば

1 4 8 1

~ 1 4 8 5

児童に遊戯を考案して与えるということは、昔の親たちはまるでしなかったようである。

柳田國男

折々のことば

鷲田 清一 1481

すぐ近くの過去「昨日」より、もう一日遠い過去の「二昨日」の方が自分にとっては濃密だと思ふことはあることです。

山藤章二

ここで身を退けば自分は終わると命がけで斬り結んだものの、心がぐしゃっと崩れるのをすんでのところで防いだものの、心の張りが弛む時にかぎって疼きだすもの。これらに人はある「発酵」の時を置いてようやく気づく。翻って未来についても、「明日」以上に「明後日」を案じる人ではない。イラストレーター随想集『昭和よ、』から。

2019・6・3

折々のことば

鷲田 清一 1482

「二番手の奥床しさ」はとても文化的な心理なのだ。

山藤章二

スポーツ記事は「一番でなければ意味がない」みたいな価値観で動いているようだが、二番手もしくは敗者のほうが「人間的挫折感、いま一步の残念感、恥ずかしさ、少しカゲのある栄光感」といった機微に富んではるかに「滋味深い」と、イラストレーターは言う。そして（！）、自分が長らく「阪神ファン」なのもこうした理由によると。昨日と同じ随想集『昭和よ、』から。

2019・6・4

折々のことば

鷲田 清一 1483

人間は人に寄りついて暮らすものではない。長年ずっと土地に寄りついて生きてきたもんじゃ。

村田喜代子

小説『飛族』から。遣唐使が中継点として立ち寄ったといわれる西の離島は、今は92と88の女性二人が住むばかり。大分に嫁いでいた娘が母を引き取るつもりで里帰りするも、きっぱり断られる。海に潜り、土を耕し、陽光と雨風と鳥たちから時に乱暴な挨拶を受けた女たちは、地に打たれた棒杭のように《垂直の生》を生きてきた。

2019・6・5

折々のことば

鷲田 清一 1484

楽しいと恐ろしい

村田喜代子

90前後の女性が二人きりで暮らす西の離島。今後のことを相談しようと里帰りした娘が今も海に潜る母の連れにウェットスーツとフィンの装着を勧めると、こう返された。体が冷える、息が切れるという苦痛があるから、耳を壊したり、命を落としたりする前に引き返せる。それより船幽霊の障りを祓う「呪文は忘れるでなかぞ」と逆に諭される。昨日と同じ小説『飛族』から。

2019・6・6

折々のことば

鷲田 清一 1485

児童に遊戯を考案して与えるということは、昔の親たちはまるでしなかったようである。

柳田國男

年上の子が年下の子の世話を焼くという「小児の自治」があり、自分たちで遊びを考案したし、また古い遊戯法もおのずと伝わった。くわえて大人の側も「遠からず彼らにもやらせることだから」と、仕事ぶりも草相撲や盆踊りに興じている姿も、隔てなく見せていた。与えるのではなく見せるという形で、子供たちが勝手に育つのを待った。民俗学者の『こども風土記』から。

2019・6・7

折々のことば

1 4 8 6

~ 1 4 9 0

物を使い捨てにするのはそれを作る人々を使い捨てにするようなものだ

ナオミ・クライン

折々のことば

鷲田 清一 1486

今回はうまく行くのではないかと思つて、失敗したやり方を何度も何度もくり返すしか、人間には能がないのだろうか。

イヴァン・シュイナード

環境危機や富の偏在という喫緊の課題の解決にビジネスとして取り組む米国企業・パタゴニアは、成長と短期利益を目標から外し、「仕事と遊びと家族の境目を消し、収益は地域社会と環境活動にも還元する。この実験を無謀と言う人には世界は絶対変えられないと、創業者は『新版 社員をサードフィンに行かせよう』(井口耕二訳)でいう。

2019・6・8

折々のことば

鷲田 清一 1487

物を使い捨てにするのはそれを作る人々を使い捨てにするようなものだ

ナオミ・クライン

限りなき成長を求める市場の大量消費/廃棄のサイクルから抜け出ないと、人の搾取もなくならないと、カナダのジャーナリストは言う。店の棚には「安すぎる」商品が並ぶが、これをラッキーと思う前に、どんな経費を削つてこの価格であるのかを想像しなければ。米国の実業家、Y・シュイナード著『新版 社員をサードフィンに行かせよう』(井口耕二訳)に寄せた序文から。

2019・6・9

折々のことば

鷲田 清一 1488

老いるとほんとうに「取り返しがつかない」のです。

小澤勲

認知症を病む人たちに共通の感情は「寂しさと喪失感」だと、精神科医は言う。「取り返しがつかない」というこの感覚、若い人にはわかりにくいだろうが、なじんだ人がみな先に逝つてしまふ、「この世には自分の来し方を知らない人たちが残されたときの寂しさは、私にも身に染みます」と。やり直しということがもう脳裏をよぎらなくなる……。『ケアってなんだろう』から。

2019・6・11

折々のことば

鷲田 清一 1489

その時は、取材をしながら、潜っているような感じになっていたわけ。

川上泰徳

長く中東を取材し、先頃パレスチナ難民キャンプ70年の歴史をまとめたジャーナリストは、虐殺で家族を喪つた難民たちを取材している時の気分をこう表した。現場の悲嘆を論として組み立てるには、素潜りする時のような長い無呼吸の持続が必要なのか、帰国し執筆に取りかかるも筆はびたり止まったという。作家・佐藤正午との対談「同級生の語らい」(『図書』5月号)から。

2019・6・12

折々のことば

鷲田 清一 1490

僕にとって、ニューヨーク公共図書館は民主主義の実例であり、アメリカの最も優れた一面の象徴なんだ。

フレデリック・ワイズマン

ドキュメンタリー映画「ニューヨーク公共図書館」のパンフレットから。この映画では、書籍の収蔵・案内に止まらず、それぞれに困難を抱えるすべての階層、民族、世代の人々の「手助け」に情熱を注ぐスタッフたちの姿が撮れたと、監督は語る。その囚われのない眼が、無味乾燥ともみえるこの空間に「民主主義の柱」を発見した。

2019・6・13

折々のことば

1491

～1495

世界中の人がお前を悪いと言うなら、世界中が間違うとる。

西原理恵子の父

折々のことば

1493

世界中の人がお前を悪いと言うなら、世界中が間違うとる。

西原理恵子の父

高校を強制退学になった日、二番目の父は家でちんときものを着て待ち、ひとと抱きしめてくれたと漫画家は言う。「みっともない」などは言わず、猫かわいがりというか、自分の存在を無条件に認めてくれた。『洗えば使える泥名言』から。この経験は大きい。自分を否定しないですむしいくら何でもそれは言い過ぎだと、以後自分を過大に評価することもなくなるだろう。

2019・6・16

折々のことば

1491

夫「お前は社会を知らないから駄目だ（世帯主の俺が行く）」、妻「あなたは社会の歯車だから駄目よ（私が行く）」

ある夫婦

公共的な「熟議」の実験と運営に取り組む団体「構想日本」の「J.NEWS」第54号編集後記から。原発をめぐる住民主体の協議会への参加依頼が妻あてに届いた時、夫婦間でこんな会話があらたらしい。地域の課題を行政や専門家に委ねず、わがごとくとして引き受ける意気や良し。さてこの二人、その後どう動いたか、知りたい。

2019・6・14

折々のことば

1494

一見眉間にシワが寄ったりムツとするような言葉こそ、実は自分を助けるフレーズになるかもしれない

壇蜜

昨日と同じ漫画家・西原理恵子の『洗えば使える泥名言』の「解説」から。「泥名言」とは、市井の人々が言い放つ「泥つきゴボウみたいに見た目は悪いけど、洗えば使えるし、煮込めば味が出る」言葉。例えば「ライオンは弱い奴を狩りに行く」。タレントの壇はこの「エグい言葉」も「その場にねじ伏せられない気持ちを与えてくれる」と記す。

2019・6・17

折々のことば

1492

平和な時には、国がいのちを守ってくれて、戦争になったら国を守るためにいのちを使う、という国家生命保険には入りたくないのです

多和田葉子

そもそも国といのちはいずれかを選ばねばならぬ選択肢ではないと、ドイツ在住の作家は言う。政治に求めたいのは、いのちでなく「人権」の保護。そこでいう「人間」の概念を諸文化がこれまでどう理解してきたかも丹念に分析しておこうと。訪問授業「いのちと人間」（桐光学園中学校・高等学校編『高校生と考える21世紀の論点』）から。

2019・6・15

折々のことば

1495

ほとんどの人は、普通に楽しく暮らしたいはずだ。「生産性の向上」は、そうした自然な生き方を犯罪者扱いする。

鈴木健

IT化で各人のアウトプットが複雑化してくると、擦り合わせのための時間も増え、会議を減らすための会議まで開かれる。生産性向上のあくなき追求は資本主義の病理のようなもの。それは働く人の幸福につながるどころか、逆に日々の生活を息苦しくする要因にもなっていると、スマートニュースの会長は言う。『究極の会議』から。

2019・6・18

折々のことば

1496

～1500

日本では有名な人はたいしたこと
がない。無名の人が偉いのだ。

中井久夫

折々のことば

鷲田 清一 1496

民族的殺戮はつねに、もっとも美しい口実——正義、平等、独立、人民の権利、民主主義、特権に対する戦い——のもとになされる

アミン・マアルーフ

レバノン生まれでパリ在住の作家はフランス人かレバノン人かと訊かれると、「両方です」と答える。「私」は職業、民族、文化伝統など複数集団への帰属の交点にある。本来は普遍的な概念も、アイデンティティをただ一つの帰属に限る思考と結びつく「排除の道具」になってしまふ。『アイデンティティが人を殺す』（小野正嗣訳）から。

2019・6・19

折々のことば

鷲田 清一 1497

きつとね。俺たちは呑気なんだよ。人を呑気にはさせない世のなかに逆らって生きている

片岡義男

短編小説「この珈琲は小説になるか」から。かつてライターと編集者として出会った同い年の男二人。当時通ったバーで働いていた女性が喫茶店をやっているというのでそこに席を移す。女性に、あいかわらず「床屋談義はしないのねと言われ、不平不満を世の中のせいにするのが愚痴のこぼし合い、そんな無様が嫌で、世間の速度に合わず生きてきたと返す。悔し紛れでなく。

2019・6・20

折々のことば

鷲田 清一 1498

日本では有名な人はたいしたこと
がない。無名の人が偉いのだ。

中井久夫

その偉さは「勤勉と工夫」にあると精神科医は言う。なかでも「既存のものをあまり目立って変えないようにし、外見は些細に見える変更の積み重ねによって重大な障碍を迂回し、精力の浪費なくして、中程度の目的に達する」工夫が尊いと。昨今のその痩せ細りを憂いつつも、それはしかし大問題の処理に弱いということでもあると注意を促す。随想集『昭和を送る』から。

2019・6・21

折々のことば

鷲田 清一 1499

寝て寝て寝て何になるか、一刻を惜しんで勉強せよ。

櫻井正一郎

京都大学には出版記念会をしない伝統があるらしい。高名な作家でもある助教授が出版記念会を開いたところ、民族学者の梅棹忠夫が、これきりにしていただきたいと釘を刺したという。これを耳にした英文学者の櫻井は、友人が寄せてくれた自著の「跋」に寝め言葉が一切なかったことをよしとしこう記した。研鑽は馴れあいの中でできぬと。『京都学派 醉故伝』から。

2019・6・22

折々のことば

鷲田 清一 1500

ほんとに驚愕したのでしょうか。或いは、礼拝ということの意味を、ほんとに覚ったのではないのでしょうか。

獅子文六

「明治女書生の生き残りの一人」である元教員は、隠退して芝居見物にかぶれた。ある役者に入れ込み写真を集めるも、不意の病死。続いて元同僚の男性教師も喪う。写真がないので仏壇に役者の写真を立て、回向する。周りは「ボケちゃった」と言うが、魂を弔うのに誰彼などない。自分もやがて誰でもなくなる。短編小説「写真」から。

2019・6・23

折々のことば 1501 ～1505

物事には納得できる矛盾と納得できない矛盾がある。

大竹伸朗

折々のことば 鷺田 清一 1503

新品の真白い紙を目の前にすると、自分が生まれる以前のことから責任をとらされるように居てこちが悪くなる。

道に落ちていた物、放置された物に惹かれると美術家は言う。例えば「潮風にさらされ流れ着いたもの」には、都会の廃棄物と違い、「ゴミ自身による新しい世界」ができていて。不要とされた後「海をゆっくりと漂流しもう一つの形に行き着く」ゴミこそ幸せに見え、つい「共同作業」したくなる。随想集『既にそこにあるもの』から。

大竹伸朗

2019・6・26

折々のことば 鷺田 清一 1501

千利休は、唐物道具や画を飾り、見せるそれまでの茶の湯を「侘び茶」へと刷新した。「おもてなし」や「一期一会」として語られる利休の茶のその奥には、普段の空間に普段とは違う空間を、しかもミニマムの設えで立ち上げる、そんな企てがあったと、武者小路千家家元後嗣は言う。インスタグラムをまとめた『茶のある暮らし』から。

千宗屋

2019・6・24

折々のことば 鷺田 清一 1504

このうち、感覚として納得できる矛盾は「大きな可能性を持つ」と美術家は言う。たとえば、人が考えた作品コンセプトなどものともしない、物体の「圧倒的に強い形」を前にすると、なんだか「ポジティブなあきらめの気持ち」になる。そういう「納得できる矛盾」の中にこそ、世界とのこれまでにないつきあい方が見つかる。昨日と同じ随想集『既にそこにあるもの』から。

大竹伸朗

2019・6・27

折々のことば 鷺田 清一 1502

なる程、球種でなく、自分なりのコースを見きわめようとすると空を見ることになるから、あの目になる。

プロ野球ファンのスタイリストは、プレイそのものより選手の「不敵な面構え」に惹かれたと言う。なかでも落合博満。打席でも「キツ」と鋭く一点を見つめるのではなく、瞳はむしろ「うつろでつばら」。その所作から、投手をも呑み込む見えない磁場が生まれ、球がそこへと吸い込まれてくるのか。随想集『スタイリストの原ですが』から。

原由美子

2019・6・25

折々のことば 鷺田 清一 1505

そのゴミを起点として、一条の光が闇のなかを走った。

戦時下、妻と二人、倏しく暮らす男は、朝は掲載のあてもない原稿に取り組み、昼から出版社で嘱託として働く。妻はいつもどおり部屋を掃除してから働きに出たのに、その二時間後、小指の先ほどのゴミが畳の上に「生まれ」ていた。丁寧に紡がれてきた暮らしの中にそれこそ野花のようにひっそり咲く麗なゴミ。男は自分の今在る姿をそれに見た。短編小説「一条の光」から。

耕治人

2019・6・28

折々のことば 1506 ～1510

わが母は襦袢とりかへられながら
梟のやうに尊き目する

川野里子

折々のことば

鷺田 清一 1506

尊敬に値しない民族は存在しない。

山田慶児

車の進化を遡ると、轡を牽引する動物の繫駕法に行きつく。ボタンで留める袖付きの上衣も元はチュルク・モンゴル民族の発明だと、A・オードリクルの技術論『作ること 使うこと』は教える。本書を訳した科学史家はそのあとがきで、文明は「幾多の民族の寄与によって今に至ると言う。それぞれの民が物と、そして自身の身体と、丹念な対話と工夫を重ねた結果として。

2019・6・29

折々のことば

鷺田 清一 1507

かつては多くの大人が、一人の子と仮の（擬似的な）親子関係を結んでいた。

田中優子

「仮親」という風習である。妊娠5カ月の祝いに帯を巻いてくれる帯親。出生時の取り上げ親、乳つけ親、名づけ親。故あって子を引き取る「拾い親」。それに「守姉」といって隣家の娘などが子育てを引き受けたと、江戸文化研究家は教える。子どもが生まれれば、誰の子かにこだわるより先にみなで手塩にかけて育てた。コミュニティの未来のために。『カムイ伝講義』から。

2019・6・30

折々のことば

鷺田 清一 1508

自分のコトバがしをするということとは、自分の生活体験から離れずに考えられるようなコトバを見つけたということです。

福田定良

家族のこと、職場や地域のこと。人には専門家の言論に委せておけない「ここだけの問題」というのがある。しかもそれは「おいそれとは解決できない問題」を孕む。だから専門家の示す一般的な原則以上に、住民それぞれの「ここ」を交える、地に足ついた「話し合い」が大事なのだと、哲学者・評論家は言う。遺稿集『堅気の哲学』から。

2019・7・1

折々のことば

鷺田 清一 1509

今の若い人たちは、「意味」より、「意味ありげ」を好んでいるのだ

里見弾

五の内容を十に、二十に、零さえ幾つかに見せようとする言い回し。そんな「意味ありげ」が大嫌いだと作家は言う。含蓄も余韻もそれこそ余計。こう考えるところが見えると確と示すところに文章の極意はある。五を五で著すと、「平凡」だ、「わかりすぎて、ちっとも面白くありません」などと言う輩がいるが「おかしいものだ」と。戦前の昭和に書かれた随筆「二三の神経」から。

2019・7・2

折々のことば

鷺田 清一 1510

わが母は襦袢とりかへられながら梟のやうに尊き目する

川野里子

歌集『欲待』から。わが老母が静かに逝くまで、日々、彼女を抱き起こし、一匙ずつ食を供し、襦袢を替え、体を拭いてくれた人たち。その一人一人がたたえる微笑みはどこから湧いてくるのかと歌人は思う。そして「次第に狭量になってゆく世界で、枯れ枝のような一人の老人は、小さな献身の連続によって温められ、尊い命となることができた」と、「あとがき」に記した。

2019・7・3

折々のことば

1 5 1 1 ~ 1 5 1 5

自らを他人と比ぶることなかれ
同じいのちは他に一つなし

遠藤滋

折々のことば

鷺田 清一 1513

「君が今やりたいことを、まっすぐに人に伝えながら、出来ないことは、みんなに手伝ってもらって、堂々と生きてゆきなさい。」

遠藤滋

「だって、君はひとりで勝手に何かをやってゆくことなんてできないだろう？」と。幼時より脳性麻痺による障害をもつ養護学校教員は、やがて24時間要介護の身となり退職。介護経験のない若者たちに身を預けつつ、自室を「学校」に見立て彼らの悩みに耳を傾ける。伊勢真一監督のドキュメンタリー映画「えんと」(1999年)から。

2019・7・6

折々のことば

鷺田 清一 1511

権太はお前の家のもんだ。五代目(幸四郎)のもんだ

昭和の歌舞伎役者、二代目尾上松緑の父、七代目松本幸四郎は、三男松緑が15歳の時、名優菊五郎に預けた。以後、菊五郎がつける稽古に一切口を挟まなかった。「すし屋」の権太は、江戸期に五代目幸四郎が得意とした演目。松緑が初役を勤めた際、菊五郎は客がいるのも構わず大声で叱り、せりふまで付けたという。子を他人に預ける文化。巷から消えて久しい。『松緑芸話』から。

六代目尾上菊五郎

2019・7・4

折々のことば

鷺田 清一 1514

自らを他人と比ぶることなかれ
同じいのちは他に一つなし

長く寝たきり状態にある大学時代の友人、遠藤を、伊勢真一監督は20年をおいて再び撮る。遠藤は、食事から排泄まで、介護にあたる若者たちに命のすべてを晒して生きてきた。弱音も見せた。発声が困難になった今も、上唇をつまんでもらい必死で語りかける。その彼が、自分の生存の意味を量りかねている若者たちにあてた歌。ドキュメンタリー映画「えんと」の歌から。

遠藤滋

2019・7・7

折々のことば

鷺田 清一 1512

「書く」ことから「虚栄」を引き去って何が残りうるか

磯田光一

戦争が終わり何の「傷」も負わなかったはずのない文学者が、開き直り、人を揶揄し、時に道化めいたりしつつもついに誰一人筆を折らないと、苦しい思いでやはり書いた文芸批評家・伊藤整。その述懐を引きとるかのように、同じ文芸批評家はこう書いた。「虚栄」以外に残るものがないのなら、この「絶望の意味を問う」ところまで立ち戻るしかない。『戦後批評家論』から。

2019・7・5

折々のことば

鷺田 清一 1515

みんな、ここににいる人って……なんか人生がポロポロ出てきちゃうみたいな感じで。

遠藤滋の介護スタッフ

介護経験のない若者らが、寝たきりの元教員・遠藤を、途切れなく交代で介護している。その一人が、みんな漂流してここにたどり着いたみたいだと呟く。遠藤に「寄り添う」というより、みながここに「寄り合う」のだと。この呟きに遠藤は「手から手へ都会の底に渡さるわがいのちこそ漂流せるかな」と返す。伊勢真一監督のドキュメンタリー映画「えんと」の歌から。

2019・7・8

折々のことば

1516

～1520

そうするとね、かなわぬ分だけ思いが膨らむんです。喜びも悲しみも、悔しさも夢もみんな深さが出る。

市原悦子

折々のことば

鷺田 清一 1516

日本の衣服はほとんどが外国製。素材の自給率はほぼゼロ%。買値よりクリーニング代の方が高いからと、新しい服に買い替えるような文化は異様だと、ファッションデザイナーは言う。自ら糸を紡ぎ、織り、縫い、ぼろになったら雑巾にしたり、裂いてよこ糸にしたり、「大切に使い切る」ことからやり直したいと。「言葉の服」から。

堀畑裕之

2019・7・9

折々のことば

鷺田 清一 1517

波打ち際には言葉も芸術も解体してゆく。なんて清々しい。

鴻池朋子

2019・7・10

折々のことば

鷺田 清一 1518

政治が「みんなにかかわる問題」についての決定だとすると、家族も学級も政治の場。多数決があれば交渉やお委せもある。そこで重要なのは結論の「正しさ」ではなく、決め方に「納得」がゆくかどうかだと政治学者は言う。法哲学者・那須耕介との対談(動草書房ウェブサイト「めんどろな自由、お仕着せの幸福」第5回)から。ただ、納得が諦めにすり替わらないよう用心して。

田村哲樹

2019・7・11

折々のことば

鷺田 清一 1519

そうするとね、かなわぬ分だけ思いが膨らむんです。喜びも悲しみも、悔しさも夢もみんな深さが出る。

市原悦子

2019・7・12

折々のことば

鷺田 清一 1520

悲壮になるなら、やめたほうがいいと思う。好きだったら、いつも真ん中くらいの順位でも、ひたすら走っていける……。

市原悦子

2019・7・13

折々のことば

1 5 2 1

～ 1 5 2 5

本来ひとの生活というのは意図からズレたものが重なりあってできているわけで

藤森照信

折々のことば

鷺田 清一 1523

本来ひとの生活というのは意図からズレたものが重なりあってできているわけで

人の暮らす場所は、「頭」で計画したとおりに造られるものではないと建築史家は言う。そこには完結しない部分、どうしてもきれいにまとまらないところがあって、それが逆に人を惹きつける。行ってみたいと思わせる町にはどこか「種をまく力」があって、気持ちをさわつかせると。建築史家・中谷礼仁との対談「あたかも数千年後のまなざしで」（『現代思想』7月号）から。

藤森照信

2019・7・17

折々のことば

鷺田 清一 1521

かはい子よ おおかはい子よ
おでんのつゆに きものよすな
手のひらに 串のとげたてな

うちの子といわず、いずれの子であつても、人は肝を冷やし、こう声をかける。いや、好物に食らいつく小犬や小虫にだってついで声をかける。そういう慈しみの心が「へひと」というものの生地にある。それが大きく膨らむか小さく萎むかは世の中次第。人を追い詰める世の中にならないように。『中勘助詩集』（谷川俊太郎編）から。

中勘助

2019・7・14

折々のことば

鷺田 清一 1524

親って自分が言っていることと、やっていることが一致していないのが問題だと思います。

京都府亀岡市で発行されている「書くのが子ども、読むのが大人」という新聞。悩みの相談コーナーでは、「最近私が注意したり、叱ったりすると矛盾を的確に突いてくる5歳の娘に閉口しています」との相談にこの回答。「俺に打たれたりして自分を見つめ直して」くださいと続く。夏休み、子どもに背中を見られる時間が増えますよ。『はい！こちら子ども記者相談室デス！』から。

かめおか子ども新聞

2019・7・18

折々のことば

鷺田 清一 1522

虎の威を借るうしのおかり

虎に捕まった狐が、私は天帝の使い、私を食えば天帝の意に背くことになる、と虎に偽る。そして、私について来るがいい、みな逃げだすからと、虎を引き連れて歩むと、他の獣たちはその虎に怯え、逃げ去ったという故事による。したり顔の狐だったが、本当に怖いのは狐の狡知ではなく、狐がそのうち「威」を借りていることを忘れ、自分が真に強いと思ひ込んでしまうことだ。

いじや

2019・7・15

折々のことば

鷺田 清一 1525

経済は取りあいだけでなく、分けあいでもあると文化人類学者は言う。満員のバスにまた一人乗り込んだら、みな「しょうがねえな」と舌打ちしつつも少しづつ詰める。この譲りあいや再分配と市場交換のバランスが経済なのだ。ちなみにシェアには占有率と分有の二義がある。作家・高橋源一郎との対話録『「雑」の思想』から。

辻信一

2019・7・19

折々のことば

1526

～1530

ここにいる人は、みんな「どこかへ行く途中」の人だ。

花田菜々子

折々のことば

鷲田 清一 1526

作家の仕事は複雑なものを複雑なままに表現することだと思っています。

高橋源一郎

現在の人間だけでなく、死んだ人、これから生まれてくる人のことも併せ考えること。生死を超えて感知することの「繊細なアンテナ」は、短期の利害にしか関心のない資本主義の思考とは異質だと作家は言う。民族間の軋みも政治の問題に還元するのではなく、その場の複雑さを丹念に描くことから始めねばと。昨日と同じ文化人類学者・辻信一との対話録『「雑」の思想』から。

2019・7・20

折々のことば

鷲田 清一 1527

わくわくするのは、すべてそれが正解かわからない状態でやっていたということですね。

柴田元幸

浄瑠璃風、落語調もあれば、文語体、漢文体や言文一致の口語訳もある。明治期の文芸作品の翻訳では「誰もがいろんなスタイルを使え、それが主流・正解になってもおかしくない」という緊迫感があった」と、翻訳家は言う。翻訳者たちのその「振れ幅」の大きさが何より「カッコいい」と。学びもかくありまし。作家・村上春樹との共著『本当の翻訳の話しよう』から。

2019・7・21

折々のことば

鷲田 清一 1528

「わたしは、月夜の晩に風邪をひいたよ！」

吉川英治

「世間にすれていて男にすれず——男にすれていて恋にはすれていない、これがお網の実感だった。月夜の風邪は重くなった」と続く。大正末に始まった新聞小説『鳴門秘帖』から。気爽風がよくて妖艶な女スリお網が旅先で、颯爽とした虚無僧を見初める。ついにやきが回ったかと、おのれの心の乱れを怪しみ、こう独りごつ。粋な言葉には揺れがある。それを凌ぐ意気地がある。

2019・7・22

折々のことば

鷲田 清一 1529

ここにいる人は、みんな「どこかへ行く途中」の人だ。

花田菜々子

『出会い系サイトで70人と実際に会ってその人に合いそうな本をすすめてくれた1年間のこと』から。書店勤めの長い花田は夫との生活が破綻し、書名通りの驚きの行動に出る。出会った人は不思議にみな人生の転機にあった。「みんなが不安定さを礼儀正しく交換し、少しでも無防備になって寄り添ってみたい集まり」に、世間はそもそもそういうものだったかと思ひ到る。

2019・7・23

折々のことば

鷲田 清一 1530

悲しむ者はさいわいである……だから 僕は永遠に悲しむのだらう。

尹東柱

旧満州に生まれ、日本に留学し、27歳で獄死した朝鮮の詩人。「悲しむ者はさいわいである」という新約聖書「マタイ伝」の一節を8度くり返した後、「だから」と続けた。題して「八福 マタイ福音五章三十二」。どんな深い悲しみも、それに理由があると知れば救われはする。たとえそれを境にとこしえの慰めを得るとはゆかずとも。詩集『空と風と星と詩』（上野都訳）から。

2019・7・24

折々のことば

1 5 3 1 ~ 1 5 3 5

世間ではいつもどうでもいいことが一番問題にされる

キエルケゴール

折々のことば

鷲田 清一 1531

両親が同時に自己を教育するのでなければ、子供をひととおり教育することは不可能

アラン

夫婦は根っから異質な者。礼儀や誓いだけでは調和を得ない。親子の場合、「自然」が契りを支えるが、それも十分でない。自然に根づいた感情を超える「人間性」を子は学校で学ぶ。それを通じて親も学び直す。学校は「両親のための成人講座」でもある。「子供による両親の教育について」論じる人はいないものと百年前、フランスの哲学者は書いた。『人間論』(原享吉訳)から。

2019・7・25

折々のことば

鷲田 清一 1532

世間ではいつもどうでもいいことが一番問題にされる

キエルケゴール

人はつねに自分と他人の差異に執着する。どんな賞讃を得るか、どう重きをなすか、どの地位につくか。そんな世間の「符牒」でもって自らを意識する。が、それは他の人々に自分が「騙りとられる」ということ、つまり自分を失うこと。世間はこのようなそれに「身売りしている」人たちはばかりから成ると、19世紀デンマークの哲学者は断じた。『死に至る病』(斎藤信治訳)から。

2019・7・26

折々のことば

鷲田 清一 1533

十歳で いろんな大人より上手に 描けた
子供の ように描けるまで一生 かかった

飯田善國

ピカソが生涯をつうじて追い求めたのは文明の〈外〉に出ること、すなわち「名を与えられる以前の事物の記憶」であり、「憧れながら文明人がもう二度と手に入れることのできない」荒々しい野性的な生命力だったと、彫刻家・詩人は言う。ピカソは安住と眠りと怠惰を嫌ったが、それは「同じ所にじっとしてられない」から。思えばこれこそ子供の真骨頂。『ピカソ』から。

2019・7・27

折々のことば

鷲田 清一 1534

たとい所有者の承諾があつたとしても、ほんとうにそれが必要でなければ、他人からなにかを受けとるのは盗みです。

ガンディー

非暴力の抵抗運動で知られる、インド独立の父は、必要以上のものを所有するのは盗みであると言う。その意味で、自分の持ち物だって盗品でありうるし、世界に広がる悲惨な貧困もこの必要以上の所有に因るといえると。生きる上で真に必要なものへの問いなしに、正しい生はありえない。『獄中からの手紙』(森本達雄訳)から。

2019・7・28

折々のことば

鷲田 清一 1535

存在は与えられているのであり、いつ奪われてもおかしくない

関根清三

神による世界創造という考えを否定しても、それが人に与えられているという事実は残る。そしてさらに重要なのは、与えられたものはいつか奪われるかもしれないという事実だと、聖書研究家はその著『内村鑑三』に書く。近代の科学・技術が創造の概念を放擲しても、在るものには失われる可能性もまたあるというこの「根源的事実」まで一緒にたに手放してはならないと。

2019・7・29

折々のことば

1 5 3 6

～ 1 5 4 0

「困ってるねん」って言ってもらえる大人になること。これもほんとに難しい。

木村泰子

折々のことば

鷺田 清一 1536

「正義の人」より「ただの人」たれ、声高に運動するより、礼節ある無関心の方がどれほどましかわらない

関川夏央

国境を挟んだ二つの社会を確と繋ぐのは「ただの人」の交わりだと、作家は言う。声高に「問題」を言いつつたり、「正義」を掲げ運動を煽ったりする人でなく、「歴史が培った、普通の、合理的な考えかた」を人知れず淡々と貫く人。そういう人に出会った時の静かな感動が蔑ろにされがちだと憂う。随想集『ただの人の人生』から。

2019・7・30

折々のことば

鷺田 清一 1537

空気が読むものじゃなくて、吸って吐くものだと思うから

ドラマ「皿のお暇」から

TBS系の連続ドラマ(原作・コナリミサト、脚本・大島里美、7月19日放送)から。職場の「空気」やSNSでの反応に傷つき、ついに過呼吸で倒れた女性、自分をリセットすべく退社し、郊外に移り住む。そして、自分を都合よく扱っていたくせに、追いかけてきた恋人にこう返す。「空気」が人を呼吸困難にする。だから私はそれに押し潰されないよう、自分の意思で動く。

2019・7・31

折々のことば

鷺田 清一 1538

長い時間をかけてかたちづくられたその空間には……その時々判断のゆらぎが積み重なっている

乾久美子

旅に出れば、歴史的建造物はそっちのけ、農業小屋や道端の腰掛けなど土地の小さな風物ばかり撮ると、建築家は言う。それらは誰か一人の意図によって成る空間ではなく、人々のささやかな思いと計らいが交差し重なりあう中におのずと生まれるもの。その小さなきっかけを建築に埋め込みたいと。作品集『Inui Architects』から。

2019・8・1

折々のことば

鷺田 清一 1539

「困ってるねん」って言ってもらえる大人になること。これもほんとに難しい。

木村泰子

机をガタガタさせる子を、みなに迷惑をかける「困った子」と見るか、何かが不安で「困っている子」と見るかで、教室の空気は大きく変わると元小学校校長は言う。大事なのはそれを「ふつう」と見ること。が、大人は解決を逸してその本当に「困っている」ところをつい見損なう。大人もそれぞれにふつうに困っているはずなのに。『ふつうの子』なんて、どこにもいないから。

2019・8・2

折々のことば

鷺田 清一 1540

不安定な人間的感情に揺れる気持ちを出してしまう言葉は、指示する記号としては犬にとって何ほどの意味も持たない。

島泰三

犬を伴って狩猟や地中の爆弾の搜索をする時に、怒鳴り声で何かを命じてても犬は従わないと動物学者は言う。感情の裏も向きも違う異種のあいだで一つの協同の仕事が成り立つためには、「相手を自分と同等かそれ以上と認め」尊重しあう、そういう相互信頼感に裏打ちされた、短くて合理的な言葉が不可欠だと。『ヒト、犬に会う』から。

2019・8・3

折々のことば

1 5 4 1

~ 1 5 4 5

人間一人死ぬのはただ一度のこと、
せめて死ぬときだけは厳肅に、立
派にと思っていた

森定子

折々のことば

鷺田 清一 1541

でも、裁判官室のなかには、ふだんとまったく
同じような時間が流れる。

井戸謙一

2006年、志賀原発2号機訴訟の一審
で運転停止を命じた元裁判長は、かつて大
阪高裁で裁判官として初めて違憲判決（参
院定数訴訟）に関わった時、マスコミの注
目も大きく、開廷前は緊張しきっていた。
いつも通り気負いもなく淡々とした裁判長
を見て、「司法の独立」を胸に刻んだと言
う。記者、磯村健太郎・山口栄二の共著『原
発に挑んだ裁判官』でのインタビューから。

2019・8・4

折々のことば

鷺田 清一 1542

こうした思い出は、一片の灰のように、人た
ちの心の底ふかくに沈んでしまつて、どこに
も残らない。

花森安治

「いつでも、戦争の記録というものは、
そんなのだ」と続く。戦局や戦闘の記録は
あつても、人々が、家族を失い家を焼かれ
飢えつつも「黙々と歯をくいしばって生き
てきた」その記録はほとんどないと、雑誌
『暮しの手帖』を創刊した編集者は言う。そ
して読者に投稿を呼びかけ、1968年夏、
一号を丸ごとそれに充てた。その序文から。

2019・8・5

折々のことば

鷺田 清一 1543

君という美しい命は、未曾有の戦災をかうう
じてくぐり抜けた人、その人を守り支えた誰
かの先に、偶然のように灯された「閃の光だ
」

「暮しの手帖」編集長・澤田康彦

暮しの手帖社が「昨年、戦争体験の手記
を募り、編んだ『戦中・戦後の暮し』の記録」

（18年刊）の序文から。戦死者や被災面積の

「数」ではなく、出征した肉親への祈り、教

師の鉄拳の硬さ、機銃掃射の恐怖、戦争孤児

の思い。それらを生きた人がいるから
今を生きる人もある。この本には戦争体験
者の「遺言状にさえた」言葉が連なる。

2019・8・6

折々のことば

鷺田 清一 1544

人間一人死ぬのはただ一度のこと、せめて死
ぬときだけは厳肅に、立派にと思っていた

森定子

戦争体験を集めた『戦中・戦後の暮し』の
記録（『暮しの手帖』社）から。戦争末期50
歳で召集され、苛酷な軍務のなか病に倒れ
た夫は、終戦となって高熱のまま家に戻さ
れ、窮乏の末ついに一度も起き上がれずに
逝く。遺体はリヤカーで火葬場へ。妻はや
り場のない怒りと悲しみに打ち震えたが、
軍隊葬も合同葬も嫌った夫だけに家族に看
取られ本望だったろうと、のちに思い直す。

2019・8・7

折々のことば

鷺田 清一 1545

わくらばに

古語

「まれに『偶然に』という意味。わくらば
（病葉）は、夏の頃ときたま見られる、紅
葉のように色づく朽ちた木の葉のこと。そ
こから偶然を象徴的に表す語として用いら
れてきたという説がある。人には色づく季
節もあれば、蝕まれ、枯れゆく季節もある。
枯れゆくその季節の早すぎる到来に偶然の
意味を託した古人の想いはどこから来るの
か。夏の盛りにかもすそのうら寂しさは。

2019・8・8

折々のことば

1546

～1550

Your story, our history

オーストラリア国立公文書館

折々のことば

鷺田 清一 1546

Your story, our history

オーストラリア国立公文書館

そのホームページに2010年から17年まで掲げられていた標語。人の一生にはそれぞれの背景と物語がある。国家の統治にもまた経緯と歴史がある。その一つ一つを大切にし、闇に葬ることのないよう、膨大な記録と証言を集め保存する。後の世代が自身と家族の物語を、「国と民主主義」の歴史をさらに紡いでゆくにあたり正しい判断をなすよう、資料を能うかぎり緻密に収集し、整理する。

2019・8・9

折々のことば

鷺田 清一 1547

ひびくこころ、癒されたくないんです。

柳美里

16歳の時、劇団・東京キッドブラザースの主宰者、東由多加(当時39歳)と出会い、暮らし始めた。その後別れるが交流は続き、末期癌の東を懸命に看病するも失う。そして19年、「わたしはまだ悲しい」と作家は言う。「悲しみは時が癒してくれる」という言葉は悲しみを蔑ろにしている。悲しみに埋まらないとその後もないと。宗教学者・山折哲雄との対談録『沈黙の作法』から。

2019・8・10

折々のことば

鷺田 清一 1548

わたしは、排除する側ではなく、排除される側で良かったと心底思います。

柳美里

国も故郷もあらかじめ失われ、家族も散り散りとなった在日の作家は、幼い頃よりそうした囲いや支えを持てなかったのだ、ずっと「ぐらぐらした存在」だったと言う。どこにいてもそこは異邦。でもそのおかげで、「他者を自分の内側に取り込」むわざも、「予見不可能な事や時へと自分を拓いていく覚悟」も身につけられたと。宗教学者・山折哲雄との対談録『沈黙の作法』から。

2019・8・11

折々のことば

鷺田 清一 1549

闇や沈黙や混沌は、徒らに負のイメージを押し付けられている

山折哲雄

「闇は、光では照らし出せません。闇を闇で照らすことが、宗教や文学の役目なのは」との作家・柳美里の言葉に、宗教学者は「闇は闇で照らす」とはいいい表現だと応じ、こう続いた。悲しみを口にしても、それを聴いても、所詮どうにもならない。そういう苦い想いが共振した時、深い沈黙が訪れる。その沈黙を掘り下げる仕事に二人は取り組んできた。対談録『沈黙の作法』から。

2019・8・12

折々のことば

鷺田 清一 1550

人のことをわかった気になっている人も、自分のことをわかった気になっている人も、きつとただ単に何かを見失っているだけ

金原ひとみ

原発事故後「長くバリーで暮らした作家は、」それぞれがそれなりの強度のある価値観を導く文脈、背景で培ってきている」と痛感した。でも互いに十分理解しえないということは伝えあえる。そういう共存のルールを守るには、無理に想像しあうより、時に「共感のスイッチを切る能力」も要ると言う。ハフポスト日本版(8月4日)から。

2019・8・14

折々のことば

1 5 5 1 ~ 1 5 5 5

人間はくりかえしを離れるのに、勇気がいる。

吉田秀和

折々のことば

鷲田 清一 1551

人間を測定するための度量衡から「器量」という尺度がなくなってしまったのかも

仲野徹

ふるまいは型破りで頑迷なのに研究はオープンでかつ緻密。しかも情に厚い。そんな細菌学者、北里柴三郎が人生でしばしば「不協和音」を奏でたのは、その「器の大きさ」ゆえだったと生命科学者は言う。破格の人が単一の尺度で量られるような時代は小賢しくていいまいと。歴史に名をなす生命科学者たちの評伝『生命科学者たちのむこうみずな日常と華麗なる研究』から。

2019・8・15

折々のことば

鷲田 清一 1552

ぼくは戦記物をかくとわけのわからない怒りがこみ上げてきて仕方がない。

水木しげる

戦争末期、漫画家は南太平洋の戦線で左腕を失い、傷病兵としてからくも生き延びた。思考停止と無責任が支配する組織の論理によって、自決と玉砕を命じられた仲間たち。生き残りが少ない部隊が「模範」だった。後に「あの場所をなぜ、そうまでにして守らねばならなかったのか」と別の連隊長に言われ、底なしの空しさを感じた。漫画『総員玉砕せよ!』のあとがきから。

2019・8・16

折々のことば

鷲田 清一 1553

わたしたちのころは
あなのあいたいのものは

井上ひさし

戯曲『頭痛肩こり樋口一葉』の中の戯れ歌から。無数の理不尽なしきたりや因縁に弄ばれて、大切な思い出すら押し流され、ぼろぼろ零れ落ちてゆくのが人の一生。そういう「つまらぬ、くだらぬ、面白くない、なさけない、悲しい、心ぼそい」一生を女ばかりに強いる世間。自分はそんな世間をそっくり虚仮にして、小説という形で「戦さを仕掛けて」やったと樋口一葉役は言う。

2019・8・17

折々のことば

鷲田 清一 1554

なにか一つの 目ぼしい ことを やりと
けるには、きつと どこかで いたい おも
いか、そんなを しなくちゃ ならないさ。

浜田廣介

童話『ないた赤おに』から。赤鬼は村人たちが仲よくなりたくて家に招くが、村人は警戒心を解かない。友だちの青鬼はこう言い、人里でわざと大暴れし赤鬼にきつく諫められることで、赤鬼が人々に受け入れられるよう図る。そして赤鬼の友だちと悟られないよう姿を消す。友を思いやるが故に彼との関係を絶つというところが悲しい。

2019・8・18

折々のことば

鷲田 清一 1555

人間はくりかえしを離れるのに、勇気がいる。

吉田秀和

音楽批評でも社会評論でも、「この問題は「この人」ということになる」といつも同じ名が登場すると、音楽評論家は言う。ジャーナリズムはその変奏を求め、書き手は注文に「最善の出来栄え」の「職人芸」で応えようとする。が、問題をとことん突きつめていたら、それ以上のものは書きようがないはずだ。自己の模倣というこの誘惑は創造の根を損なう。随想集『響きと鏡』から。

2019・8・19

折々のことば

1556

～1560

人生はのろさにあれ
のろのろ蝸牛(でむし)のやうであれ

山村暮鳥(ぼちょう)

折々のことば

鷺田 清一 1558

人生はのろさにあれ
のろのろ蝸牛(でむし)のやうであれ

人生がどこまでも尽きない道ならば、先を急ぐより、一度かぎりのこの道を一步一步丹念に歩むほうがいいと、明治・大正期の詩人・児童文学者は言う。前方ではなく空を仰ぎ見、また大地を蹴るのではなく足裏で感じる事ができる。ふだん目にもとめないものが目に入ってくる。だから寄り道もしたい。宝物は存外そういところにある。詩「自分はいまこそ言はう」から。

山村暮鳥

2019・8・22

折々のことば

鷺田 清一 1556

どんな些細な接触でも、相手の目を見て対応する——もしかすると、それが日常にリアリティを取り戻す第一歩かもしれない。

梨木香歩

獣は相手の目を確と見つめ合う。正体を隠す愉快犯のような「相手の憎悪や敵意を身に受ける」覚悟のない他者攻撃は、姑息で、その「対決能力のなさ」は獣に劣る」と作家は言う。他人との向き合いを避けることで「静かに自分を主張する能力」まで失えば、「虚実のボーダー」も確認できなくなる。随想集『やがて満ちてくる光の』から。

2019・8・20

折々のことば

鷺田 清一 1559

エモーショナルなことは書けば書くほど嘘になってゆきます。

川勝徳重

漫画家は作品集『電話・睡眠・音楽』の「著者解題」をこう書き出す。感情について書くことはそれ自身が一つの解釈だし、解釈は見えない感情の磁場の中で辻褄を合わせるうち歪んでくる。だから表題作でも通りがかりの手すりのめりといった「通常なら捨象される、取りこぼれてしまう瞬間」を丹念に描く。「現実」には、その影絵や陰面を通してしか描けないものがある。

2019・8・23

折々のことば

鷺田 清一 1557

「ああ、あの子はいい子なんです」

梨木香歩の「担任」の先生

作家は小学生のころ、毎日図書館で本を借り、寝床で読み、続きを休み時間に読み、授業中も教師の目を盗んで読んだ。試験の日も答案をさっさと書き上げ、本に戻った。その日視察にやってくるらしき人が耳打ちすると、担任は晴れやかにこう返したという。人に信頼され「丸ごと受け入れられている」感覚が心地よかったと。昨日と同じ随想集『やがて満ちてくる光の』から。

2019・8・21

折々のことば

鷺田 清一 1560

それは目の前の人が体得し、これから自分自身が向き合おうとする「芸」そのものに対しての礼なのです。

田中佐太郎

歌舞伎囃子方は弟子に稽古をつける時、挨拶を一番に教えると言う。「よろしくお願ひいたします」と言い、ひたすら深くお辞儀をするのは、師匠にはなく、これまでもずっと先達たちが向き合ってきた「芸」に對してだと。誰も行き着けない高みがあると知る者だけが心から謙虚になれる。『鼓に生きる』(聞き書き・氷川まりこ)から。

2019・8・24

折々のことば

1 5 6 1 ~ 1 5 6 5

管理されなければならない恥ずかしい世代になんてなりたくない。

滝沢秀一

折々のことば

鷲田 清一 1561

管理されなければならない恥ずかしい世代になんてなりたくない。

滝沢秀一

お笑いコンビ「マシンガンズ」の芸人は、定収入を得るためゴミ収集会社に勤めている。悲喜こもごもの清掃作業にあたる中、人びとの嗜好や消費行動の歪みに戸惑い、そして思う。有料化、罰則などゴミ回収をめぐる規制の拡大も、ゴミの仕分けや水切り、物を買う前の要不要の一考などを一人一人がきちんと意識してやれば回避できると。『このゴミは収集できません』から。

2019・8・25

折々のことば

鷲田 清一 1562

寛容と自製の規範はアメリカの民主主義の「柔らかいガードレール」として機能し、党派間の闘いを避けるために役立っていた。

S・レビツキー／D・ジブラット

民主主義は、複数の党派が「寛容と自制」をもって向き合うという「慣習」の上に成り立つと、米国の政治学者は言う。合衆国憲法にはわざわざ「フェアプレーの精神」とは書かれていないが、世界には、この「不文律」の薄膜が破れて排除が噴出し、民主主義が砕け散った例は数知れないと。『民主主義の死に方』（濱野大道沢）から。

2019・8・26

折々のことば

鷲田 清一 1563

特別なものを特別に作っても特別ではないんですよ。

川俣正

逆に、身近にあって不要とされた「普通」のもので何か違うモノを作るのは「特別」だと、パリ在住の美術家は言う。制作と滞在と展示の場所を同じにしつつ、その場所に潜む可能性を瘤みだにすぎずと吹き出させる、そんな制作を続けてきた。訪問授業「外国で作品を制作するということ」（桐光学園中学校・高等学校編『高校生と考える世界とつながる生き方』から。

2019・8・27

折々のことば

鷲田 清一 1564

昔のお客は笑うまいとし、いまのお客は、とにかく笑おうとする。

立川談志

昔は、寄席通の客は「落語家の芸の年輪を味わう」ような聞き方をした。反対に、ウケを狙った「底の浅い」噺にはソッポを向いたと、落語家は言う。その点、今の客は「こらえ性がない」というか、「笑い声の陰でじっとみている」ことができない。噺家はそういう連中を笑わせてこそほんものなのにと。ウケることと優れていることは違う。若き日の『現代落語論』から。

2019・8・28

折々のことば

鷲田 清一 1565

どんな服を着れば何も表明せず誰も刺激しないで済むだろうか。でもそんな服はない。

岡田利規

「何を着ても緊張を生み出す。そして何も着ないのが一番生み出す」と続く。東日本大震災後の首都圏には、この非常事態に對し誰彼なく何らかの態度表明を迫る風潮があったと演劇家・作家は言う。服にすら沈黙を許さないような。服装は、人が貼られたレッテルを剥がすためにもあるのに。京都で開催中の「ドレス・コード?」——着る人たちのゲーム」展に寄せた文章から。

2019・8・29

折々のことば

1566

～1570

冷蔵庫の在庫一掃に踏み切る時、
料理人はブリコロールである。

池澤夏樹

折々のことば

鷲田 清一 1566

A happy landing on the earth
although the earth is full of
problems.

小田実

作家は娘が誕生した日、日記にこう記した。「ようこそ地球へ——ここは問題だらけではあるけれどね」。妻の玄順恵は回想録『トラブソンの猫』の終わりにこの言葉を引いた後、作家の創作ノート最後の文「世界は世直しを必要としている」を添えた。作家が身を投じた市民運動には、つねに地べたを這いつつ宇宙を見上げる「虫瞰図」の眼があったという。

2019・8・30

折々のことば

鷲田 清一 1567

「なんて意気地のない奴だ。怒るべき時に怒らない」「なんて意気地のない奴だ。怒る時にすぐ怒ってしまう」

高見順

『敗戦日記』は、作家が昭和20年元日から年末まで書き継いだ日記。6月3日の記述にはこんな言葉が挟まる。戦時の厳しい監視下、言論は「去勢」され、多くの国民も感情を煽られ自制不能になったという。そして戦後の10月5日改めて記す。「権力を持つと日本人は残虐になるのだ。権力を持たせられないと、小羊の如く従順、卑屈」と。

2019・8・31

折々のことば

鷲田 清一 1568

『敗戦日記』、昭和20年6月の記述から。敗戦の色が濃くなっても言論の厳しい統制は続き、8月に入って作家は「肉体だけでなく精神もまたその日暮しになっている」と記す。そして新聞には「知りたいとおもうことは何も出てない」と。しばらく前から作家の眼はむしろ投書欄に向いていた。浮ついた言葉は止めてくれといった悲鳴や粗末な食事の工夫などが載っていたから。

この頃。すべてが配給。会話も配給。

高見順

2019・9・1

折々のことば

鷲田 清一 1569

家の中でいちばんおもしろいのは、台所なんです。

川添登

台所はかつて本を読み、家計簿をつける場所でもあり、子供にとっては火や庖丁など危険なモノだらけの密かな実験室であった。道路もまた井戸端会議や日向ぼつこの場所であり、恋人たちの散歩道であったが、自動車の出現がその多義性を消し去った。暮らしを分解し薄っぺらにするあまりに貧しいデザインの思想。それを半世紀前、建築評論家は問い糾した。『デザイン論』から。

2019・9・2

折々のことば

鷲田 清一 1570

冷蔵庫の在庫一掃に踏み切る時、料理人はブリコロールである。

池澤夏樹

ブリコロールとは、ありあわせの物を用い、工夫して何かをつくる人のこと。料理は「身体感覚を用いる科学の第一歩」であり「個人単位の科学」だと、作家は言う。たとえば火加減は、熱伝導や放射・対流の「応用問題」だし、消化を助け、食物の毒性を中和する知恵でもある。人はだからいわゆる《身辺物理学》者としてもっと胸を張っていいのだと。『科学する心』から。

2019・9・3

折々のことば

1 5 7 1 ~ 1 5 7 5

すごい建築はしばしば、「建築とは何か」という問いを突然出します。

西沢立衛(りゅうえ)

折々のことば

鷺田 清一 1571

ありのままに生きようとしたアリは ありのままに生きようとしたアリは ありのままであった

「みかんの心ぼし」(作詞・原田伸郎)

フォークソングユニット、あのねのね(原田十清水国明)の歌から。「さすがママという言葉があるのに、どうしてキュウリがパパという言葉がないのか」と、駄洒落とノンセンスが満載。題は「心星」ではなく「心ぼし」。自分を探し、「空気を」読むことに溺れ、濡れそぼった心をいぢど虫干ししてみたら、との思いがそこにはこもる?

2019・9・4 JASRAC 出 1909435-901

折々のことば

鷺田 清一 1572

すごい建築はしばしば、「建築とは何か」という問いを突然出します。

西沢立衛

これこそ「建築のもっとも創造的な問い」だと建築家は言う。たしかに料理を戴きつつ、食べるとはこういうことかと唸ることがある。ある服を着て、着るとはこういうことかと悟ることもある。衣食住の優れたデザインは、人の生き方、暮らし方をその根元から質すよう促す。建築家ユニットのコンセプト集『大西麻貴+百田有希/お+h 8 stories』のインタビューから。

2019・9・5

折々のことば

鷺田 清一 1573

音楽は……まだ一步が踏み出せずに立ち止まっている人のそばで、いっしょにたたずんでいることもできます。

御供和江

仙台フィルハーモニー管弦楽団は、震災後、グループに分かれて被災地で900回近くコンサートを開いてきた。そのヴィオラ奏者は、音楽は復興に向かう人々を応援できるが、言葉や映像ではまだ苦しくて向き合えない人たちの傍らにそっと寄り添うこともできると言う。2015年の国連防災世界会議直前イベントでのトークから。

2019・9・6

折々のことば

鷺田 清一 1574

暴力とは、じつは涙が形を変えてしまったものののだろうか……。

重松清

小学生のケンタはすぐキレる子だった。母を亡くした後、新しい母と弟を家に迎えた日を限りに「いい子」を演じるも、今度は自分で自分に暴力をふるい、アザだらけに。亡き母の写真立てを弟が誤って傷つけた時めぐって我慢するが、新しい母に「怒っていいのよ」と、強ばる背中をそっと摩られ涙が甦る。O・ブルニフィエ著『暴力って、なに?』の付録「おまけの話」から。

2019・9・7

折々のことば

鷺田 清一 1575

自分のために一所懸命になってくれるひとがいるって、しあわせだよ、ほんとに

重松清

翔太はパパと、施設で暮らす祖母を訪ねるが、誰かわからないように悲しくなる。帰りに寄った動物園で、檻の中で安楽に暮らすのと、アフリカで怯えながらも気ままに暮らすのと、どっちが幸せかと語りあう。そして飼育員さんの心を込めた世話を見てパパはこう言った。そのパパ、どこか寂しかった。O・ブルニフィエ著『しあわせって、なに?』の付録「おまけの話」から。

2019・9・8

訂正して、おわびします

折々のことば

1 5 7 6 ~ 1 5 8 0

悩まない人に本当の明るさというのはつかめないと思いますね。

三波春夫

折々のことば

鷲田 清一 1576

決して早回しできないものがある

加藤典洋

短縮したり圧縮したりできないもの、どうしても省くことができないものが、経験にはある。人生においては暗中模索が続く思春期がそれだと、文芸評論家は言う。作文もそう。書くことに抵抗というかつかえのようなものがある、書くうちそれが自分と「のびきらない関係」になる。そんな「ギクシャク」を経てはじめて文章は「色づく」と。『言語表現法講義』から。

2019・9・10

折々のことば

鷲田 清一 1577

人はいろいろあるという認識の上に立って、自分が自分である処のものをしっかりとつかまえること

なだいなだ

アイデンティティを確立するとはそういうことだと、精神科医は言う。人は拠り所が不明になると、不安を払おうとして「このころの制服」を着たがると。日本人はすぐ一色になるといわれるが、狂言や狂歌に興じて、自分を笑い、権力者をからかうユーモアもあった。そのおらかな笑いの歴史を忘れてはならないと。『江戸狂歌』から。

2019・9・11

折々のことば

鷲田 清一 1578

「学校へ毎日行くのは、中毒と同じだ」

佐々木幹郎の父

高校の美術教師だった父は、孫が不登校になっても何も言わなかったと、詩人は言う。詩人が昔、美大を受験しようとした時も、絵が好きならそのための金は他のところで稼げとも。学校という「枠」の外でもがきながら羽ばたく姿を、背後からじっと見守っていた。成人が毎日職場に通うのも「中毒」？一度は考えてみたいこと。詩人の随想集『パステルナークの白い家』から。

2019・9・12

折々のことば

鷲田 清一 1579

五感の形成はいままでの全世界史の一つの労作である。

カール・マルクス

例えば音楽も大には音楽として聞こえない。人間はその素質を音楽という社会的な「富」へと対象化し、その「富」を通してはじめて個人の音楽の感受性も拓かれると、19世紀ドイツの思想家は言う。色をどう識別するか、何をノイズとするか、どんな味や匂いを忌避するかなど、知覚や感覚にも文化に培われたスタイルがある。『経済学・哲学草稿』（城塚登・田中吉六訳）から。

2019・9・13

折々のことば

鷲田 清一 1580

悩まない人に本当の明るさというのはつかめないと思いますね。

三波春夫

対談「芸・芸能・芸術そして芸人」（『海燕』1994年1月号）から。失意、挫折、転落。人は極限状況にある時こそ微弱な光にも敏感になるのだと、生粋のネアカと思われてきた浪曲師・演歌歌手その人が言う。これを承けて作家・荻野アンナは、その明るさは「真つ暗なのを磨いていると出てくる光みたいなもの」ですね、と応じる。人の輝きは失ったものの大きさに比例する？

2019・9・14

折々のことば

1 5 8 1

～ 1 5 8 5

生物は、つねに余裕をもった生活をしている。そしてその余裕を惜し気もなく利用したいものに利用されている。

今西錦司

折々のことば

鷲田 清一 1581

あらゆることを勉強して一つのものを完成したというのが、本当の専門家だ

三波春夫

対談「芸・芸能・芸術そして芸人」(『海燕』1994年1月号)から。この浪曲師・演歌歌手は読書と交友の範囲が並外れて広い。オペラ、京劇、歌舞伎に、さらに文学者、歴史家に学ぶことが自分の芸を鍛えてくれたという。これに作家・荻野アンナは「いまは『千門家』じゃなく『二門家』になっているんですね」と返す。専門家の「栄養」不足とスコープの狭さを改めて思う。

2019・9・15

折々のことば

鷲田 清一 1582

われわれはすべて弱さと過ちからつくりあげられている。われわれの愚行をたがいに有しあおう。これが自然の第一の掟である。

ヴォルテール

人はみな「脆弱で無定見であり、不安と誤謬に陥りやすい」と、18世紀フランスの思想家は言う。そして何ごともおのれを基準に評価する人間の傲慢を諷めた。その反省はまずは自らの文化に向かった。キリスト教という、もっとも強く寛容を説くべき宗教がなぜもっとも不寛容な歴史をもったのか。『哲学辞典』(高橋安光訳)から。

2019・9・16

折々のことば

鷲田 清一 1583

「大切なのは外見じゃない、内面だ」とよく言いますよね、そうするとたいていみんな心のことだと思う。導う、内臓だと。

魔夜峰央

仕事を長く続ける秘訣を訊かれ、漫画家はどう答える。無理がたたり肝臓を壊したことがあるからと。が、こころは深読みしたい。人にはそれぞれの〈私〉よりも古くて不可解な、生きものとしての内臓感覚のようなものがある。それが人を創作へと突き動かしていると。インタビュアー「永遠の28歳」(『ユリイカ』3月臨時増刊号)から。

2019・9・17

折々のことば

鷲田 清一 1584

生物は、つねに余裕をもった生活をしている。そしてその余裕を惜し気もなく利用したいものに利用されている。

今西錦司

ヒガンバナは、花は咲いても実はならない。繁殖は地下茎でおこなう。だから昆虫に受粉を助けてもらう必要がないのに、立派な花を咲かせ、そこを訪れる蝶に花蜜を差し出す。植物はさまざまな動物に食われ放題。人のように「我利我利者」ではなく、「のびのびと」動物たちを養っている生態学者は言う。随想「曼珠沙華」から。

2019・9・18

折々のことば

鷲田 清一 1585

私はゾクゾクするほど『ハイジ』の背後に大人の本気を感じていたのだ。

ちばかおり

日本のテレビアニメの金字塔「アルプスの少女ハイジ」。アニメなんて「たかが子ども」と用とみられていた時代。海外児童文学研究家は、「人生は真剣に生きるに値する」というメッセージを幼いなりに強烈に感じたという。後年、当時の制作スタッフを取材する中、いくら過酷でも「納得のいく」仕事をしたいという熱情にふれ、もういちど力をもらった。『ハイジが生まれた日』から。

2019・9・19

折々のことば

1586

～1590

自分でもつくづく、喜劇俳優がお客様に同情されたら、もうおしまいだと思った。

榎本健一

折々のことば

鷲田 清一 1586

ひとりの人間のもっとも優れた価値は、その人が所有権を要求できない領域にある

ルイス・カーン

私の発想、私の作品などどこだわるところに真の創造性はないと、米国の建築家は言う。私の中にあつて私より先に、そしてつねに蠢（うごめ）いているもっと古いもの。そこにこそ創造性の種はあると。着手点（スタート）から前方を見るよりも、むしろその手前にある真の始まり（ビギニング）に溯（さかのぼ）れとの提言は人生にも当てはまりそう。『ルイス・カーン 建築論集』（前田忠直訳）から。

2019・9・20

折々のことば

鷲田 清一 1587

笑えないことも笑っちゃまおうツテね。

松倉久幸

人生、いやなこと、ままならないことだらけ。感情を押し込めてばかりだと無理がくる。落ち込み、固まる前に笑いで逃がしてやらないと、と浅草演芸ホール・東洋館（旧浅草フランス座）の会長は言う。笑い飛ばすには「どん底の経験の思い出せばいい」。そして過去の情けない自分を、からかい、突き放すのだと。ヒリヒリするけれど。『起きたことは笑うしかない！』から。

2019・9・21

折々のことば

鷲田 清一 1588

たとえば会社を辞めないか、パワハラにならないかと、新人に注意をしにくい昨今。でも助言ができないのは悲しいと、浅草演芸ホール・東洋館の会長は言う。だから説教や自慢話ではなく、伴淳は、渥美は、欽ちゃんは、行き詰まるところしてたと、手本になりそうな他人の話をしてやると。『起きたことは笑うしかない！』から。

松倉久幸

2019・9・22

折々のことば

鷲田 清一 1589

自分でもつくづく、喜劇俳優がお客様に同情されたら、もうおしまいだと思った。

榎本健一

喜劇役者として一世を風靡（ふうみ）し、日本喜劇人協会初代会長も務めたエノケン（40代より足の病に苦しみ、52歳で息子に逝かれた。客はそのことを知っていて、可笑しな芸をやればやるほど場内は静まる。役者としてそれが辛かったという。目の肥えた客は、役者が下手な芝居を打てば「引込め」と怒鳴るものと心得ていたからよいに。自伝『榎本健一 喜劇こそわが命』から。

2019・9・23

折々のことば

鷲田 清一 1590

「多様性は、うんざりするほど大変だし、めんどくさいけど、無知を減らすからいいことなんだと母ちゃんは思う」

ブレイディみかこ

英国在住の保育士・ライターには、中学生になる息子がいる。荒れた地域にある学校に通うなか、格差や差別や偏見など、さまざまな亀裂に葛藤する毎日。その彼に、人々が多様だとなぜやこしいことになるの、楽でない多様性がなぜいいとされるのと問われ、母はこう答えた。『ぼくはイエローでホワイトで、ちょっとブルー』から。

2019・9・24

折々のことば

1591

～1595

手習ヒ始メハ音ノ大ナルモノナリ。
習練ヲ遂ゲテ音ノ小サクナルモノナリ。

明治期の雅楽奏者

折々のことば

鷺田 清一 1591

消費者はわかる、と思って作るのです。

滝沢直己

ネットで服を買うようになって布の手ざわりや着心地を確かめることが少なくなつた。が、作り手が同じ土俵に立ってはいけなとファッションデザイナーは言う。むしろ着る人の感覚の中に入り込んでゆくと。トレンドや市場の分析を頼りにビジネスを優先しすぎると「服なんてこの程度でいいんじゃないの」という妥協に流されてしまふと。『1億人の服のデザイン』から。

2019・9・25

折々のことば

鷺田 清一 1592

人間というものは、この期におよんでも、ヘンな欲があるものだ。

春風亭柳昇

戦争末期の昭和20年3月、伍長だったのちの落語家は上海を出航後、敵機から手ひどい爆撃を受ける。これが最後と思ひ定め機関銃で反撃する中、ふと、生き残った誰かが両親に、あなたの息子は「壮烈な戦死」を遂げたと伝えてくれる情景を思い浮かべる。要は両親にほめてもらいたかった。国家の命運からすれば極小であっても、気がかりはそこにあった。『与太郎戦記』から。

2019・9・26

折々のことば

鷺田 清一 1593

手習ヒ始メハ音ノ大ナルモノナリ。習練ヲ遂ゲテ音ノ小サクナルモノナリ。

明治期の雅楽奏者

雅楽演奏家・作曲家の芝祐靖は、随想「また始めた「手習い」」（寺内直子編著『俗倫楽遊』所収）の中で、明治24（1891）年に宮内省雅楽部の笛奏者が記したとおもわれる講演原稿を引いている。その一節。たゆまず練習に励めば「山ヲ昇リ峯ヲ越ヘテ坂ノ下リニナリテ平地ニ出ルガ如ク」なると言う。「技ノ手訓」とはそういうことだと。人の語りにも同じことがいえよう。

2019・9・27

折々のことば

鷺田 清一 1594

改革をやるという以上は、その前において相当の輪廓が出来ておらなければならぬ。

斎藤隆夫

昭和11年、民政党の保守政治家は二・二六事件後の国会で、立憲政治の擁護と「肅軍」を強く求めた。久しく内閣は「目前に現れるところの国務を弥縫してもって一日の安きを貪る」がごとき「弛緩せる」状態にある。重要なのは改革の「決意」ではなく、その具体的な手順。改革はそれをめざす過程で部分的にであれすでに具現していなければ不可能だと。『回顧七十年』から。

2019・9・28

折々のことば

鷺田 清一 1595

「いったい若い者のやらかす無意味なことはど意味深いものではありません」

関口存男

ドイツ語教師として数々の教科書を著し、2300頁を超える未完の著『冠詞』を遺した関口。陸軍幼年学校で外国語を学習し始めた頃、分厚いという理由だけで買った小説本をひたすら読むこと2年。文意は不明ながらも、ふと筋がくっきり見えた。この無謀な経験が後に〈関口文法〉とよばれる独自の言語観につながった。独文学者・池内紀による評伝『ことばの哲学』から。

2019・9・29

折々のことば

1596

～1600

あのとき、私は、自分が何を知
りたいのかを知りたかった。

正木香子(まさききょうこ)

折々のことば

鷺田 清一 1596

あのとき、私は、自分が何を知
りたいのかを知りたかった。

正木香子

2019・9・30

折々のことば

鷺田 清一 1597

おそらく、乳を飲むと同時に、実にいろいろ
なことを知る為事をしてに相違ない

戸井田道三

赤ん坊は、乳首を、物をしゃぶることで
世界を「勤勉に」探っているのだと、能芸
の評論家は言う。しかも「しゃぶるは」「し
やべる」と地続き。人は世界との関係を口
で吟味する。それが快いと、食事は美味し
く、会話は弾み、心ゆくまで歌い、口づけ
もするが、不快だと、食欲も言葉も歌も失
い、人との接触にも怯える。人の不幸は
口に集中する。『食べる』こと思想から。

2019・10・1

折々のことば

鷺田 清一 1598

そしてナチスが私を連行したとき、それに抗
議する人はもうどこにもいなかった

マルティン・ニーメラー

ナチスが共産主義者を連行した時も、社
会民主主義者を監禁した時も、労働組合員
を連行した時も、当事者でない自分には関
係ないと、とくに声をあげなかった。そし
て攻撃がついに私に向けられた時、抗議の
声をあげてくれる人は誰もいなかったと、
ドイツの牧師はふり返る。その語りは平和
を希う人びとの間に詩の形で広がった。マ
ルティン・ニーメラー財団のサイトから。

2019・10・2

折々のことば

鷺田 清一 1599

あんさん、この頃、彌七師匠によう似てきは
りましたなあ

鶴澤友路

文楽の三味線弾き、竹澤團七はある時、
公演先で三味線方の大御所・友路から、手
が上がったではなく師匠の音に似てきたと
言われ、涙がこみ上げたと言う。師匠・彌七
は「音をさせんところを弾かんかい」など
と叱っても、弾き方は一切教えなかった。だ
から自分も弟子には技でなく「魂」を伝え
るのだと。『文楽芸談 三味線 竹澤團七
橋寿のつづき』（聞書・荒木雪破）から。

2019・10・3

折々のことば

鷺田 清一 1600

あさってから手紙がくるよ／あしたのことが
書いてある／あしたってつまりきのうのこと
／あしたのわたしはごきげんですか

多田智満子

「おととい」からも手紙はくる。だから
「きのうのわたしはごきげんですか」とも。
「わたしをあしたに渡しかね／すすむつも
りであとすき」。詩人は「わたし」を一
つの〈物語〉に綴じないで、あさっての「わ
たし」に、おとといの「わたし」に涼やか
に言問う。それぞれの時を慈しみつつ。詩
「夏の手紙」（『封を切ると』所収）から。

2019・10・4

折々のことば

1601

～1605

「語られたがる言葉たちが、語られるのを待っている気がするんです」

谷貴一(脚本)

折々のことば

鷺田 清一 1601

「みんな勘違いしてんだ。人生に物語はねえの。ぶつぶつ、ぶつぶつ、途切れ途切れに、脈絡のない物事が起こるばかりで」

谷賢一(脚本)

劇作家は福島第一原発事故後に見聞きしたさまざまな言葉を繋ぎ、戯曲『福島三部作』を書いた。その第3部「2011年…語られたがる言葉たち」から。元町長の妻は、テレビ局員の義弟が取材に来た時、こう告げた。原発反対から受け入れに転じ、今は意味不明のことを口走るようになった夫。納得や断念の時間すら押し流されて。

2019・10・5

折々のことば

鷺田 清一 1602

「語られたがる言葉たちが、語られるのを待っている気がするんです」

谷賢一(脚本)

福島第一原発事故をめぐる戯曲「2011年…語られたがる言葉たち」から。賠償金の有無、被曝差別、避難先でのストレスなど被災者たちの間に生じた亀裂と悲鳴。東京から視聴率のとれる画像を求められる中、現場を取材する地元テレビの局員はこう言い、地道な聞き取りを続ける。そして時には「誰かがノックし続けねえや、開かねえ扉もあんでしよう」と迫っていく。

2019・10・6

折々のことば

鷺田 清一 1603

Were all the year
one constant sunshine,
we should have no flowers.

宮城県のコンビニエンスストアで

トイレに入ると、壁に、100円ショップで売っている英文のステッカーが貼ってあった。「年中、快晴の日ばかりだと花は咲かない」。調べると17世紀英国の詩人、ヘンリー・ヴォーンの詩「Affliction(苦悩)」の一節だった。湿りや陰りは、多すぎても少なすぎても人生をだめにする。用足しついでにしばしこうしたふり返りへと誘う個室、なかなか素敵だ。

2019・10・7

折々のことば

鷺田 清一 1604

青空に、修復の可能性を残さないほどにまっすくな飛行機雲を見ると、悲しくなる。

いせひい

「どうしてあんなに正々堂々と、自分の軌跡を残せるのか」と続く。絵を描く時、描くことは生きていること一つで、できれば結果にすぎないと画家・絵本作家は言う。いや人生そのものが、どこに行き着くかもわからず、ひたすら迷い、喘ぎ、歯ぎしりするほかないもの。結果はどうあれ信じる生き方を一心に貫くだけ。画文集『旅する絵描き タブローの向こうへ』から。

2019・10・8

折々のことば

鷺田 清一 1605

銃の乱発だけが戦争でないんだね

小野寺哲

戦後2年半シベリア抑留を経験した会社員は、定年後、戦争体験の語り部として活動を始めた。旧満州の地元民への仕打ちと彼らから受けた温情、抑留地での極限の生活、帰国後必ずしも歓迎されなかった引揚者……。ずっと二等兵だったから「末端の人たちの気持ちしか分からない」と、こうくり返した。仙台市の社団法人NOOK編『立ち上がりの技術01』での語りから。

2019・10・9

折々のことば

1606

～1610

努力とは息をするように続けられること、無理をしないこと。息をすることです。

将棋棋士・永瀬拓矢

折々のことば

鷲田 清一 1606

背中に、母の声があるの

庄司アイ

宮城県亘理郡で民話を語り継ぐ会を立ち上げた元保育士は、東日本震災時、津波に流されるも九死に一生を得た。「形あるものは全てなくした」が、幼い頃に母が仕事をしながら語ってくれた民話の数々はしんと胸に残っていたと言う。人々の思いが深くこもった民話。以後それを「命綱」に生きてきたと。仙台市の社団法人NOKK編『立ち上がりの技術01』での語りから。

2019・10・10

折々のことば

鷲田 清一 1607

途中は目的地への最短距離ではなくして、少年たちの共通の広場であり、空想の花園でもあり、遊びの場所でもあった。

唐木順三

学童のバス通学を見て、その「便利」が「途中の楽しみ」を奪っていると評論家は言う。家と学校の間は「悪童の腕のふるい場所」であることも含め、「教室で学びえないものを、おのずからにして学びとる場所」だった。子供たちのこうした未熟の自治を護るためにこそ、成熟した大人の知恵はあるはずだ。「増補 現代史への試み」から。

2019・10・11

折々のことば

鷲田 清一 1608

「戦争っていうものはね、犯罪だ。殺人、傷害、強盗、放火、あらゆる犯罪を網羅したのが戦争だ。これは覚えておきなさい」

豊田藤四郎

1938年、14歳で父を失い、母と弟妹を養うため必死で働いた藤田道子さんは、戦後、憲法を守る会や中国残留婦人交流の会に参画する。戦時下、親身に支えてくれた父の後輩、豊田さんのこの言葉を胸に、生き残った者の一人として動かずにはいられたと言った。「憲法と少女」(婦人友)2015年5月号での聞き書きから。

2019・10・12

折々のことば

鷲田 清一 1609

言いたいことはすべて言い尽くしたから。自らをコピーしてそれを繰り返す理由はない。

タル・ベアラ

何より「自分自身が退屈してしまうのを見たくなかったんだ」と。ハンガリー出身の映画監督は、25年前に製作した「サタンタンゴ」の日本での劇場初公開にあたり、8年前に引退した理由をこう語った。自分は目撃した世界の複雑さを人々と分かちあう「パブリック・ワーカー」として働いてきた。今は映画学校で若者たちを毒してるんだと。キネマ旬報WEB(9月24日配信)から。

2019・10・13

折々のことば

鷲田 清一 1610

努力とは息をするように続けられること、無理をしないこと。息をすることです。

将棋棋士・永瀬拓矢

努力というついでに我慢や根性を連想するが、人の実力というものは「長いスパン」で見なければならぬと若手の永瀬二冠(叡王・王座)は言う。短期的な成果を期待され、無理して踏ん張らないといけない時もあるが、本当のゴールはうんと先にあつて、大事なものは継続だ。なんとありがたい励まし。livedoorNEWS/スポーツアナエックス4月2日配信のインタビューから。

2019・10・14

折々のことば

1611

～1615

「そら なんぎやな。ここ はいり」

岡田よしたか

折々のことば

鷺田 清一 1611

演劇という、人間が人間を観察していくことを、僕たち舞台人はやっている。

宮本亜門

がんと闘う日々、散歩中に人が親身に声をかけてくれたのが嬉しかったと、舞台演出家は言う。「失恋して、ぼろぼろ泣いていても、客観的に周りから見たら、もう、本当に人間っていいよね、となるんです」。他の苦しみ、悲しみについてもそのように「自然に話せる健やかな波紋が広がればいい」。それは演劇の面白さに通じると。本紙10月7日朝刊でのインタビューから。

2019・10・16

折々のことば

鷺田 清一 1612

日本人は留学するが亡命しない。

加藤周一

かつては大陸から、朝鮮半島から、欧州から日本へ亡命した人々がいた。だが日本からは（逃亡しても？）亡命する人はほとんどおらず、その理由を問う必要があると評論家は言う。ナチス時代のユダヤ人もそうだったが、境遇によって亡命できる人ではない人がある。亡命後の生活も違う。その理由も併せ考えるべきと。文集『称えることば 悼むことば』（鷺巣力編）から。

2019・10・17

折々のことば

鷺田 清一 1613

「そら なんぎやな。ここ はいり」

岡田よしたか

うどん屋さんには人手不足。出前もうどんの「うーやん」が自分で行きます。途中、やせた猫がいたので半分食べさせてあげました。くたびれた梅干しにはこう声をかけ、お汁で温めてあげました。困ったみんなの面倒を見ているうち丼は満杯に。でもお客は大喜び。「にぎやかうどん」が新メニューになりました。思いやりの満ちる所、福が訪れる。絵本『うどんのうーやん』から。

2019・10・18

折々のことば

鷺田 清一 1614

うまく話せないときほど、言葉の近くにいる感じがする。

最果タヒ

言葉は「きみの生中継」。オチや起承転結をつけようなどと気配りせず、「うまく言えないことをうまく言えないまま、言葉にしてほしい」と詩人は言う。そして「おもしろくないこと、意味のわからないことを、だたらと話してしまおう人を見ると、愛されて生きてきたんだなあ、と感動する」と。だたらはささやかな幸福の肌ざわり。随想集『きみの言い訳は最高の芸術』から。

2019・10・19

折々のことば

鷺田 清一 1615

共有したいっていう感情が、ずっずつと邪魔だった。

最果タヒ

誰かに共感してもらいたいの、人にわかってもらえなさそうなのは言わない。けれどそれは、自分の中のものややを「余計なもの」として押し潰し、そうして自分を消しているのでは、と詩人は言う。意味不明な言葉こそその人が「その人だけの人生を生きてきた」徴。「いろんな人と、何言ってるのかわかんないよ、って笑ってみたい」と。『きみの言い訳は最高の芸術』から。

2019・10・20

折々のことば

1616

～1620

「今なら何をしてでも処罰されない」と
思い込む人間の出現をできる限り
先送りすること

内田樹

折々のことば

鷲田 清一 1616

いい茶碗だ——だが何という平凡極まるもの
だ

柳宗悦

「大名物」といわれる茶碗「喜左衛門井戸」
を初めて目にした時、思わずこう唸ったと
民芸の思想家は言う。その根は「朝鮮もの」
の並で質素な「雑器」にある。そこには何の
「波瀾」も「企らみ」も「邪気」も「技巧」
の病もない。「造作したところ」の微塵もな
いままにその「無事」が器を健やかなもの
にしていると。平凡は一つの達成でもある
こと、忘れまい。『柳宗悦 茶道論集』から。

2019・10・21

折々のことば

鷲田 清一 1617

大根おろしの水分は、捨てなくていい

角田光代

短編小説「平凡」から。高校時代の親友、
紀美子と春花は今や35歳。紀美子は、料理
研究家として活躍する春花の華麗な姿にふ
れ、「ふ抜けた」自分とどこで道が分かれ
たのかと思う。が、春花と再会し、彼女も
また見えない不安や昔の恋人へのわだかま
りに普通に身もだえてしていると知り、その最
中にも仕事モードで料理のポイントをツイ
ートしているのを見て、口元を緩ませた。

2019・10・22

折々のことば

鷲田 清一 1618

今日一日がないみたいというのは、こんな
にも楽なのか

角田光代

短編小説「こともなし」から。聡子は家
族のために作った料理の写真とレシピをブ
ログに載せる。こんなに幸福な毎日ですと
ばかりに。ある日友人に、自分を捨てた男
に読ませたいから（？）と指摘されてふと
我に返り、その日はブログを更新しなかつ
た。自分は幸せだと自分に確認するために
書いていたのか。苦い思い出から放たれる
日がきたらブログもやめられるのか……。

2019・10・23

折々のことば

鷲田 清一 1619

「反して」ということが、生きること
としての生には印されている。

エマニエル・レヴィナス

人が担い、切り開いてゆくものであ
るが、生は人に降りかかるもの、人が否応なく
被るものでもある。痛みや病、老い、そし
て死。生を限界づけるそのような契機を生
は深く内蔵しながらも、それらを「耐え忍
ぶ」とかたじけなく「傷」にしかと身を晒
してき。存在するとは別の仕方であるいは
う。『しての存在の彼方へ』から。拙訳。

2019・10・24 ※「Autrement qu'être ou au-delà de l'essence」

折々のことば

鷲田 清一 1620

「今なら何をしてでも処罰されない」と思い込
む人間の出現をできる限り先送りすること

内田樹

「イトスピーチについて「怒り」以上に
「恐怖」を感じるのには、大義名分と処罰さ
れない保証があれば、「ふつう」の人にお
いてさえ、ふだんは押し止められている不
穏な衝動の堰が切れてしまうからだ」と、思
想家は言う。人をそうした環境に置かない
ために、法律や常識、「お天道さま」という
感覚があると。『嫌韓報道に潜む「ふつう」の
人々』の「邪悪な衝動」(「潮」11月号)から。

2019・10・25

折々のことば

1 6 2 1

~ 1 6 2 5

本は人との出会いと同じで、出会おうと思って出会うんじゃなくて、気づいたら出会ってしまうってこともあるんです。

芦田愛菜

折々のことば

鷺田 清一 1621

さくら
さくらんぼ
さくらんぼ

夫に先立たれたあと、不在という空っぽの時間に迷い込んだ詩人は、遺影にさくらんぼをお供えする。「さくらんぼした／さくらんぼ／さらまでくらないさい／さくつ」。さらさらした音が、ゆくえの定まらぬ心情を繕い、ふと、思いがけない道をつたって夫のそばへ導いてゆく。天然の修復であるがごとくに。詩集『さくら さくらん』から。

高橋順子

2019・10・26

折々のことば

鷺田 清一 1622

本は人との出会いと同じで、出会おうと思って出会うんじゃなくて、気づいたら出会ってしまうってこともあるんです。

芦田愛菜

15歳の俳優の読書歴は半端でない。僕は文字といえはお経と『家庭の医学』しかない家で育ったので、初めて本を一冊読み通したのは16の時でした。友人が夢中になっている本を借りて、愛菜さんよりうんとおくででしたが、やはり同じ経験をしました。まるでその本が僕に向けて書かれたかのよう。読書エッセー『まなの本棚』から。

2019・10・27

折々のことば

鷺田 清一 1623

熊本で被災した母親の体験を例に、「不測の事態を打開する鍵は、大きな組織ではなく、小さなつながりにある」と文化人類学者は言う。災害からの復旧が遅れている「国の存在感が薄い場所」がそこかしこにある。生存を護る仕組みは、行政に委託したままにせず、自らの手で整えねばと。「はじめのアナキズム」(「ちやぶ台」第5号)から。

松村圭一郎

2019・10・28

折々のことば

鷺田 清一 1624

メールの文体というのは、相手に対する一種の甘えの形式みたいなところがすごくありますね。

谷川俊太郎

距離は詰めたいが深くはかわりたくない。そういう奇妙な孤独を「まぎらわす文体」が気にかかる。詩人は言う。手紙なら相手ごとに便箋を選び、文面を工夫するが、携帯メールでは口調が均されてしまい、「ふだん言えないことが言えてしまったりする」。「不健康」なことだと。「語り声の現場」(河合軍雄ほか著「声の力」)から。

2019・10・29

折々のことば

鷺田 清一 1625

絶望の泥染めをしないと、本当の希望が浮かび上がってこない。

佐高信

大島紬が絹を泥に浸すことで独特の光沢を得るように、希望も絶望の果てに立ってはじめて真の輝きを得ると、評論家は言う。昨今の現実には「明るい話」や「安売り」の希望にもたれかかって済むものではない。でも人はそんな社会のありようを丹念に問い糾はしない。近頃そのことに焦れてばかりいると。『いま、なぜ魯迅か』の著者インタビュ(「青春と読書」11月号)から。

2019・10・30

折々のことば

1626

～1630

人間の「おかしさ」をおかしいと言うだけでは伝え切れないから、ネタを思いついたのです。

塙宣之(はにわのぶゆき)

折々のことば

鷲田 清一 1626

私の人柄は幸か、不幸か、この一人旅がびつたりしているらしい。

中尾 佐助

1958年、日本人として初めてブータンを踏査した植物学者は、大人数ではなく単身だったからこそ、注意はじかに住民に向かい、機動的な調査ができたと言う。集団にありがちな上司への付度や仲間どうしの気遣いも要らない。一つ一つの事例に丹念に向きあい、しかも臨機応変に動くという点では、フィールド調査はケアの現場に似ている。探検記『秘境ブータン』から。

2019・10・31

折々のことば

鷲田 清一 1627

悪口とか言ってつとね、心のこころとカサカサになんだもん。

松本 大洋

ホームレスの少年、シロとクロ。シロは、人はみな神様の造りそこないで、いろんな「心のネジ」がなく、そのないネジをたがいを持ち合うのだと思っている。見かけ倒しのチンピラをクロが「言う事ばっかであって話になねーの」ときき下ろした時、シロはこう論じた。人の弱さを包み込めない者は、知らぬまに己をも干からびさせている。漫画『鉄コン筋クリート』①から。

2019・11・1

折々のことば

鷲田 清一 1628

人間の都合ではなく、牛の都合で考えることのほうが、人間のためにもなるのではないかと

吉田 金作

牛の飼育、搾乳からチーズ作りまで、人間のかかる仕事を家族だけでやりきる岡山のチーズ職人は、牛に「運命をともにする同志」のような思いを抱くと言う。乳が出るかぎり搾ってやるし、出なくなっても余生をここでのんびり過ごさせてやりたい。効率的ではないが、牛と人のそういう関係が人の暮らしをさらに豊かにすると。『吉田牧場 牛と大地とチーズとの25年』から。

2019・11・2

折々のことば

鷲田 清一 1629

人間の「おかしさ」をおかしいと言うだけでは伝え切れないから、ネタを思いついたのです。

塙宣之

客の心を揺さぶるのは、安受けする内輪話や自虐ネタなどではなく、あくまで「優れたネタ」だと、お笑いコンビ「ナイツ」の漫才師は言う。ネタとは、よくできた話の筋。話芸のいのちはそこにある。強いネタ、きちんとしたネタは、だれが話しても客を沸かせる。だから毎日、それを必死で探している。『言い訳 関東芸人はなぜM-1で勝てないのか』(聞き手・中村計)から。

2019・11・3

折々のことば

鷲田 清一 1630

空間の中に静止する一点の位置を決定するだけでも三つの数字が必要である。

寺田 寅彦

世の中は比較を好み、人に優劣を競わせるが、優劣は「一つの線状尺度」でしか決めようがない。空間上の位置でも三つの軸を必要とするのに、人の力量や自由度ともなれば、比較の軸も三つにすら絞り込めないと、物理学者は言う。人に無理やり共通の軸をあてがうより、その差異やコントラストに着目するほうが、人は生きやすいに決まっている。随筆「記録狂時代」から。

2019・11・4

折々のことば

1 6 3 1

~ 1 6 3 5

うちの家族は心配するよりも、面白い。

佐藤愛子

折々のことば

鷺田 清一 1631

よみ人知らず

誰が作者かわからないというより、人から人へ伝わるうち少しずつ変化し、誰が作者か特定できなくなったということだと、ブルガリア出身の日本文学者、ツベタナ・クリステワは『心づくしの日本語』で言う。これには歌の背景から表現そのものに焦点を移す効果があったと。会議なんかでも議論がうまくいった時は、「これ、誰が最初に言ったんだっけ」とみなが顔を見合わす。

歌の標

2019・11・5

折々のことば

鷺田 清一 1632

モンテーニュ

読書をしていて困難な個所にぶつかっても、いつまでも爪をかんでなんかない。一、二度、突撃をこころみたら、あとはほうっておく。気を張りつめているとぐったりし、判断力も鈍るから、と16世紀フランスの思想家は言う。いったん引き下がり、時間を置いていろんな角度から眺めなおすと、『エセー3』（宮下志朗訳）から。優れた本は読むたびに違う顔つきをする。読むほうの関心も移りゆくから。頁が赤線だらけになって、同じ書物を3冊買ったことが私にはある。

2019・11・6

折々のことば

鷺田 清一 1633

細馬宏通

例えば、入居者がふだんいる居間の食卓でスタッフのミーティングをする。これには「入居者の身になる」という点で「見逃せない効果」があると、介護の仕事を観察する人間行動学者は言う。相手と同じ状況に身を置けば、体の想像力がおのずと蠢きだす。私たちは体のかしこさにもっと頼ったほうがいい。『介護するからだ』から。

2019・11・7

折々のことば

鷺田 清一 1634

松尾芭蕉

「幻住菴記」から。「奥の細道」を旅した後しばらくして、俳人は琵琶湖畔・大津の山中にある庵に移り住んだ。自分は仕官や出家を願ったこともあるが、若い頃から俳諧をむやみに好み、なおかつそれで世過ぎできたので、他には身を入れないまま今日に至ると、その生涯をふり返る。そして庵の名のとおり、人生も「幻の栖」だと。器用より、無骨に一筋。いいではないか。

2019・11・8

折々のことば

鷺田 清一 1635

佐藤愛子

作家は実家への手紙に姑の悪口をいっぱい連ねた。父はなんとこれを喜んで、「こいうばあさんって、いるよな」と笑ったという。こんな家風があつてか、誰かにこっぴどくやり込められても、愚痴をこぼす代わりに、「こいつ、どんな人間だろう」とその機微を観察し、文で「活写」できるようになったと。作家・綿矢りさとの対談「文学修行の今昔」（「すばる」12月号）から。

2019・11・9

折々のことば

1636

～1640

砂漠で孤独なのは、人間だけだ。

長田 弘

折々のことば

鷺田 清一 1636

自分にもともと宿っている力を爆発させることで解決できることもあるんだ

綿矢りさ

つらい経験をするとい、二度とそんな目に遭わないよう」行動を制限するが、やがてしたいこともできなくなってしまう。直り、自分に確と向きあう人の弾ける言葉からは、「頑張れよとか、元気になつてね、という言葉よりも、違う形で生きるパワーをもらえる」と。作家・佐藤愛子との対談「文学修行の今昔」(「すばる」12月号)から。

2019・11・10

折々のことば

鷺田 清一 1637

砂漠で孤独なのは、人間だけだ。

長田弘

光が拡散するばかり、「どこにも、動く影がない」アリゾナの砂漠に、天を仰いで点々と、そして堂々と立ち続け、静かに老いてゆく幾百本のサグアロ・サボテン。人もまた企んだり飾ったり饒舌になつたりせず、寂しさや覚束なさへの不安に身を苛むこともなく、自らの「摂理」に従って生き通したいもの。詩「ゆっくりと老いてゆく」(詩集「世界はうつろい」と「所収」)から。

2019・11・12

折々のことば

鷺田 清一 1638

面をつけることは、視野のうちから自分自身の姿を消すことである。

土屋恵一郎

そのことで、能の演者は大地に確と立つ自らの身体を失って、観客の視線にさらされ、その中を心もとなく漂うばかりになると、自身も能に親しむ法学者は言う。こうして受動的で不安定な状態に置かれた演者は、「身体感覚の浮遊をしっかりと支える」べく、腰を入れ、身を前に傾ける。生とは受難の連続。それを「押し返していく」レッスンとして舞はあるのか。『能』から。

2019・11・13

折々のことば

鷺田 清一 1639

私が音を発するのは、自分の声を聞くためではなく、他人に聞かせるためなのである。

ミケル・デュフレノ

発話は「意味」と声の「肌理」(調子や抑揚)との「二重奏」だと、フランスの美学者は言う。あることが意味内容として伝わることもあれば、口調や声の感触で伝わることもある。だから他人の話を傾ける時にも、受けとるべき意味に気をとられ、その人のもう一つの声、つまりは肌理を「聞きそびれる」ことがないよう気をつけたいといけない。『眼と耳』(機優訳)から。

2019・11・14

折々のことば

鷺田 清一 1640

言葉だけではなく、その先にある音だけの純粹な世界に自分を放り投げていかなないと到達できない世界があると思います。

仲道郁代

優れた音楽には「天から滴り落ちる雫のような美しさ」があると、ピアニストは言う。人はそれに息を呑めば、打ちのめされもする。人類学者・長谷川眞理子との対談「音楽の力」は、本物の共感を生む(「家庭画報」12月号)から。詩も言葉だけれど、他人にというより天に向けて投げられた言の葉が、上から舞い落ちてくる気配がある。

2019・11・15

折々のことば

1 6 4 1

～ 1 6 4 5

自分で気づいているかどうかにかかわらず、人のやることはどれも命懸けなんだ

都甲幸治

折々のことば

鷲田 清一 1641

愛するということとは、おたがいに顔を見あうことではなくて、いっしょに同じ方向を見ることだ

サン・テグジュペリ

飛行士でもあった作家は、通信員としてスペイン・マドリードの前線を訪れる。地下の掩蔽壕で攻撃を控えた二人の隊員の屈託のないやりとりで確かな「友愛」を感じ、こう思う。人はまた、大切な人が苦しんでいることにひとり苦しむ時にも、相手の眼差しのあるものとともに見つめる。『人間の土地』（堀口大樹訳）から。

2019・11・16

折々のことば

鷲田 清一 1642

「多様性」や「ダイバーシティ」はこれから目指すべき目標ではなく、すでにそこにある現実なのである。

下地ローレンス吉孝

「ハーフ」は、そう呼ばれる人たちの思いとは別に、時代の文脈に弄ばれるように語られ、イメージされてきたと社会学者は言う。そしてその中で歪められ、かき消されてきた当事者の声を丹念に掘り起こす。すでに、この国でもまぎれもなく多様な背景をもつ人びとが隣りあって生きてきたのだから。『「混血」と「日本人」』から。

2019・11・17

折々のことば

鷲田 清一 1643

自分で気づいているかどうかにかかわらず、人のやることはどれも命懸けなんだ

都甲幸治

将来のあてもないまま、大好きなことをやっているんだからと、絶望すれすれのところでもっと楽しんで日々。若き翻訳家二人はやがて別々の道を歩むも、一方は余りに早く逝く。その友を思い都甲はこう記す。何かをめざすのも拒むのも、萎れるのもへたるのも、希望を失い打ち拉がれるのも、それぞれに必死で足掻いているからだ。『今を生きる人のための世界文学案内』から。

2019・11・18

折々のことば

鷲田 清一 1644

人間というものは、それじたい、ひとつの「うつわ」なのである。

加藤秀俊

鉛筆は筆箱に入れ、筆箱は引き出しに入れ、引き出しはキャビネットにしまふ。茶葉は水屋の茶筒から取り出し、急須に入れ、湯を入れて茶碗に注ぐ。人にとって世界は「いれもの」の連続体なのだと社会学者は言う。「いれもの」が要るのは整理と流通のためだと。ところが人の「うつわ」（器量）は物を容れない。では情報？ 責任？ 他人？ 考えどころだ。『暮しの思想』から。

2019・11・19

折々のことば

鷲田 清一 1645

メガネザルは目玉が大きすぎて動かせない
『さんねんないきもの事典』から

でも多くの光を集められるので夜に活動できる。カメムシを閉じ込めると自分の臭いがくさすぎて気絶する（だから敵も近づけない）。オオアタマガメは頭が大きすぎて甲羅に入らない（だが、甲羅が軽いぶん逃げ足も速い）。どんな生きものも自分の能力と環境との不均衡を測りかねつつも、なんとか辻褄を合わせ生き延びてきたのか。事典の監修は動物学者・今泉忠明による。

2019・11・20

折々のことば

1 6 4 6

～ 1 6 5 0

音楽は決して誰かの所有物になったりはしない。だからこそ美しい。

岡田暁生

折々のことば

鷺田 清一 1646

政治の役割は二つあります。一つは国民を飢えさせないこと。……もう一つは、これはもっとも大事です、絶対に戦争をしないこと。

菅原文太

俳優は山梨県で無農薬の野菜作りにも精を出していたが、出身地・宮城の隣、福島での原発事故の後、この社会の行く末を案じて積極的に発言した。亡くなる直前の2014年11月1日には、沖縄県知事選の応援演説で、あのだみ声で囁みしめるようにこう語りがけた。直球の言葉だが、それがびんびん響いてくるこの時代が怖い。

2019・11・21

折々のことば

鷺田 清一 1647

タクシートの難しさは、つねに一定の場所から出発するのではなく、あらゆる場所が出発点になるからだ。

梁石日

新米のうちは、道に迷うと方角を確かめるため車庫に引き返したくなるが、客を降ろしたその場所が次の起点なのだ、タクシードライバー10年の作家は言う。人生も同じ。生まれ落ちたそれぞれの境遇を始点としつつ、挫折しても、挫折したその地点で態勢を組み直すしかない。そう、ギリラのように。『タクシードライバー日誌』から。

2019・11・22

折々のことば

鷺田 清一 1648

自分の皮膚の壁を感じた——私は私なのだ、と。あの石ころは石ころなのだ、と。

シルヴィア・プラス

母と自然。その「心優しい宇宙の中心」であった少女はある日、「第三者」になる。弟の誕生。それが私と世界の一体感を裂いて、私を「除け者」に、「悲しい海胆」にしたと、米国の詩人は回想する。人は世界が自分とは別のものとしてあるという事実が傷つくことから、その生を始める。随想「オーシャン・ニートーW」(徳永暢三編訳『シルヴィア・プラス詩集』所収)から。

2019・11・23

折々のことば

鷺田 清一 1649

僕は本当に怯えなくてもいいのでしょうか

福岡道雄

かつてこのテーマで個展を開いた彫刻家は、人は死してなお怯え、戦わなくてはならないのかという切迫した思いで、棺に石や棒を入れて展示した。芸術の使命が「取り返しのつかないこと」を誰よりも先に察知することにあるとすれば、それは想像力以前に、生きものとしての感覚をよぎる数知れない恐怖やひもじさの記憶によるにちがいないと。『つくらない彫刻家』から。

2019・11・24

折々のことば

鷺田 清一 1650

音楽は決して誰かの所有物になったりはしない。だからこそ美しい。

岡田暁生

どこからか流れ込んできて、空間を浸し、震わせた後に、消滅してゆくのが音楽だと、音楽学者は言う。そのような音楽が「私の歌」となるのは、逆説的にも、それが「私だけの歌」ではないと感じる時、いいかえると、それを歌う喜びを共有できる人びとを見つけた時、まるでいつかどこかで聴いたことのあるメロディーからの引用のように聞こえる時だと。『音楽と出会い』から。

2019・11・25

折々のことば

1 6 5 1 ~ 1 6 5 5

生き残るチャンスを持っているのは、
むき出しの庇護されていないものだけである。

テオドール・W・アドルノ

折々のことば

鷲田 清一 1651

社会が提供してくれるのは、ひとり相撲の舞台だけなのである。

安田浩一

高齢者や外国人労働者の集住域というイメージを負わされがちな老朽化した団地。ジャーナリストは、国内外の団地を取材するなか、差別に晒され不遇をかこつ少数者だけが「努力」を求められ、世間や政党は「見守る」だけという構図を目の当たりにする。そして、行政にも政党にも「頼ることをあきらめた」住民たちの自助と共助の活動を丹念に追う。『団地と移民』から。

2019・11・26

折々のことば

鷲田 清一 1652

透明な皮膜は新鮮さを保つという本来の機能よりも……均質さの確保という点にはるかに大きな役割を与えている。

伊東豊雄

コンビニの食品は透明ラップで被われている。指先が触れるのは食品ではなくこのラップ。すべての食品が名称と価格で「並列」する。感覚の触手が世界を探りだすのを禁じるかのように。都市のビル群も同じ。見事に「土地から離脱」していると建築家は言う。「サランラップ・シティの建築風景」(『現代思想』1992年9月号)から。

2019・11・27

折々のことば

鷲田 清一 1653

足を棒にする

慣用句

長いこと歩き回ったり立ちっぱなしでいたりすると、足は緩やかなあそびをなくしてがくがくになる。つまり限界の合図だ。昨今はしかし、人は限界に行き着く前にそれを回避する。何ごとも「ほどほど」にしておく。けれどもその「ほどほど」は限界を知っていないとわからない。「ぎりぎり」を知らない「ほどほど」はただの萎縮。限界を知らねば、たくましさも生まれぬ。

2019・11・28

折々のことば

鷲田 清一 1654

生き残るチャンスを持っているのは、むき出しの庇護されていないものだけである。

テオドール・W・アドルノ

伝統なるものは体よく祀り上げられることで逆に損なわれると、ドイツの哲学者は言う。伝統は、「反発」される時、つまりそれがめざしながら果たしえなかった課題を、後世の人たちが批判的に取り上げ、それに別のかたちで挑む時に、もっとも活性的である。遺産としての顕彰は、ときに伝統がもつポテンシャルを削いでしまう。『不協和音』(三光長治・高辻知義訳)から。

2019・11・29

折々のことば

鷲田 清一 1655

どんな歴史でも、あとから、あとから押しつけてくる現実には、追いたてられるようにして生きていくものらしい。

金子光晴

日々のよしなしごとを文章にする時も同じ。書いたすぐ後から、「あんなことも書きたかった、こんなこともあった」との思いが押し寄せてきて何とも始末が悪いと、詩人は言う。よほどゆったりとした構えでものを見ていないと、すぐまた別のことに乱される。「せせこましくなく生きる」ことが肝要だと。随想集『人よ、寛かなれ』から。

2019・11・30

折々のことば

1 6 5 6

～ 1 6 6 0

ごきげんさん

関西人の挨拶

折々のことば

鷲田 清一 1656

「われはそれを好まぬ」——何ゆえに？——
「われはいまだそれにふさわしくないゆえに」
——かつてかく答えた何人があったろう？——
ニーチェ
「私とは何者であるか？」という問いも、
「それ」の一つかもしれない。自身の存在
を考えるにあたって真っ先に問うべきは、
そうした問いを發する資格が自分にあるか
どうかということだ。他者にはあさやかに
映っているのに自分には死角に入って見え
ないものがないかを糾すこと。ドイツの哲
学者の『善悪の彼岸』（竹山道雄訳）から。

2019・12・1

折々のことば

鷲田 清一 1657

生き字引 年寄りだから じき崩
知人の男性会社員
俳句ではよく、二つの事象を意味でつな
げるのは不粋だとされるが、知人は「二物の
接点が音韻に尽き、あとは皆目無意味な離
れ方をした」駄洒落すれすれの「字違い句」
を作って遊ぶ。「残業と残尿似たり 一字
違い」李香蘭 一字違いで 備考欄から
「あしたのジョー アシカのショーと二字
違い」へと、無意味さが増すにつれイメー
ジは逆に膨らんでゆく。私家版の句集から。

2019・12・2

折々のことば

鷲田 清一 1658

では、それが何故ためになるか。ホントウの
ことが書かれているからであります。
坪田譲治
童話の要はそのにあると、童話作家は言
う。童話は、玩具と違いポケットに入るほ
ど小さいのに、生活で大切なことがずばり
書かれている。動物や草木に託して書くの
はそのほうが面白く、ずっと伝わるから。
童話は「人生のねうち」を問っている。だ
から「正しくないこと、美しいこと、醜い
こと、そんなことについても考えてくださ
い」と。随筆「子供のための文学」から。

2019・12・3

折々のことば

鷲田 清一 1659

蜘蛛が上れば蜘蛛の糸は残らない。あえかな
糸のひとすじの残光だけ、そこにある。
小池光
体内から分泌した粘液で糸を繰って、精
緻な網を編み、ひっかかった虫を捕食する。
蜘蛛のその姿に、「ものを食うとはかくも苦
心のいることか」と、歌人は「身につまざ
れ」る。しかもそのか細い糸の大半を、蜘
蛛はふたたびきちんと体内にしまい込みつ
つ、姿を消す。なんと折り目正しい生き方、
気品のあるふるまい！ 詩歌に詠われた動
物をめぐる随想集『うたの動物記』から。

2019・12・4

折々のことば

鷲田 清一 1660

ごきげんさん
関西人の挨拶
「おはようさん」もそうだが、関西人は
「お疲れさん」と人をねぎらう時にかぎら
ず、挨拶にも「さん」をつける。そういえ
ば京都の人は「お揚げさん」「お芋さん」
と食べ物にも「お」や「さん」をつける
し、家族のことも、いや飼犬のことだっ
て、「今、寝たはる」というふうに敬語で
語る。ひたむきに生きる者どうしの共感か
らか、意外に〈個〉の意識が強いからか。

2019・12・5

折々のことば

1661

～1665

たんぽぽのぽぽのあたりが火事です
すよ

坪内稔典

折々のことば

鷲田 清一 1661

たんぽぽのぽぽのあたりが火事ですすよ

坪内稔典

「ぽぽのあたり」ってどのあたり？ 後頭部とかお尻のあたり？ 自分の体なのに自分では見えないところで何かよろしくないことが起こっている？ いずれにしても、こんなふうには微笑みながら心配してくれる人がいるのはうれしい。句集『ぽぽのあたり』から。続篇として「たんぽぽのぽぽのその後は知りません」という句も。ちなみに「ポポ」はドイツの俗語ではお尻のこと。

2019・12・6

折々のことば

鷲田 清一 1662

「いいね！」で、
いいの。

某私立大からのメッセージ

京都市の地下鉄の車両にこんな広告が出ていた。下に「Realはもっと複雑かもしれない」と。話に深く心を揺さぶられたのならその思いを、微かに違和を感じたなら「こうとも言えませんか」との反応を言葉で返すのが自持というものだろう。話が本当にいいなら「いいね！」で閉じるのではなく、そこから話を開いていかねば。大学はそれに必要な補助線をいろいろ学ぶ所。

2019・12・7

折々のことば

鷲田 清一 1663

人生に意味があるのか、という問いは人生の外部から発せられるという点で子どもっぽい

人生の意味への問いは、日々の生活のただ中でもがきながら立てられるもの。人生にはたして意味があるか、答えに窮しつつも、それでも人は自分や周囲の人々の生を少しでも生きるに値するものにしようとする。逆に「どんな人生も一様に生きるに値する」という言明もただの合言葉となれば、こうした努力の根を蝕みかねない。と科学哲学者は言う。『哲学入門』から。

2019・12・8

折々のことば

鷲田 清一 1664

僕たちは何があるかと、生を愛し、人間であり続ける、お前たちに僕たちの魂を破壊することはできない

岡真理

現代アラブ文学研究者は、外出禁止令が敷かれたパレスチナ自治区内で、海外ジャーナリストの案内役を務める現地の青年二人とホテルで落ち合う。その彼らは、ホテルを占拠するイスラエル兵の前で冗談を言いあい、笑い転げる。岡はそれを、迫害された彼らの最後の抵抗と察し、その心根をこう記す。『ガザに地下鉄が走る日』から。

2019・12・10

折々のことば

鷲田 清一 1665

自分にあるのが強さなのか弱さなのか、怖れなのか勇気なのかは、他者を通してでしかわからない。

リチャード・T・モリス

熊がよじ登っていた木ごと川に落ちる。そんな熊を見て、蛙や亀やビーバーらが集まってくる。みなで急流を何とか乗り切り、滝も数珠つなぎになって無事落下。別々に生きてきた動物たちがそれぞれに自分にあるもの、ないものを知る旅となった。絵本『かわにくまがおっこちた』（レウィン・ファム絵、木坂涼訳）の「あとがき」から。

2019・12・11

折々のことば

1666

～1670

グズは魂と直結しているのでグズを
矯正すれば魂も死ぬ

岸本佐知子

折々のことば

鷺田 清一 1666

いつから大人の仲間入りで、いつから子どもの時とさよならしたのでしょう。そんないつなんて、きつとないのです

角野栄子

母の記憶なしに育った作家は、ある日娘に「普通のおかあさんになってよ」と言われ、混乱する。そして自分なりの「普通」を通すしかないと思ひ定め、童話で女の子にこう言わせる。以後、これが「失ったものに対して幻想を持ち過ぎた」作家がやっと思つけた心の拠り所となった。『「作家」と「魔女」の集まっちゃった思ひ出』から。

2019・12・12

折々のことば

鷺田 清一 1667

グズは魂と直結しているのでグズを矯正すれば魂も死ぬ

岸本佐知子

『グズな人には理由がある』みたいな題名の本があるらしいけど、自分ならこう但し書きをつけると翻訳家は言う。情報に条件反射のように反応し、反応したこともすぐに忘れる、そんな滑りのよすぎる情報社会。でも人生の意味は問うてもすぐに見えない。むしろそう問い続けるのが人生。だから納得ゆくまでグズグズしている権利もある。随筆集『ひみつのしゅもん』から。

2019・12・13

折々のことば

鷺田 清一 1668

文学は学校での成績を誇りとするようなアイデンティティのありかたを、木葉微塵に打ち砕いてくれたんです。

渡辺京二

評論家は戦時中、海軍の予科兵学校を受験するも失敗。立ち寄った古本屋で徳富蘆花の文集を買い、以後、文学や歴史書を読みふける。世界を測る遥かに大きな座標軸を求めて。「人間はイヤだなあ」と思う平面、「好きになれる人」は確実にいて「その人たちがいなければ寂しい」と、卒寿を前に漏らす。『夢ひらく彼方へ』上』から。

2019・12・14

折々のことば

鷺田 清一 1669

ぼくだって、いつかいいてんをとりたいたんだ。けど、やっぱり0てん。

山縣良和

68点や12点もあるけど「ぼく」はいつも0点。点の低い仲間と悪さもしたし、失恋もした。「テスト用紙のうらにするラクガキ。あつという間にすぎていく、楽しい時間」もあった。そこで「ぼくは何になれるだろう」と考えた。紙くすみたいだったけど、何度か折るうち紙飛行機になった。そして「外」の世界へ飛んだ。ファッションデザイナーの絵本『ぼくは0てん』から。

2019・12・15

折々のことば

鷺田 清一 1670

「正しさ」より「楽チンさ」をものさしに落としていこうを探せたらいんじゃないかな

青木海青子

夫婦で奈良県の山村に移住し、私設図書館「ルチャ・リプロ」を開いた司書。ここは「生きづらさを抱える人」たちが遠くからも多く訪れる場所になっているが、それが無理なく続いているのは、誰かの「優しさ」や「思いやり」に期待するのではなく、支える人と支えられる人の「入れ替わり」のしくみを大切にしているからだと言う。青木真兵との共著『彼岸の図書館』から。

2019・12・16

折々のことば

1671

～1675

楽しくなくても楽しげに生きるのが、
早く死んだ人への感謝で供養じゃ
ないかしら。

樋口恵子

折々のことば

鷲田 清一 1671

「なんとなく」を軽視しているから、実は誰
もが感じている「もやっ」を切り捨てて、
「きちっ」としたものしか信じなくなる。

青木真兵

人はクリアな判断のみに拠って生きては
いない。「なんだか気持ちが悪いか」「い
つもはできるのに今日はできない」とかい
った「なんとなく」を甘く見ていると、判
断や感覚に狂いが生じると、奈良の山村で
私設図書館を開く歴史研究者は言う。もう
ものの制度不全もここに一因がありそう。
青木海青子との共著『彼岸の図書館』から。

2019・12・17

折々のことば

鷲田 清一 1672

長い時間を費やして指南力を持ちうる言葉のな
かに、真実は宿っている。

平川克美

優れた芸術作品が不在の過去や未来にも
開かれているのに対し、虚言者は「いま・
ここ」を切り抜けるために注力すると
文筆家は言う。真実は、長い眼で見るとい
う時間感覚と、過去や未来の人々を含めた
「いくつもの視点の協同」の中で見分けら
れてゆくと。随筆『嘘と真実あるいは、絵
画の次元について』(アーツ前橋&前橋文学
館監修『ヒックリコ ガックリコ』)から。

2019・12・18

折々のことば

鷲田 清一 1673

楽しくなくても楽しげに生きるのが、早く死
んだ人への感謝で供養じゃないかしら。

樋口恵子

年齢87になる評論家は「満身疼痛」。が、
老いは一色でなく二番底、三番底があり、
底の底までいっても、その人らしい人生を
求め、懸命に生きる先輩たちに心動かされ
ると言う。「楽しくなくても楽しげに」と
いうのもその一つ。自分の長生きも、大勢
の先輩が戦争で落とした命を礎として長く
続いた平和のおかげだと思ふと、つゆ疎か
にできないと。『老い、どん!』から。

2019・12・19

折々のことば

鷲田 清一 1674

「信じる」ということは、仮定形の上には成
り立たないのではないか。

湯川豊

大岡昇平の小説『野火』は、戦地で小隊か
らも病院からも見放され、山中を放浪する
一等兵を描く。疲労と飢餓で意識が朦朧と
なる中、ふと「神」らしき何かに見られて
いると感じた兵士の独白、「もし彼が真に、
私一人のために」にふれ、文芸評論家はこ
う記す。信仰は聴き届けられる保証のない
まま差し出されるもの。人を愛することも
きつと同じ。評論『大岡昇平の時代』から。

2019・12・20

折々のことば

鷲田 清一 1675

話すことに、「おもしろいな!」「すごいね!」
「いや、驚いた!」と、目を見張って、心底か
らびっくりしたような反応を示す人でした

鶴見太郎

日本近現代史研究者は幼い頃、父・鶴見
俊輔に何か話すと決まってこんな反応があ
ったという。長じて世間の大人たちが何ご
ともにも無反応なのを知り、逆に衝撃を受け
たと。きみに関心がある。あなたの言葉が
私をさわめかせる。そう伝えられることで、
人は自分という存在を少し大事に思えるよ
うになる。黒川創の『鶴見俊輔伝』から。

2019・12・21

折々のことば 1676 ～1680

人は生きている間、だれかに贈りものをしながら生きているのだと思う。

角野栄子

折々のことば

鷲田 清一

1678

人は生きている間、だれかに贈りものをしながら生きているのだと思う。

角野栄子

作家はある日、公園で、昼間から酒をおる寒れた男を見かける。が、傍らの木には背広の上着が「お行儀よく」ハンガーにかけて吊られていた。その母親から教わったのだろうか、その服は汚れてはいても「すすんでいなかった」。彼の中にちゃんと生きているものがある。その光景が作家には自分への贈りものと思えた。『「作家」と「魔女」の集まっちゃった思い出』から。

2019・12・24

折々のことば

鷲田 清一

1676

私みたいに時計を見て一日を過ごしている者は少ないと思います。

Aさん（百歳間近の女性）

福祉社会学者、春日キスヨが取材したAさんは、毎日同じ時刻に起きて仏様の水を替え、娘婿のための食事の仕度、合間に編み物と、日課どおりに過す。季節ごこの家事も暦どおりに。すべて甥や孫、先に死んだ娘らへの「義務やお返し」としてやっているという。自らの暮らしを、縁あるものへと、時空を超えて展げられるのが元気の素？ 春日の『百まで生きる覚悟』から。

2019・12・22

折々のことば

鷲田 清一

1679

記憶の断片をたどって、自分が自分であるために必要な物語を、作ろうとしたんじゃないかって

中島京子

小説『夢見る帝国図書館』は、ちよつとパンクな老人の謎めいた過去をめぐって展開する。幼少時も結婚生活でも縮こまってばかりだった彼女。一人暮らしを始め、図書館に通う中で「自分で自分を育て直したんじゃないか」と孫は語る。言葉は魂を編む繊維のようなもの。それを彼女は少女に戻ったかのように一から紡ぎ直していった。

2019・12・25

折々のことば

鷲田 清一

1677

「戦後」という「トバ」を使える間だけが人々の幸福なのです。

野田秀樹

「戦後」ではなく、「戦前」「戦中」という「トバ」を使いつつになるのだからと続く。作家・演出家が近作「Q: A Night At The Kabuki」の公演パンフレットに載る。吉永小百合宛ての手紙から。野田は、戦後「戦後」から見た「戦争」にこだわり続け、彼女に、こう思いを綴る。煙たがられける、「戦後」を「しれっと、さらっと、でもながら突き刺すように」描きたい。

2019・12・23

折々のことば

鷲田 清一

1680

グルになつてる集団を徹底的に解体して、追い詰められた一人の人に徹底的に肩入れするのが、本来の法です。

木庭顕

法は国民を縛るルールだと思われがちだが、そもそもは個人の自由な存在の基盤を絶対に損なうことのないよう護るためであると法学者は言う。何者かがそれを徒党を組んで実力で侵すのをまずはブロックし、当該個人の身柄を保全した後に、いずれに理があるか、公開の場でじっくり論じるのだ。『誰のために法は生まれた』から。

2019・12・26

折々のことば

1681

～1685

背後を思うとき、自分が、がらんと
うの頭蓋骨になったような気がする。

小池昌代

折々のことば

鷲田 清一 1681

「もめごとが避けられないとすれば、わたしの時代にそれを片づけて、子供には平和な暮らしをさせてやりたい」

トーマス・ペイン

米国の独立運動に与した思想家は1776年、独立戦争のさなか、反対派の一人の「ともかく、わたしが生きている間は平和であって欲しいんです」といった物言いは誤りで、真に子供を思うならこう言わなければならない。後退を強いられた自軍兵の士気を高めんと草した「アメリカの危機」(「コモン・センス他三編」小松春雄訳)から。

2019・12・27

折々のことば

鷲田 清一 1682

背後を思うとき、自分が、がらんと
うの頭蓋骨になったような気がする。

小池昌代

後ろ姿というのはよりによって当人だけが見られないもの。それは無防備に他人の視線に晒されている。だからそれにふれる時、「見てはならないものを見たようで後ろめたい感じを覚える」と詩人は言う。見えない背面、それは絶対に体験できない自己の死に似ている。《私》の存在はその意味ですでに「彼岸」へと明け渡されている。随想集『黒雲の下で卵をあたためる』から。

2019・12・28

折々のことば

鷲田 清一 1683

「たまる」「当たる」「もたらさる」だからほんとうにこのものなんてもうわからない

石原祐子

ポイント還元にボーナスポイント。これに「ラッキー」とVサイン。そこには「得した」感覚はあっても「恵み」の感覚はなく、その下心を知られば、さもない自分の姿が映るだけ。ちなみにhappy happenと語源が同じ。たまたま幸福に与るという含意がある。同じたまたまでもラッキーとは違い、どこか感謝の念が滲む。本紙「朝日歌壇」(12月15日朝刊)への投稿から。

2019・12・29

折々のことば

鷲田 清一 1684

智は、いつも、情に一ばい食わされる。

ラ・ロシュフコー

人がなす推論や判断は、期待や恐怖、自愛や憎悪といった感情に知らぬまにバイアスをかけられ、あらぬ方向に向かう。希望的観測というのはその典型だ。知性は挽みやすいものなのだ。だからだろ、知性はみずからに明確な根拠や厳密な方法を課してきた。推論や判断は、性急ではなく丹念に、そして注意深く。17世紀フランスの公爵の『箴言と考察』(内藤濯訳)から。

2019・12・30

折々のことば

鷲田 清一 1685

わたしはキャパシティがパワーに転化する瞬間の驚くべき「力」を知った

港千尋

欧米やアジアの大都市には中心に広場がある。朝市というローカルな経済が営まれるその空間が、ある日突然、「市民による判断と要求のため」の空間になる。この場所の「力」はそのキャパシティ(許容度)にかかっていると、写真家・著述家は言う。序列も固定席も集団の内外の壁もない中、意見の環が強度を増しつつ広がってゆく。デモクラシーの原点か。『風景論』から。

2019・12・31

折々のことば

1686

～1690

戦争をした人が
もったいやな人なら、良かった。

梶谷和恵

折々のことば

鷲田 清一 1686

おめでとございます。今年もよろしゅうお願いします。ほけますからお願いします。

信友直子の母

ドキュメンタリー番組制作者の母はよく冗談を言って周りを元気づける人だったが、認知症が昂じ、「迷惑をかけている」との責めと絶望とその繕いに苦しんだ。が、それもすぐに忘れる。そんな葛藤を笑みを絶やさず見守る夫と娘のおかげで、「自虐的なユーモア」が回復してきた。そして新年、「今年の抱負」をこつ口にした。映画「ほけますから、よろしくお願いします。」から。

2020・1・1

折々のことば

鷲田 清一 1687

自分で見て、自分で考えて、自分で知って、その中で自分で表現をして表明をする。そこからしか自由や権利は生まれません。

卯城竜太

あいちトリエンナーレの「表現の不自由展」その後中止問題をめぐる参加アーティストらの会見で、美術家集団「Chim↑Pom」のリーダーはこう述べた。もちろん「自分で」というのがどういうことかはすぐには見えないし、さらに彼らのその自由を擁護し支える人々の自由なしには難しい。でも、すべてはそこからしか始まらない。

2020・1・3

折々のことば

鷲田 清一 1688

年収は増えたけど、お金がなかったころの方が楽しかったよね

岩佐十良

雑誌編集者は同僚らと、東京の古アパートで会社を始めた頃をこつくり返る中、地方への移転を決めた。日々残業し、深夜でも稼いだ金で馳走を食べに行けるそんな生活に疑問を感じて。人は複数の時間を生きている。生き物として、家族、友人、社員、市民として。その一つが他の時間を犠牲にすれば元も子もない。本紙2012年9月15日朝刊be「フロントランナー」から。

2020・1・4

折々のことば

鷲田 清一 1689

決意した不幸な母子心中から、みじめな母親を救ったのは、抱いていた嬰兒の微笑であった例も少なくない。

霜山徳爾

この期に及んでも嬰兒は安心して、これから起るであろうことに身を委ねようとしている。「たおやかな蕾がひらく」がときこの微笑にふれて、母親はおもわず「帰郷への遠いながしを受けた」と感じたはずだと、臨床心理学者は言う。「人間の業の重い翳がさし始め」る直前の自分に再会したかのように。『仮象の世界』から。

2020・1・5

折々のことば

鷲田 清一 1690

戦争をした人が
もったいやな人なら、良かった。

梶谷和恵

戦地で人を殺したおじいちゃん。何かしてあげると必ず「ありがと」と返し、私の生意気な言い草にもじつと耳を傾けてくれる人。同じ私のおじいちゃん。「好きだから。よけい／怖いです」と詩人は綴る。涙のない酷い人だったらよかったのに。そして温みと残酷が同じ人に同居しうるのを、翻って詩人は自身にも漢と感じる。詩「ほんとうのこと」(詩集『朝やけ』)から。

2020・1・6

折々のことば

1691

～1695

子供を格言の陳列棚にしたり、従順な動物にしたりしてはなりません。

下村湖人

折々のことば

鷲田 清一 1691

戦争とその産物は、経験しなかったわれわれにも恥辱をあたえる。

多木浩二

虐殺、拷問、凌辱、監禁、肅清。20世紀の戦争で、人類は「人間性の境界」を踏み外した。経験したか否かとはい別に、身を持つその「恥辱」の過去を反芻することなくしては、いかなる歴史認識も奥行きをもちえないと、批評家は言う。その反芻をなしうる思想や芸術の力や「日常生活を維持していく知恵」がなければ、人類はとくに滅びていただろうと。『戦争論』から。

2020・1・7

折々のことば

鷲田 清一 1692

財多ければ、身を守るに惑ふ

兼好法師

財が多いとそれに囚われ、身を保つのが難しくなると、法師は言う。財産の多寡が人生の幸不幸を決すると思ひ込むと、財が目減りしただけでひどく不安になる。人の評判ばかり気にしていると、何がほんとうに大事なものか見えなくなる。財に恵まれない人のほうがかえって隣人に気前がいいのは、日頃よく目にする事。『新版 徒然草』（小川剛生訳注）第三八段から。

2020・1・8

折々のことば

鷲田 清一 1693

子曰、過而不改、是謂過矣

孔子

「子の曰わく、過ちて改めざる、是れを過ちと謂う。人はよく過つ不完全な存在。人の評価はむしろ過ちと知った後の身の処し方で決まる。そこをこそ過つなと。『過ては則ち改むるに憚ること勿かれ』ともいわれ、さらに弟子の子夏が「小人の過つや、必らず文」と述べる。「文」とは言い繕い粉飾して欺そうとすること。『論語』（桑名治訳注 卷第八・衛靈公第十五から）

2020・1・9

折々のことば

鷲田 清一 1694

命もいらぬ、名もいらぬ、官位も金もいらぬという人は、始末に困るものなり。

西郷隆盛

ここで「始末に困る」は「手に負えぬ」「扱いにくい」「手を焼く」という意味。世間の習いを一顧だにしない偏屈の人、それくらいに破格の人でないと「大業」はなしえないと西郷は言う。維新後、政府と対立し下野した西郷の許へ学びに行った旧庄内藩士らの編纂による『大西郷遺訓』（林房雄訳）から。同時代の尺度では測れぬ人にして初めて、時代を超える場所に立ちあがる。

2020・1・10

折々のことば

鷲田 清一 1695

子供を格言の陳列棚にしたり、従順な動物にしたりしてはなりません。

下村湖人

作家は、子供の登山を例に次のように語る。親が子をおんぶして登るのは論外。子供を先導したり、道を詳しく教え一人で行かせたり、すべて子供に任せたりするのはなく、親子が一緒に道を探しながら登るのがいい。教育で重要なのは説教や訓戒や鍛錬ではなく、その「道行き」であり、子供が自身を内から奮い立たせるその工夫だと。随想集『青年の思索のために』から。

2020・1・11

折々のことば

1696

～1700

住まいは田舎がいい、森と日溜まりでひと寝入り、飛ぶ鳥、稲と日照り、まだ独りもいいが、家内はいます

森博嗣

折々のことば

鷲田 清一 1696

1964年東京オリンピックの直後、作家はこう書いた。膨張し続けるこの都会で「熱と埃と響きと人塵芥」の中を浮き沈みする人々は、みな自分のことで精一杯、隣人への関心も失っている。空虚な夢に弄ばれ、世界の中に自分をうまくマッピングもできず、その存在は「収縮」してゆくばかりと。ルポルタージュ『すばり東京から』

開高健

2020・1・12

折々のことば

鷲田 清一 1697

文化には、方向性はない。おじいちゃんおばあちゃん孫から教わることもある。それが文化のすばらしいところだと思う。

遺伝子は先に生まれたものから後に生まれたものに伝わるが、人類の文化にはその逆もあると産婦人科医は言う。たしかに人類以外の動物も子育てはするが、子が親を介護したり、孫が祖父母に何かを教えたりするのは人類だけ。となると、「ケアする動物」というのも人類の定義に加えたくなる。最相葉月との対談『胎児のはなし』から。

増崎英明

2020・1・13

折々のことば

鷲田 清一 1698

住まいは田舎がいい、森と日溜まりでひと寝入り、飛ぶ鳥、稲と日照り、まだ独りもいいが、家内はいます

短編小説集『虚空の逆マトリクス』に出てくる回文。昨今の私たちの気分を浮き立たせてまことにお見事。押韻や駄洒落から語呂合わせ、逆さ読み、早口言葉、尻取りまで、言葉で遊べるのは言葉がそもそも何かを別次元にすらすものだから。遊びとしても楽しいが、ときに時代の「あたりまえ」を激しく揺るがす遊びともなりうる。

森博嗣

2020・1・14

折々のことば

鷲田 清一 1699

タイトルは No Umbrella をお願いします

井上陽水

日本文学研究者のロバート キャンベルは、陽水の名曲「傘がない」を「I've Got No Umbrella」と英訳しようとした時、彼にこう言われた。『人間として生まれるとこうなの?』という、そういう大きな感じのほうが感情移入しやすいですね」とも。私ごとよりも少し地平を揺り、割り切れない思いやその余白を歌うほうが心に深く沁みゆくからか。キャンベル著『井上陽水英訳詞集』から。

2020・1・15

折々のことば

鷲田 清一 1700

新鮮に勝る美味なし。

美食家でもあるこの陶芸家のおっしゃることに異論はありません。でも、冷蔵庫を開けるとやはり古いものから順に食べる。それに、味の極みを知るまでに人はひどく遠回りをする。甘辛から酸味、苦味を経て、発酵や毒の味まで楽しむ。その果てに気づく。手を加えぬ（生）こそ最良と。真理に到るまでの人のこの空しい求道が、やるせなくも愛おしい。『魯山人の食卓』から。

北大路魯山人

2020・1・16

折々のことば

1701

～1705

限りなく目につきにくいこういう生涯のすべてが、まだ記録されていないのよ

ヴァージニア・ウルフ

折々のことば

鷲田 清一 1701

だが、人々が直面しているのはつねに「過去をひきずった今」なのである。

安克昌

阪神大震災から3年後、神戸の「復興」は着実に進んだが、住民にはどこか「しっくりこない」思いがあったと、震災後ずっと全力で救護活動にあたった精神科医は言う。喪った家族は戻ってこないし、転居に次ぐ転居や失業で「再建」に行き詰まった人も少なくない。震災の記憶は「日々の生活のストレス中に溶け込んで」といふ。心の傷を癒すという「心」（新增補版）から。

2020・1・17

折々のことば

鷲田 清一 1702

こんな人でもやってんだっていう愛され方かな。

柳家小三治

噺家には「違ふんじゃねえか」と言っても「私は私でやってるんです」と言っているかない意固地な弟子がいた。こうと決めつけられると「素直になれない」ところは、同じく教師を父にもつ噺家にも身に覚えが。そして、どこか弱さを隠しきれない綻びが早世したこの弟子にはあって、だから多くの人に愛されたことを、ちらっと羨む。自伝『どこからお話ししましょうか』から。

2020・1・18

折々のことば

鷲田 清一 1703

好きなものを好きっていつのって怖いな……

漫画『ブルーピリオド』1巻から

山口つばさ作。ワル仲間ともきっちりつきあい、受験のための勉強もそれなりにし、それが結果に出てくるのになぜか手応えを感じられない高校生が主人公。美術の時間に早朝の渋谷の「青さ」を描こうとして絵に目覚め、美大に志望を変える。空気を読み、人生の計算をしつつも、無理はしない、これまでのソツのない生き方が綻びそうな予感に、彼はふと戸惑い、こう思う。

2020・1・19

折々のことば

鷲田 清一 1704

単一民族という時、日本人の顔、顔、顔がそれを大いに裏切っているのは愉快である。

茨木のり子

人の顔は「一本の茎の上に咲き出た一瞬の花」だと詩人は言う。蕾もあれば、咲きそめ散りかけも、萎びた実もあると。が、愉しみは「はからずも日本列島で咲いている」様々の顔にふれること。すれ違う人を見てはスラブ系？インド系？などと想像する。自分の顔にはシルクロードを流離った「胡族の末裔」が映るかもと、その選けさに浸る。随想集『一本の茎の上に』から。

2020・1・20

折々のことば

鷲田 清一 1705

限りなく目につきにくいこういう生涯のすべてが、まだ記録されていないのよ

ヴァージニア・ウルフ

文学は長らく、女性を「男性との関係」という「勝手に色づけされた光」の下でしか描けなかったと、20世紀前半の英国の作家は言う。いま必要なのは、そうした光の外で、街を行き交う女性たちの無言の経験の集積を、さらには「女性として書きながら、女性であることを忘れた女性」としての自身の知覚を描くことだと。物語体の評論『自分ひとりの部屋』（片山亜紀訳）から。

2020・1・21

折々のことば 1706 ～1710

人間の経済は原則として社会関係
のなかに埋没しているのである。

カール・ポランニー

折々のことば

鷲田 清一 1706

昔は古典や物語中の人物は、生きて町なかを歩いていた。

山本夏彦

芝居見物や講談本に民衆がなじんでいた頃は、登場人物は「実在の人物よりはるかに実在していた」とコラムニストは言う。彼らは「我々の代表者」であったと。自分だてきつとそうしただろうという感覚がどこかにあって、見ず知らずの他人の死も自分たちの「典型」として受けとめられた。社会の分断を堰き止める工夫の一つだったか。『日常茶飯事』（1962年）から。

2020・1・22

折々のことば

鷲田 清一 1707

ほんまに、八十歳になって初めての「い」ぎようさんありませ。

岡部伊都子

婚約者に「この戦争は間違っている」と告げられたのに、日の丸の小旗を振って送り出し、彼は戦地ではかなく散った。若き日のその痛恨事を原点に、随筆家は戦争や沖縄、差別や環境について、「言わんならんことは言わんならん」と語り続けた。「私は、子無し。私が赤ちゃんなんですから」と小児科医に相談し、老いても日々「刻々の誕生や」と。自伝『遺言のつもりで』から。

2020・1・23

折々のことば

鷲田 清一 1708

人間の経済は原則として社会関係のなかに埋没しているのである。

カール・ポランニー

さまざまの社会的活動には「利得」が普遍的な動機としてある、つまり市場での価値があらゆる価値の公分母だとするような社会は、歴史的には例外的だと、ハンガリー生まれの経済人類学者は言う。たしかに経済という語の元となった「経世済民」（世を経め民を済む）でも「経」と「済」は世と民のためにあり、逆ではない。『経済の文明史』（玉野井芳郎・平野健一郎編訳）から。

2020・1・24

折々のことば

鷲田 清一 1709

想い出の持ち方というのは、想い出し方というところにもなるだろう。

串田孫一

想い出を語る時は少し慎重深めに、と随筆家は言う。想い出の持ち方は人さまざま。悲しい思いに沈んだまま、「自分がのがれる術を考えることさえ」申し訳なく感じる人もいれば、知らず知らず粉飾して見せびらかす人もいる。それらをきちんと「納める」ところへ納め「ないで」「感情を添えて」「いきなりむき出しで語ると、時に人をひどく傷つけると。『考えることについて』から。

2020・1・25

折々のことば

鷲田 清一 1710

物事について考えを固めてしまわず、見えているものを疑うような心を開いておけば、世界を眺める目も丁寧になる。

ポール・オースター

それを「注意深さ」と米国の作家は呼ぶ。「爆笑もののへま、胸を締めつけられるような偶然」やさまざまの夢、混乱。自分が答えをもつ訳ではない事柄に人は翻弄（はんろう）されつつ生きるのだからと。ラジオのリスナーたちの悲喜（きぎ）もごもごの体験談を集めた『ナショナル・ストーリー・プロジェクト』（柴田元幸他訳）の「編者まえがき」から。

2020・1・26

折々のことば

1711

～1715

人間というのは、男女とも、たのもしくない人格にみりよくを感じないのである。

司馬遼太郎

折々のことば

鷲田 清一 1711

「その、『生まれてみなければわからない』って
いう賭けは、いったい誰のための賭けなの？」

川上未映子

小説『夏物語』から。結婚せずに独り精子提供という方法で子を得ようとする主人公に、そうした出自にも絡んで苦しい体験を重ねてきた知人は、生を痛みとだけ感じ死んでゆくかもしれない存在を産むのは暴力ではないか、と迫る。賭けは誰のためかと。生はないよりあるほうがいいと誰が言い切れるのか。この問いに怯んだ彼女は、それでも見ぬことより会うことに賭けた。

2020・1・27

折々のことば

鷲田 清一 1712

一言でいってしまえば、私は化粧する女が好きです。そこには、虚構によって現実を乗り切ろうとするエネルギーが感じられます。

寺山修司

化粧は自己陶醉でも小市民的な贅沢でもなく、むしろ「ゲーム」であって、人生を支える力が想像力にあることの証だと、演劇家・歌人は言う。そして「たかが人生じゃないの」というほどの余裕すらときに感じる。くわえて私は、会った相手のまなざしをデコレートしてあげる行為だという考え方も好きだけれど。『青女論』から。

2020・1・28

折々のことば

鷲田 清一 1713

人間というのは、男女とも、たのもしくない人格にみりよくを感じないのである。

司馬遼太郎

作家が小学6年生に向けて書いた『二十世紀に生きる君たちへ』から。自分がより大きなものによって生かされていることを知ってほしい、他人の痛みを感じ「いたわる」人になってほしいとの、願いがこもる。「たのもし」は「頼りになる」こと。私の言い方だと「逃げない」体を張ってくれらなあと。こんなときあいつがいた

2020・1・29

折々のことば

鷲田 清一 1714

いましばらくにとつて必要なのは、いわゆる有益な人なんかではなく、一見したところムダに見えるような人たちとの交流ではないか。

植島啓司

知識やお説教はもういい。笑わせたり、知らない物語を聴かせてくれるような「おもしろい」人と一緒にいたいね、と宗教人類学者は言う。「なにかに胸騒ぎして、玄関から飛び出したりする経験」をもっと探そうと。そう、縮こまるより膨らみたい。畏まるより開いていたい。百の大切な言葉を味わうコラム集『心コレクショ』から。

2020・1・30

折々のことば

鷲田 清一 1715

知り尽くしているようでいつまでもわからない住み慣れた地、見つめようとするとかえってばやけてくる故郷。

張競

道端の悪臭も壁のひびも手に取るように思い出せるし、毛沢東の語録だって暗唱できるのに、それらを繋ぐ糸が切れている。「郷愁」と「呪い」が合わさって甦る。生まれ故郷、上海を、遠く離れた異郷から観察するには、だから「金属的な冷たい視線」が要ると、比較文学者はひりひりした口調で綴る。『異文化理解の落とし穴』から。

2020・1・31

折々のことば

1716

～1720

一生に一度は、すべてを根こそぎく
つがえし、最初の土台から新たに
はじめなくてはならない

デカルト

折々のことば

鷲田 清一 1716

いかにもうまい／まいを語るのには自
由。それよりも「食べる」ことの実際と夢想
との落差を逆手にとって、記憶や夢想の中
にしかないものを「無いからこそ」深く文
章で味わう、その悦楽が文明だとドイツ文
学者は言う。「羨むべきは文明である」と。
茶の湯でも、お茶は先送りしたまま、いろ
いろな趣向を凝らして客をもてなし、そこ
に到る過程を楽しむ。『食物漫遊記』から。

種村季弘

2020・2・1

折々のことば

鷲田 清一 1717

あんた、金魚か。

友人の妻

友人が妻によくこうなじられると言っ
て、水面に口を開けてパクパク、餌と酸素
を待ただけのお気楽が腹に据えかねたか
と思った。が、前に買った物をまた買う、そ
んな忘れっぽさに呆れての言葉だった。金
魚があっつかと思えばこっちへと、のほほ
んと向きを変える姿に喩えて。「鶏は三歩歩
けば忘れる」という諺もあるが、こっちの
ほづがほのぼのとしていい。それとも逆？

2020・2・2

折々のことば

鷲田 清一 1718

一生に一度は、すべてを根こそぎく
つがえし、最初の土台から新たに
はじめなくてはならない

デカルト

けっして大仰な物言いではなく、誰もが人
生で幾たびか経験していること。自分が母
親にとって唯一の相手ではないと知らされ
た時。事故で体が再起不能なまでに損なわ
れた時。ある人の言葉に体の芯から揺さぶ
られた時。人は自分のこれまでの全体を語
り直すほかにないと思ひ定める。17世紀の哲
学者の『省察』（井上庄七・森啓訳）から。

2020・2・3

折々のことば

鷲田 清一 1719

東京を舞台にして映画をつくるのはめっちゃ
ちや難しいし、モチベーションがわかない。

押井守

東京はずっと、利便性しか視野になかつ
たんじゃないかと映画監督は言う。だから
「象徴」もぶらつきたい場所も減る一方。
欧州の都市は昔の街並みを丁寧に復元する
が、東京は「ディテールがいい加減」。だか
ら撮っても嘘っぽくなる。細部にこそ民衆
の生の根っこがあるのにと。へんなぜ東京に
「そぞろ」モニュメントがないのか（聞き
手・五十嵐太郎、「中央公論」2月号）から。

2020・2・4

折々のことば

鷲田 清一 1720

襁褓に包まれてはいても、徳はやはり徳であ
る。

デイヴィッド・ヒューム

心の寛さや親切、温順や公平などの「徳」
をそなえていても、人にはいろんな事情で
社会の役に立てないこと、ときに人を深く
思いやるがゆえに法に背くということがあ
る。にもかかわらず彼を人として評価し信
じていることができるのは、そこに「善」に向
かう構えを見て心地よくなるからだ。18
世紀スコットランドの哲学者は言う。「人
間本性論」第3巻（伊勢俊彦ほか訳）から。

2020・2・5

折々のことば

1 7 2 1

～ 1 7 2 5

誰かに依存していることを忘れるほどに依存できている状態が自立である

東畑開人(とうはた かいと)

折々のことば

鷲田 清一 1721

まるで地球と自分のはらわたが一本のヒモで結ばれ、自分の体内にあるものをみるみる自然に吸いとられていく感じ。

原研哉

サハラ砂漠で放尿した時の「異様な感触」をグラフィックデザイナーはこう記す。同時に、この水分めがけ地中で生物たちが猛烈な速度で移動してくるような「恐怖」も。文明は溜めることに呆け、ばらまく悦びを忘れた？そして「処理」ではなく「行為」を豊かにする装置」としてのトイレのデザインを夢想する。『デザインのめざめ』から。

2020・2・6

折々のことば

鷲田 清一 1722

経済を発展させるのは「弱い人」、あるいは私たちの中にある「弱さ」である。

堂目卓生

今日の企業活動には、熾烈な競争を勝ち抜くという強壮なイメージがつきまとう。しかしそれを根底で突き動かしているのは「弱さ」だと、経済学史家は言う。生活物資の欠乏から虚栄心、嫉妬心まで。そういう視点から見直すと経済の別の顔が見えてくる。『そういう英語で欲求(want)は同時に欠乏を、虚栄心(vanity)は空しさを意味する。著書『アダム・スミス』から。

2020・2・7

折々のことば

鷲田 清一 1723

誰かに依存していることを忘れるほどに依存できている状態が自立である

東畑開人

人が自らの足で立てるのは「どこどころに見えないほどに小さな椅子がきちんと用意されて」いるからだ、臨床心理士は言う。誰もが日々誰かの見えないほど小さなケアに支えられている。「自立」とは誰にも依存しないことではなく、支え合いのネットワークをいつでも使える用意ができていること。本紙東京本社版1月22日夕刊の寄稿「大佛次郎論壇賞を受賞して」から。

2020・2・8

折々のことば

鷲田 清一 1724

そうか。廢墟に棲むことを選ぶ人がいてもいいのだ。

與那覇潤

同時代の社会を捉えるために「歴史」の中にそれらを丹念に位置づける努力を人びとはしなくなった。それでも、国の隅々まで、あるいは国境を跨いで、一つの歴史を押しつけ、刷り込むとするよりは、この語りえなさの絶望の内に立ち尽くし、「歴史」の記憶を密かに繕いつつ、「歴史」が朽ちゆくのを眺めているほうが意味があると歴史学者は書く。『荒れ野の六十年』から。

2020・2・9

折々のことば

鷲田 清一 1725

「家の仕事というのは、生きるための基本やさかいな」

水橋文美江(脚本)

NHK連続テレビ小説「スカーレット」(2月1日放送分)から。元女中のベテラン家政婦、大久保さん。主人公・喜美子が中学を卒業し新米女中としてやって来た時に特訓した。炊事一つとっても、限られた予算で献立を考え、作りながら片づけ、家族の様子も窺いつつ全体をケアする。家事がちゃんとできれば他の何でもできると、陶芸家の道に傾く喜美子に太鼓判を押す。

2020・2・11

折々のことば

1 7 2 6

~ 1 7 3 0

音楽でお腹いっぱいにはならないけれど、胸はいっぱいになれる。

下野竜也

折々のことば

鷲田 清一 1726

出来ない私の過去のように
下手ですが精一はい
心をこめて描きました。

石垣りん

詩「出来ない絵」(詩集『私の前にある鍋とお金と燃える火と』所収)から。「私」はここに描いた空を、湖を、木々を愛していると「きつぱり思っている」。「下手だからみつとない」といった「世間体」など捨ててこの絵を「貴方にさしあげます」と。祈りと慈しみを深々と湛えた眼差し。射さずに撫でるように、包むようにあるもの。

2020・2・12

折々のことば

鷲田 清一 1727

この作品の多くの部分は、琵琶と声の語り物として使われていたことも知る必要があるでしょう。

徳丸吉彦

『平家物語』は中世文学を代表する作品として教科書に載っているが、それは広義の音楽でもあった。大仏眼供養も音楽も音楽の裏打ちなしにはありえなかったと、民族音楽学者は言う。文芸にも儀礼にも、意味を伝えるテキストのみならず、聴く人の皮膚にふれてくる肌理(テクスチャー)がある。『ものがたり日本音楽史』から。

2020・2・13

折々のことば

鷲田 清一 1728

時間の「欠乏」はお金である程度解消できますが、お金が「欠乏」していれば、時間の「欠乏」により拍車がかかるのです。

周燕飛

子育て中は食事の世話から戸外活動、添い寝まで時間は満杯。お金があれば、買い物が必要な地域に住み、ベビーシッターを雇って時間も「節約」できる。お金がないと、食費を抑えようと、特売日を狙ってさらに遠くのスーパーへ歩くことになり、一層時間がかかる。その負のスパイラルを労働経済学者は注視する。『貧困専業主婦』から。

2020・2・14

折々のことば

鷲田 清一 1729

音楽でお腹いっぱいにはならないけれど、胸はいっぱいになれる。

下野竜也

子ども向けにコンサートを開いた時のこと。指揮者の下野は楽団員とベートーヴェンの交響曲第5番「運命」を徹底的に練習し、コンサートで演奏したら、ある子が思わず「ブラボー」と叫んだ。音楽は、ぺしゅんこになった心にもムーブを起し、「生きていく」という感覚を甦らせてくれると下野は言う。「週刊金曜日」(1月24日号)でのインタビュー(聞き手・崔善愛)から。

2020・2・15

折々のことば

鷲田 清一 1730

「誰も独りぼっちじゃせん、いっしょや」

桑原亮子(脚本)

NHK土曜ドラマ「心の傷を癒すということ」(2月8日放送分)から。阪神・淡路大震災後、孤独の淵に佇む人たちの「心のケア」に尽くすも、病に侵され早世した在日3世の精神科医・安克昌の人生を描く。療養中、公園で妻が一枚の落ち葉を大切に持ち帰ろうとする姿に、「心のケアって、何かわかった」とこぼれ出す。愛する家族が安にその人生をかけた仕事の意味を教えた。

2020・2・16

折々のことば

1 7 3 1

~ 1 7 3 5

「とおくに いるからだよ。とおくに
いるから ちいさく みえるんだよ」

くりはらたかし

折々のことば

鷺田 清一 1731

うれしさの沸騰点には、切なさがある。

幸田文

作家の知人は、母親思いの子供たちに囲まれ幸せな老境にしか見えないが、本人はそれが痛いと言う。年々子供たちは「やさしさを深くしてゆく」。その心根が「よすぎで切ない」と。その思いは溢れんばかりに水を張ったコップに似ているが、「置いたなり静かにして」おけば水も自然に減ってゆくとも。その透きとおった心持ちがなんとも爽やか。随想集『季節のかたみ』から。

2020・2・17

折々のことば

鷺田 清一 1732

子どもたちの未来はしかし、不都合な過去が先送りされる「ミ捨て場」になっています。

藤原辰史

戦争の最終責任を誰とせよと、そのつけは社会の最も「脆弱」な部分に流れてゆくと歴史学者は言う。例えば家族の飢えを知りつつ目の前のパンをたまらず食べ尽くした子が、のちに罪の意識から首を吊る。こうした「切なさの海」に浸ることなくして「歴史の深いところ」は触診できないと。「切なさの歴史学」後編（ウェブマガジン「せかいしそ」）昨年12月13日配信から。

2020・2・18

折々のことば

鷺田 清一 1733

「とおくに いるからだよ。とおくに
いるから ちいさく みえるんだよ」

くりはらたかし

アリが遠くにいるカタツムリを見て、ほくより小さいと笑うと、カタツムリがこう返した。次にカタツムリが遠くにいるネズミを見、そのネズミがネコを見て同じことを知る。最後はタロウくんが空を見上げ、指の環の中に入るほど小さな飛行機に大勢の人が乗っていると思えば不思議な気持ちになる。想像するという大事な力を身につけた。絵本『とおくに いるからだよ』から。

2020・2・19

折々のことば

鷺田 清一 1734

走っているからこそ考える、手や足を動かしているからこそ思い付くのかも知れない

矢部潤子

平積みから返品・補充、掃除まで、元書店員は36年間、工夫に工夫を重ねた。とくに棚づくりは店の姿勢が表れる。「自分の棚が実はとても貧相で、それは単に自分の貧しさが透けて見えちゃってると不安だったが、挫折し走り回ったと言う。書店の仕事に限らず、忙しくてじっくり考える時間がないというのは、自分への言い訳なのか。『本を売る技術』（編集・杉江由次）から。

2020・2・20

折々のことば

鷺田 清一 1735

置かれた場所で咲きなさい、ではなくて、咲く場所に置きなさいってことなんです。

杉江由次

元書店員・矢部潤子に取材し、彼女の著作『本を売る技術』を編んだ出版社営業担当は、本の置き方というのは「子育てみたい」と言う矢部に、こう言葉を重ねる。本にも思われぬ「実力」があったり、じわじわとゆっくり育っていったり、いろんな一生がある。それを守り育てるには、「置き場所の見極め」が大事。もちろん本の場合には人生と違い、見切りというものも必要だけれど。

2020・2・21

折々のことば

1736

～1740

言葉で死体を埋めることもできるし、それを掘り起こすこともできる。

レベッカ・ソルニット

折々のことば

鷲田 清一 1736

政治はあくまで「お手伝い」の役割を超えてはならない

福永文夫

日本政治史家は、その著『大平正芳「戦後保守」とは何か』の中で、この元首相の信念はここにあったと言う。社会をコーラスに喩えた大平の文章を引きつつ、社会の秩序は国民がみずから闘いとするものであり、そのために国民は家庭や地域での生活にまで立ち戻り、それぞれの場所からこのコーラスに参加すべきで、政治の仕事はまさにその支援にあると、大平は考えていた。

2020・2・22

折々のことば

鷲田 清一 1737

たいしたことじゃないと思っていることが、どんどん積み重なっていくと、何か違う方向にいくとか、そういう時代を経てきました

武井照子

NHKで戦後「婦人の時間」や幼児番組を担当したNHKのアナウンサー・ディレクター。戦中はラジオで戦意高揚の原稿を読みと迫られ、終戦直後は復員兵たちに職場を譲るため女性には辞職せよと言われた。90歳を過ぎ、NHKの放送記念日特集の取材を受けて放送人としての歳月をこうふり返る。著書『あの日を刻むマイク』から。

2020・2・23

折々のことば

鷲田 清一 1738

吐息つで（あゝ、人間ズものア馬鹿だえんて賢しく、賢しえんて馬鹿だもんであた）てしやべるべねな。淋いもんだ。

高木恭造

津軽の眼科医の時「男イタコの口寄せ」（『方言詩集 雪女』所収）から。人類も5万年後は頭ばかりでかく体はモヤシみたいになり、10万年後には「人間ていうのは馬鹿なように賢く、賢いように馬鹿なものだった」と話すんだらうなと呟く男。千万年後には誰もいなくなり「蠅コアたった一匹ブーンてな」と続く。壮大なとほけの味。

2020・2・24

折々のことば

鷲田 清一 1739

言葉で死体を埋めることもできるし、それを掘り起こすこともできる。

レベッカ・ソルニット

問題をすらしたり、文脈や関連領域を無視したり、情報を除外・改竄したり。事実を曲げる方法は多々ある。その横行は、時代を「診断」し「世界を変える作業の鍵」となる着実に粘り強い言語の力を損なうてしまつと、米国の作家・歴史家は言う。「蜜行に抵抗する革命は、蜜行を隠す言葉に抵抗する革命から始まる」と。評論集『それを、真の名で呼ぶならば』（渡辺由佳里訳）から。

2020・2・25

折々のことば

鷲田 清一 1740

ジャーナリズムとは社会の自由度を計るためのなくてはならないバロメーターなのです。

マリオ・バルガス・リョサ

時代状況を正確に知るには、視角を可能なかぎり拡げておく必要がある。権力の検閲体制とそれを内面化した自主検閲、さらには大衆受けへと靡くことのないよう、自由な表現の場所を確保することが不可欠だと、ペルーの作家は言う。報道機関は取材と批判の力によってのみ、信頼に足る情報の溜め池となりうる。『プリンストン大学で文学／政治を語る』（立林良一訳）から。

2020・2・26

折々のことば

1 7 4 1

~ 1 7 4 5

震災で確信したの、人は自然から
学ばないと絶対に賢くなれない。

八巻寿文

折々のことば

鷲田 清一 1741

上出来。それでいいよ。一つだけでもいいと
ころがあれば充分だ。

池波正太郎

作家の若い友人が、結婚したい女性がい
るがいま一つもの足りないところばす。気に
入っているのはどこかと訊くと、約束の時
間を、きちんとまもること」だ。ならば
大丈夫と、作家は断言する。誰とて身仕度
には時間がかかる。それでも時間を守るの
は相手の時間を大切に思うからだ。ちゃ
んと「段取り」をつけれられる人は信じてよ
い。随想集『芝居と映画と人生と』から。

2020・2・27

折々のことば

鷲田 清一 1742

24時間365日、明るいハビじゃねえよ、み
たいな

ハビさん

社会学者・ケイン・樹里安の論考「共に都
市を歩く」『フィリピン・ハーフ』かつ『ゲ
イ』の若者のアイデンティティの軌跡（「都
市問題」1月号）が語る男性は、「ハーフ」で
あることを「自虐ネタ」に笑いを取るも、
その性的指向は話題から外す。そうした矛
盾の中で、つねに何かであるよう期待され
る不自由にしだいに消耗してくる。「主婦」
や「社員」もきっとこの消耗と無縁でない。

2020・2・28

折々のことば

鷲田 清一 1743

地球よりも遥かに大きな外に絶対に放り出さ
れないという保証は（い）にもない。

荒神明香

幼稚園児の頃、寝転がって空を見つめて
いて「空に落ちてしまえばそんな感覚」に襲
われたと、美術家は言う。後に「万有引力」
のことを知ってもこの感覚は消えなかった
と。昨年の千葉市美術館での「目 [mei]
非常にはつきりとわからない」展の図録か
ら。体を動かせば眼球も揺れるはずなのに
風景はなぜか揺れない。でももし眼に映る
ままに世界が揺れていたらどんなだろう。

2020・2・29

折々のことば

鷲田 清一 1744

私たちみたいな者にとつては、壊れたものは
壊れたものとしてそのまま残るんです。

震災で妻と娘を喪った男性

阪神・淡路大震災で瓦礫の下から発見さ
れた妻は片手に娘を、もう片方に幼い息子
を抱えていた。妻は自分の命にかえても子
を守ると生前言っていて、息子だけは助け
出された。男性は彼を実家に預け、遠い職
場と実家の中間に一人住まうが、「復興」と
いう言葉が嫌いだと言。やり直しはもう
ないからと。被災者の言葉を集めた『黒い
虹』（あしなが育英会編、1996年）から。

2020・3・1

折々のことば

鷲田 清一 1745

震災で確信したの、人は自然から学ばないと
絶対に賢くなれない。

八巻寿文

作品は、自分が作るというより「びちょ
んってしずくが垂れる」ようにやってくる
と、美術家・照明家は言う。「自然を身体
の器に納め」ること。それをくり返してい
るうち、自分が死者とも深くつながった自然
の一員だとわかってくる。「自然は信じられ
る。でも、防潮堤は信じられない」と。「八巻
寿文さんにきく」後編（「東北の風景をきく
FIELD RECORDING」第4号）から。

2020・3・2

折々のことば

1746

～1750

先に体に浸み込んでるものの扉が
後で開くような発見の喜びってあり
ますよね。

釈徹宗

折々のことば

鷲田 清一 1746

失敗することだって当たり前のように許され
たら、おもしろいだろ？

砥上裕將

交通事故で両親を失い、今は一人で暮ら
す主人公の学生は、ある日、その筋の大家
とは知らずに水墨画家と出会う。若者のま
なざしの底に深い哀しみを現わした画家
は彼を内弟子にとる。そしてまずは描けと
筆を持たせる。「真っ白い紙を好きなだけ墨
で汚していいんだよ」と。失敗を楽しめる
世界を私たちは若い人たちのために用意で
きているか。小説『線』は、僕を描く』から。

2020・3・3

折々のことば

鷲田 清一 1747

痛みがわずかに和らぐことによって、よつや
く痛みを感じることもできるようなそんな感
覚だった。

砥上裕將

高校時代に事故で両親を失った若者は、
ふとした機縁で水墨画家の内弟子となる。
できるかどうかではなくまずは歩き出すの
だと言われ、ひたすら描き続ける。その中
であらためて自身の哀しみの深さにも気づ
く。が、それは同時に、さまざまな命をつな
ぐ「一本の線」へと哀しみを溶かしゆくこと
でもあった。小説『線』は、僕を描く』から。

2020・3・4

折々のことば

鷲田 清一 1748

許されて何かするのは好きじゃない。すぐに
「いっよ」と君は言うけれど

佐藤真由美

「あの人が困ると満足 怒ったらもっと
満足 いつからだろう」とも「なぐさめて
ほしかったんだ そうなんだ 呼ばば出て
くるだけの女に」とも歌人は詠う。甘えたいが軽く見られたくない。もたれたいが自
分の足を確と感ぜたい。恋の距離感
ってややこしい。許可を得ないと動けない
ような関係には、どこか人を見くびるとこ
ろがある。歌集『きつと恋のせい』から。

2020・3・5

折々のことば

鷲田 清一 1749

先に体に浸み込んでるものの扉が後で開くよ
うな発見の喜びってありますよね。

釈徹宗

「愛嬌」「大袈裟」といった言葉や合掌
の仕草など、宗教は庶民の暮らしに深く浸
透している。ふだんは気づかないが、後で、
これはこれとこんなふうに繋がっていたん
だと知るのには楽しいと僧侶は言う。何より
自分の立つこの場所が「いろんなものの積
み重ねで成り立っている」と気づき豊かな
気持ちになれる。笑い飯・哲夫との共著
『みんな、忙しすぎませんか？』から。

2020・3・6

折々のことば

鷲田 清一 1750

「ここから」は「ここ」って分けることで「ここ」に垣根
をイメージしてしまいましたが、そこは「縁側」
って思ったらええんやって僕は思います。

笑い飯・哲夫

宗教や国の違いは人々を隔てる垣根のよ
うに思われているが、それは「縁側」、つま
り人をつなげる「縁」の生じる場所ではな
いかとお笑い芸人は言う。靴を脱がずにち
よいと腰掛け茶飲み話をする、そんな互い
の〈際〉がふれる場所。「そこがいつちゃん
景色ええんちゃうか」と。釈徹宗との共著
『みんな、忙しすぎませんか？』から。

2020・3・7

折々のことば

1 7 5 1 ~ 1 7 5 5

正解を探すんじゃなくて、ソリューションを探しましょう

平石界

折々のことば

鷲田 清一 1751

人生をなげちゃっている、しかもなげた結果暴れまわるとかそういうことではなくて……なげている自分を唄にしてみよう。

田中優子

初めて料理屋の座敷で、芸者が三味線を鳴らしながら小唄を歌うのを聞いた時、どこか人生への「絶望」を感じたと江戸文化研究家は言う。未来に希望を託さずに今ここで「手のうちに」しっかり絶望をにぎっている、それが唄になる。「明瞭な音でありながら、前向きではない音」だったと。そういう切なさだったのか。『江戸の音』から。

2020・3・8

折々のことば

鷲田 清一 1752

日本の音楽で、ことに他の国にない音楽の享受の仕方、ユニークな態度というのは……遠音を奏する（うたう）

武満徹

尺八や木遣は遠音がいちばん美しいと作曲家はいう。物陰からは、愁いを帯びた三味線の爪弾き、流しのくぐもった歌、そんな俯きかげんの響きがときれときれに聞こえる。立体的にはなく他の雑音に混じってかすめるように。そんなのびやかな「音色」に惹かれると。江戸文化研究家・田中優子の著作『江戸の音』の中の対談から。

2020・3・9

折々のことば

鷲田 清一 1753

正解を探すんじゃなくて、ソリューションを探しましょう

平石界

現代人は子育てを、親子や核家族といった枠に「閉じ込めすぎ」だと進化心理学者は言う。過去を見れば、さらに他の種にまで視野を広げれば、人まかせをはじめそんな手があったかということが色々ある。一つの「正解」などなく、苦しかったり煮詰まったりすれば別の楽な解決法を探せばいいと。齋藤慈子・久世濃子との鼎談「子育てに正解はあるのか」(UP 2月号)から。

2020・3・10

折々のことば

鷲田 清一 1754

誰かを助ける力が欲しい、痛切にそう願った。

安東量子

福島県いわき市で植木屋を営む女性は、原発事故で生活の「底が抜けた」人々の間で「最後まで悲しむ人間になろう」と思った。放射能汚染のリスクを解説する専門家には「そこに暮らしがあることを忘れないで欲しい」と。そして悔いの残らない行いをしたいと、チェルノブイリ事故後のベラルーシを訪ね、人々の経験に学ぶ。被災地住民の葛藤を描いた『海を撃つ』から。

2020・3・11

折々のことば

鷲田 清一 1755

彼は、最初の集まりの最後に言い残した「また来ます」という約束を、律儀に守り続けた

安東量子

福島第一原発事故の後、どの専門家も放射能汚染のリスクについて説明してから「決めるのは、あなたです」と言って帰っていった。国際放射線防護委員会に属する人のフランス人は違った。「愚直に足を運び、困りごとを聞き、一緒に考え」てくれた。だから同じ助言もまっすぐ聞けた。福島県いわき市で植木屋を営みつつ被災地の回復に取り組む女性の『海を撃つ』から。

2020・3・12

折々のことば

1 7 5 6 ~ 1 7 6 0

「これしかないやろ」

土井善晴

折々のことば

鷲田 清一 1756

「充実しているな」と思う時と「勘弁してくれ」と思う時と。

木村一基

高校生棋士が話題になるなか、遅咲きの将棋棋士が初タイトルを手にしたのは46歳の時。「そんな手があったのか」とAIソフトに気づかされもするが、経験を重ねたから強くなるわけではなく、将棋が嫌いになることだってある。それでも、「勝っている人はもつと苦労していると思います」と言えるのは、苦勞人だからこそ。本紙2月22日朝刊be「フロントランナー」から。

2020・3・13

折々のことば

鷲田 清一 1757

昔の人は本のなかをじっくり自分の足で歩いたのです。

三島由紀夫

現代人は小説を「味わう」ことをしなくなったと、作家は言う。車で移動する時のように主題と筋の展開ばかり追い、歩きながら足許の言葉の「織模様」を愛でではない。模様には、語の肌合いだけでなく、漢文調の「極度に簡潔な表現」や俳句風の「尖鋭な情緒の裁断」といった手管もある。文章を味わう楽しみは「言葉の深い由緒」を探るところにあると。『文章読本』から。

2020・3・14

折々のことば

鷲田 清一 1758

「鏡は見てはいけない」と、いわれて育ちました。

十代目・坂東三津五郎

バレエの稽古では、動きを点検するため鏡を見る。坂東流の舞踊はそれを禁じる。「形ばかり気にして内容がおろそかになる」からだ、歌舞伎役者は言う。見る別の自分が生まれ、「チェック機能」が働きすぎるのは、曲調に近づきすぎて情緒的になるのと同じくらい危うい。「身体の動きだけを身体にたたき込む」ように。『坂東三津五郎 踊りの愉しみ』（長谷部浩編）から。

2020・3・15

折々のことば

鷲田 清一 1759

社会が定める「こういうもの」と衝突ばかりする日々をおくってきたが、それはそれで悪くはなかった

落合恵子

教育や差別を論じても、介護や食の安全を語っても、一色に染まることを拒み、自由と抵抗の構えを崩さなかった作家は、連載エッセー「明るい覚悟」の最終回にこう記す。「二冊の本」3月号から。人生はいろんな柵や囲いにおつかる中でその形が仄見えしてくる。それは、箱入りの贈り物を貰った時、揺さぶって中身を探るのと似ている。

2020・3・17

折々のことば

鷲田 清一 1760

「これしかないやろ」

土井善晴

料理の基本は家庭料理。時代や気候、環境の変化の中で暮らしのありようを考えればこれだ、というのを創りたいと、料理研究家は言う。芸術制作でも、作家は何を創りたいかわからずに作業を始めるのに、できあがった時、いずれの細部も恣意にできないほど緻密な作品になっている。料理もまぎれもない技の一つ。シリーズ「わたしの仕事場39」（中央公論）4月号から。

2020・3・18

折々のことば

1 7 6 1

~ 1 7 6 5

「あしたハゼ釣り行くから、今日取材なんでどうしようかと思った」

中根喜三郎

折々のことば

鷺田 清一 1761

僕はもう、レジスタンスの時代だと思っているので。

平田オリザ

ファシズムの脅威は「ある日突然じゃない、気がつくところになってる」。悪意のない大衆が暴走した時がいちばん怖いと劇作家は言う。だから今、声を上げる。生活を背負うから声に出せない人を追いつめず、彼らも共感できる言葉を見つけねばと。報道番組やドキュメンタリーの制作者たちが有志で始めた映像プロジェクトChoose Life Project (6月10日配信) から。

2020・3・19

折々のことば

鷺田 清一 1762

それらの事物は私と同じく生きてきたし、私と同じく老いたのだ。

アンリ・ベルクソン

かつて滞在した町の家々を思い出して、その印象が昔と異なっているのに驚くことがある。「家」という同じ語から、変わらぬ同じ対象だと思いついていたのに、その印象が変容していることに。私の経験は事物の印象と混じりあっている。悲しみも悲しみだから同じなのではなく、月日ははさんでその内実をじんわり変えてゆく。哲学者の『時間と自由』(中村文郎訳)から。

2020・3・20

折々のことば

鷺田 清一 1763

桜はないのち一ばいに咲くからに生命をかけたわが眺めたり

岡本かの子

年に一度、ごく限られた季に一気に身を開き、そして散らせる桜。一度きりの華。人もまた、同じ一度きりの人生の今。ひよっとしたらこの次はもういのちの灯は消えているかもしれない。だから目を逸らさずに見る。じつと見入る。そんな覚悟を作家は詠んだ。御苑での集いで、そんなふうになにを眺める人はどれほどいただろう。百三十余首の桜の歌を含む歌集『浴身』から。

2020・3・21

折々のことば

鷺田 清一 1764

感動で一つになるって、心底嫌な言葉だなあ。そこから外れた人のことは勘定に入らなくて無さそうだし

大友良英

「そもそも一つにならなくてもそれぞれが生きていける世界のほうが、いいと思うんだけどなあ」と、音楽家は続ける。感動は、みなと同じ感情の渦に巻き込まれ、唱和することではなく、各人の内にふとざわめきが立ち起こり、それが何か判らないまま、深い眠りから醒めるような動きとなること。大友のツイッター(2月18日)から。

2020・3・22

折々のことば

鷺田 清一 1765

「あしたハゼ釣り行くから、今日取材なんでどうしようかと思った」

中根喜三郎

明日の釣りが今日の取材より大事。地味に工夫と努力を重ね、一つの仕事をとことん追求してきた人には、他人が何と言おうと動かせない軸と、世の風潮にまどわされない余裕がある。作家・森まゆみの訪問を受け、この江戸和竿の職人は飄々とう言いつつも、和竿の工法と歴史について丁寧に語った。『自由』とは、おのれの内に確かな拠点をもつこと。森の『手に職』から。

2020・3・23

折々のことば

1766

～1770

「それじゃあなたは、一日中工場で働きながら、それが大嫌いな男と同じなんだ」

アニー・ディラードの隣人

折々のことば

鷲田 清一 1766

ところが、ショックは「後から」やってきたのです。

ウオズミアミ

災害時に人はつい「心身の変調に気づかないまま無理を重ねる」。でもそういう人は「後からガタンと落ち込みがくる」と、熊本市在住の漫画家は語る。自分も本震後1カ月半ほどして突然、体に変調がきた。そういえば、幼くして神戸で被災した学生が、東日本大震災時にその映像にふれパニック障害を発症したとも聞く。「被災してわかった食事の大切さ」（「潮」4月号）から。

2020・3・24

折々のことば

鷲田 清一 1767

つい昨日のいっような気がするの、時は人の心をまたいて通り過ぎてゆくのですね。

山口恵子

長く「二人三脚」でやってきた母との最後の日々を綴った「元食堂のおばちゃん」で作家の『いつでも母と』から。二人の間は「特別なものでなかったからこそ、思い出すのが難し」かったが、書くことで、逆に、すっかり忘れていた出来事が泉のように次から次へと湧いてきたという。心の疼きもそうだけれど、誰かと過ごした濃密な時間はそうかんたんには過去にならない。

2020・3・25

折々のことば

鷲田 清一 1768

「それじゃあなたは、一日中工場で働きながら、それが大嫌いな男と同じなんだ」

アニー・ディラードの隣人

本を書くというのは「臨終の友人のそばに座るように」原稿の傍らに座って過ごすこと。だから「大嫌い」とこぼす米国の作家に、フェリーボートの乗組員をしている隣人がこう返す。一つを学べばまた次を学ばなくなるけど結局は「死んでしまふのですよ！」と言え、彼は領いて大笑い。生きる世界はまるで違うのに話は滑らかに転がる。『本を書く』（柳沢由実子訳）から。

2020・3・26

折々のことば

鷲田 清一 1769

「私は彼らを見棄てはしません」

モニカ・グリュッター

新型コロナウイルス感染をめぐるドイツの文化メディア担当相の3月11日付政府公報での発言から。「文化は時代が好調な時にだけ許される贅沢品ではない。それを欠く生活がいかに味気ないかを、私たちは今、目のあたりにしている」と言う。しばし緊急の措置を要請せざるをえないが、芸術家や文化機関と十分に協議しつつこの苦境への対応と補償に当たりたいと、決意を語る。

2020・3・27

折々のことば

鷲田 清一 1770

「その気持はありがたいがね、あたしの帳面も消させてください」

蜷川虎三

戦後28年間、革新府政を担った元京都府知事は、反骨の人でもあった。公舎には入らず借家住まい。慰問などすぐ人のために散財するので懐はいつも寒い。退職金はさすがに高額だったが、それも昔の選挙で資金援助してくれた人に返して回った。「喜んで出させてもらった金どすがな」と固辞されてもこう返した。蜷川虎三伝記編集委員会編・吉村康著『蜷川虎三の生涯』から。

2020・3・28

折々のことば

1771

～1775

人生にはたったひとつのレイヤーしかないと思い込んでいる人のなんと多いことか。

安田登

折々のことば

鷺田 清一 1771

人生にはたったひとつのレイヤーしかないと思いついて、池袋の駅前に立つと行政区画の上に当時の「シマ」が二重写しに見えるという。故郷の千葉の漁師町でも、物売りや奇態な人、寺の境内で見世物をする人など人生の幾層ものレイヤー（層）を見てきた。だからただ一つの未来に賭けるという愚をおかすにすんだと。地域文芸誌「隣町珈琲の本 mal(マル)」創刊号から。

安田登

2020・3・29

折々のことば

鷺田 清一 1772

「落語ってのはな、年寄りも子どもも若い人も、同じように笑い、涙するものだ。人の考えを押しつけるのは落語ではない」

五代目・柳家小さん

噺家の柳家さん喬は、師匠・小さんのこの教えを胸にこれまでやってきたという。ある日「おまえの話はムタが多い。それじゃ何も伝わらない」とも言われた。たしかに山の美しさといっても人それぞれに思いは違う。それで事細かな描写はやめて、「ごらんよ、きれいな山だねえ」と話すようにした。『柳家さん喬 大人の落語』から。

2020・3・30

折々のことば

鷺田 清一 1773

鶴はたくさん折ったが、私は広島についてなにも知らなかった。

藤岡亜弥

広島に帰郷し、その現在を撮り始めた頃は、ヒロシマを意識すればするほど「思い込み」や「空虚な自分」がそこに映り込んだと、1972年生まれの写真家は言う。やがてそのありふれた風景の中にヒロシマの傷口が丹念に縫い合わされていると気づき、原爆ドームを、川べりを行き交う人びとの姿越しに撮った。「DOMANI・明日 2020」展のカタログ（林洋子監修）から。

2020・3・31

折々のことば

鷺田 清一 1774

なりたい自分にならなくても、なった自分でも生きていい。

山田ルイ53世

漫才コンビ「髭男爵」の山田は、幼い時から「ほめられたい気持ち」が人一倍強かった。だから初めての子育てではやたらとほめたが、これでは「ほめられるために行動する子になリかねない」と思い直したという。人の間でもみくちやになっても、自分を消さなかったらこうなった、そういう自分を大事にしたいよねと。本紙の連載欄「キミとどたばた」（3月21日朝刊）から。

2020・4・1

折々のことば

鷺田 清一 1775

高貴さは、自らに課す要求と義務の多寡によって計られる

オルテガ・イ・ガセット

高貴な人とは、世襲される「血統」のことではなく、「自分を超え、自分に優った」規範に注目し、自らもまたその礎の一つになることを、たとえ背伸びであっても自分に強く迫る人のことだと、スペインの思想家は言う。人命を護るため、自らを後回しに奮闘する人はノーブルだが、その人たちの身を案じて行動する人もまたノーブルである。『大衆の反逆』（神吉敏二訳）から。

2020・4・2

折々のことば

1776

～1780

いつもと変わらない1日は
特別な1日

水橋文美江(脚本)

折々のことば

鷲田 清一 1776

人間であるということは、自分には関係がないと思われよう不幸な出来事に対して忤怩たることだ。

サン＝テグジュペリ

忤怩たるとはここでは「責任を感じる」ということ。郵便物を搬送する飛行士が遭難した。看護にあたる僚友は、彼が「人間のあいだに新たに建設されつつあるもの」に自ら職務を通じて繋がっていると感じていたと言う。人々の歓喜や悲嘆と自分は無縁でないと。20世紀フランスの作家の自伝的小説『人間の土地』(堀口大樹訳)から。

2020・4・3

折々のことば

鷲田 清一 1777

何も分らないから
母に何もしないで良いとは思わない

藤川幸之助

認知症を患う母親の介護を父から引き継いで24年。教師生活との両立に困憊し、苛立ちと愛しみ、暴発といったわりに切り裂かれる日々。不思議そうに見つめられたり、拒むように噛まれたり。でも、食事が無理になっても、お正月には母の前に箸とお雑煮を並べた。あなたにでももらったように私もしようと。詩『母の眼差し』(『支える側』が支えられ 生かされていく)所収)から。

2020・4・4

折々のことば

鷲田 清一 1778

わたしはいま負けたくないのではなくて、負けるだけの力がないのだと思う。

小野和子

50年にわたり東北の民話を採訪してきた小野には、現地にすけすけ言い合える友人がいる。ある日彼女が大根を干しといてやると言うので、でもお金は払わせてねと返すと、そんな水くさい奴には「やんねえ」と拒まれた。でも、「土着」でない場所でも語り手に見合う自分を作りださないかぎり聴くこともできないと、覚悟を決めた。『あいたくて ききたくて 旅にでる』から。

2020・4・5

折々のことば

鷲田 清一 1779

いつもと変わらない1日は
特別な1日

水橋文美江(脚本)

NHK連続テレビ小説「スカーレット」(3月27日放送)から。主人公・喜美子の息子・武志は陶芸家をめざしているが、ある日白血病の診断に余命を知る。もがきながらも作陶に打ち込むなか、あたりまえの1日も周囲の人たちの厚い思いやりによって支えられた一つの達成だと感じ、思いをこう記す。そして最終回、「幸せやで」と母親にそっと告げた。人生の毎日と同じ。

2020・4・6

折々のことば

鷲田 清一 1780

むやみに喜びはしやぐかと思ふと、ごくつまらぬ事柄のためにむしやうに悲しがる。……彼等は既に大人なのである。

ラ・ブリュイエール

子供のことを言っているが、じつは大人への強烈な皮肉である。冷静に考えれば大したことではないのに、それに一喜一憂する人たち。自分の評判? 他人との優劣? 株式の値動き? そこから生まれたのはしやぎや悲しみはきつと同じようにろくに根拠もないことで鎮まる。17世紀フランスの作家の『カラクテル』(関根秀雄訳)から。

2020・4・7

折々のことば

1781

～1785

ぼくらは 下手でも まずい字でも
じぶんの言葉で 困ります やめて
下さい とはっきり書く 七円のハガ
キに 何通でも書く

花森安治

折々のことば

鷲田 清一 1781

学校というものの中では、教師に学ぶよりは、友人に学ぶことの方が多くは、その友人が同学年に限定されるなんてつまらない

友だちといえは同級生、会社なら同期生。つまり同い年。そしてほとんどが同性。あとはみな上下関係。なんと窮屈で退屈な社会に生きているのだらうと、数学者は言う。うんと年の違う、できれば異性と、友人になれたら、世界は一挙に広がるのに、もったいないこと。これ、けっこう由々しき問題である。『ものぐさの数学のすすめ』から。

2020・4・8

森毅

折々のことば

鷲田 清一 1782

無名の運命のなかで、自分の筋を貫き通して、歴史にものこらないで死んでいった者の生き方に、ぼくは加担したいんだよ。

「尊敬する人」といえばなぜみなすぐに権勢を誇った人を挙げるのだらうと、芸術家は言う。成功者といっても、彼を取り巻く「いろいろな状況が押しあげた」だけ。歴史には、成功しないと知りつつ「命を賭けて筋を通した」無名の人々が埋もれているはずで、そこをしっかりと見よう。『太郎に訊け！ 岡本太郎流爆発人生相談』から。

2020・4・9

岡本太郎

折々のことば

鷲田 清一 1783

人間の持つ多様な知的能力をすべて同時に開発することはできません。……この部分を用いるかは文化によって異なります。

クロード・レヴィ・ストロース

知覚や認識の能力のうち、人が使えるのはそのごく一部だが、人はそこを工夫してきたと文化人類学者は言う。実際、人はその部分（たとえば視覚や聴覚）を失っても、別の感覚を磨いて、ときに従来以上に精緻な仕方で世界を把握する。人間はそれほどに融通がきく存在。大いなる希望がそこにある。『神話と意味』（大橋保夫訳）から。

2020・4・10

折々のことば

鷲田 清一 1784

もっとシンプルな人としての基準というものを、ペラペラ口に出すことなどせずに、腹にちゃんと持っていたのではないだろうか。

幼少期、絵本作家の家に近く近所の男がラジオの浪曲番組を聴きに来た。頭を垂れて聴き入るその姿が不思議だったが、長じて二代目広沢虎造の清水次郎長伝をCDで聴き、その「こすって光らせた」低音にほれ込む。そして人としての筋目を、誰もが「上ずる」ことなく心の内で反芻した昔を羨む。随筆集『神も仏もありませぬ』から。

2020・4・11

佐野洋子

折々のことば

鷲田 清一 1785

ぼくらは 下手でも まずい字でも じぶんの言葉で 困まります やめて下さい とはっきり書く 七円のハガキに 何通でも書く

貴様らのかわりはいくらでもいると、戦地で上官に言われた。「虫けら同然」に。終戦直後は、主は自分たち、役所も大臣も「ぼくらの家来だ」と誰もが言えた。でも、みなすぐに従順へと後戻り。が、今度こそ後へひいてはいけなさと、編集者は呼びかける。雑誌「暮しの手帖」での宣言「見よ ぼくら一兆五厘の旗（1970年）から」。

2020・4・12

花森安治

折々のことば

1786

～1790

理屈をつけたものは、みんな滅んだり衰えたりする。理屈がないことが何よりだ。

森繁久弥

折々のことば

鷲田 清一 1786

権利のうちもつとも基本的なもの、それは安全で保護されているという感覚が持てることである。

ブルノ・ラトウール

不意の攻撃に怯えることも、自分はここにいていいのかと案じることもなく、安らいでここにいられること。遊牧民にテントが、難民に保護施設が要するように、人には「被覆」がどうしても要る。が、同時に頑な同一性や国境への誘惑からは遠ざからないといけないと、哲学・人類学者は言う。『地球に降り立つ』（川村久美子訳）から。

2020・4・14

折々のことば

鷲田 清一 1787

理屈をつけたものは、みんな滅んだり衰えたりする。理屈がないことが何よりだ。

森繁久弥

近所にある鎮守の森だつて、縁日に神輿を担ぎ回る人たちは、神がそこに居ます故由など知らないし、知ろうともしない。俳優は「理屈」のその向こうに人びとの生業と暮らしを貫くものを見る。右か左かの位置にこだわらず、かつ二枚舌でもなくて、二枚腰、二枚蹴りでしたたかに生きよと勧めたこの人らしい言葉だ。随想集『情一世相』（森繁久弥コレクション・3）から。

2020・4・15

折々のことば

鷲田 清一 1788

本来、雑談はそれ自体が目的です。つまり、人間にとって欠かせない贅沢の象徴たりうるかもしれません。

ノーマ・フィールド

親しくない人や立場の違う人ともお喋りをを楽しむことが、とても難しくなっていると米国の日本文学研究者は憂う。「あるひとを四六時中働かせ、あるひとには全く働く機会を与えない」社会では、信頼関係を築く余裕すら持てないからと。座談会「二世紀の多喜二さんへ」（小森陽一・成田龍一編著『井上ひさし』を読む）所収）から。

2020・4・16

折々のことば

鷲田 清一 1789

どれほど書き続けてもまた余白がある、そんな紙のような心を持ちたいものだと思う。

ドナルド・キーン

自分の心は「一枚の紙」のようだと、日本文学研究者は言う。90歳を前にしてこの紙にはずいぶん書き込みがあるが、それでもまだまだ知りたいことがあると。知らないものに惹かれる。わからないものをわからないままにできるかきり正確に迎え入れたい。そのような思いが、この人が漂わせた、こよなく折り目正しく寛い気配の源にあったのか。随想集『黄犬交遊抄』から。

2020・4・17

折々のことば

鷲田 清一 1790

英語で「セルフ・レスポンスビリティ」という言い方は普通しません。「レスポンスビリティ」だけで十分だからです。

刈谷剛彦

「責任などと言う必要はない。責任とは相手に応答できること。何かを委ねられているとの自覚をもって処すること。それは人への「信頼」があつてはじめて可能だと、教育学者は言う。お前の責任だと突き放すのも、責任の所在を不明にして共有するのも、責任逃れでしかない。吉見俊哉との対談『大学はもう死んでいる？』から。

2020・4・18

折々のことば

1791

～1795

強制的にさせられる努力は、もろいのです。

横尾忠則

折々のことば

鷲田 清一 1791

目的に対する手段を提供することで役に立つの、そもそもの目的、価値を創造するということに役に立つのと、二つあるわけです。

吉見俊哉

役に立つか立たないかで学問の価値を測る風潮がある。やれデータだのエビデンスだのと。けれども、データサイエンスで予測できるのは、現在の延長線上にある未来でしかない。社会学者は言う。大事なものは「非連続的な社会の変化」に創造的に対応できる知性であり想像力だと。刈谷剛彦との対談『大学はもう死んでいる？』から。

2020・4・19

折々のことば

鷲田 清一 1792

一期一会

大橋洋平

緩和ケア医は、がんを患ってから、一期一会ではなく「次また会える」という出会いを願うようになったという。それが二期一会。独語の「アウフ・ヴィーダーゼーエ」や中国語の「再見」なども再会を期す別の挨拶。日本語の「さようなら」はその点、これが最後かもという哀感や、「会うは別れの始め」との諦念が漂い、やるせない。NHK「ラジオ深夜便」4月号から。

2020・4・20

折々のことば

鷲田 清一 1793

神という字は「ネコ十一」

江坂遊

「神」という字は、「ネコ」と長めのブラス記号と「十一」に分解できる。猫は「神に近い存在」らしいと、猫をめぐる短編選『猫の扉』を編んだ作家は言う。その理屈はいえ「犬」は、「人」とマイナス記号と「一」からなる。では人からどんな「一」を外すと犬になるのか。読点だから一息つくこと？逆に一点集中？でもどちらも犬のほうが得意そう。人は格別な存在ではないらしい。

2020・4・21

折々のことば

鷲田 清一 1794

空洞は空洞としてスカスカでいいのです。

横尾忠則

「タダノリ君、どうぞ猫のように生きてください」と、先に逝った猫が美術家に語りかける。「君」の心を煩わす老いや死も、いえいえ私への愛だって、いうなれば「妄想」。妄想とは穴を怖れ、埋めてゆくこと。「君」は芸術でそれをしようとしている。穴を埋めるのでなく、「あっ、そう」くらいに空洞を空洞として無心に生きなさいと。愛猫の画文集『タマ、帰っておいで』から。

2020・4・22

折々のことば

鷲田 清一 1795

強制的にさせられる努力は、もろいのです。

横尾忠則

学校で、あるいは正解にいかにも速く到達するかばかり考えていると、「答えがない状態」に直面した時、どうしたらいいかわからなくなると美術家は言う。義務としてなす努力は潰えるのも早い。努力は遊びとして楽しむところがないと、いざという時生きてこない。結果を考えず「向こう見ずにやってしまうと、他人も力を貸してくれるもの」だとも『死なないつもり』から。

2020・4・23

折々のことば 1796 ～1800

やる やらない 自分で決める
今日はやるわ

いがらしみきお

折々のことば

鷲田 清一 1796

ありがたうよりも、つい、すみませんばかり
言ってしまう、小さな失敗でも周りに迷惑な
んじゃないか……と気になってしまふ。

柴崎友香

作家は米国の売店で、誤って英国紙幣で
支払ってしまい、焦る。が、後ろの女性は
「あら、イギリスに旅行してきたの？」と
声をかけ、レジの人も「きれいなデザイン
ね」と微笑んだ。些細なことだが、どんな
時もこんなやりとりができたら世界はもう
少し居心地がよくなる？ 随想「季節の地
図」（本紙大阪本社版4月8日夕刊）から。

2020・4・24

折々のことば

鷲田 清一 1797

やる やらない 自分で決める
今日はやるわ

いがらしみきお

やらなきゃいけない仕事とわかってい
けどやりたくない時、どうしたらいいのと、
25歳の女性から相談を受けたアライグマく
ん。「やらなきゃええじゃん」とさりと
言う。芋の片づけだって、やるかやらない
か「これから自分で決めるんだよ」と。中
身はどうあれ、仕事をまずは自分事として
取り戻すこと。漫画「ぼのぼの人生相談」
（まんがライフオリジナル）4月号）から。

2020・4・25

折々のことば

鷲田 清一 1798

ヒトは自分の見たいものしか見（え）ない

下條信輔

原発の「安全神話」からさまざまな依存
症まで、あるいは流行から賭博や株式相場
まで、人の判断には自分でも気づかない枠
組みがあり、フィルターがかかっていること、
認知心理学者は言う。まなざしに期待のバ
イアスがかかり、他人の動きにもつい惑わ
される。厄介なのは、辻褄を合わせようと
してますます自身の判断に固執し、引き返
せなくなること。『潜在認知の次元』から。

2020・4・26

折々のことば

鷲田 清一 1799

〈陶磁器類 ガラス類 リサイクル先 徳島
市で路盤材に〉

徳島県上勝町のごみ収集所

ごみゼロを宣言するこの町は、ごみを45
種類に分別。収集箱にこう記して、どのよ
うに再利用されるかを住民に伝える。まる
で寄付しているみたい。キロあたりの経費
も表示。発泡スチロール製の食品トレーは
洗えば0・49円だが、汚れていれば分別先
が変わり42円かかるという。納得できる情
報があれば人は動く。本紙2019年11月
16日朝刊beの記事「ごみゼロに挑む」から。

2020・4・27

折々のことば

鷲田 清一 1800

自分が五十になって思うのは、「こんな未熟
モノで申し訳ない」ということである。

小林聡美

齢七十になった私も、そのとおりとし
か言いようがありません。ただ老年にかぎら
ず、人生のどの段階も年齢と心持ちはちぐ
はく。若い時も極端に背伸びしたり萎縮し
たり。でもこのずれをバネに人は頑張り、
また反省してやりなおしてきました。現在
に甘んじないこと。これこそ文明の資源だ
と自分を慰めましょう。加齢を自覚する日
々を綴る女優の随想「聡乃学習」から。

2020・4・28

折々のことば

1801

～1805

記憶を持たない民族には未来もない。

陸秋槎(りくしゅうさ)

折々のことば

鷺田 清一 1801

記憶を持たない民族には未来もない。

陸秋槎

中国には「集中力量辦大事」(力を集中させ、大事を成す)という言葉がある。社会主義の優越性を謳う神話だと中国の作家は言う。「全国一盤棋」(国は一つの盤面)という語と相まって、「どこかで捨て駒は出るもの」という気風につながる。この危うさを人々が心に刻むその「手助け」をする責務が物書きにはあると。新型コロナウイルス禍に関する寄稿(稲村文吾訳、「文藝」夏季号)から。

2020・4・29

折々のことば

鷺田 清一 1802

そんなふうには生きないで。私たちに過ちがあるとなれば、初めから欠陥だらけで生まれてきたことだけなのに。

ハン・ガン

「一寸先も見えないように設計されて生まれてきたことだけなのに」と続く。韓国の作家の小説「明くるなる前に」(斎藤真理子訳)から。弟の急死は自分に咎があると思いつめる友人は、その後、外国を頻りに放浪する人となった。「もう夜も遅いのに家に帰れない」夢をよく見ると言っていた。「私」はこう訴えたくも、ついに口にできなかった。

2020・4・30

折々のことば

鷺田 清一 1803

no one will be left behind.

国連が謳う理念

「誰ひとり取り残さない」とも「誰も置き去りにしない」とも訳される。2015年、国連で全会一致で採択されたSDGs(持続可能な開発目標)の文書「持続可能な開発のための2030アジェンダ」は、その理念をこう記す。コロナ禍による医療崩壊や経済活動の休止による生活危機の中で、普遍的人権、なかでも苦難を強いられる人びとの権利を断固守るといふこの言葉が厳しい試練に晒されている。

2020・5・1

折々のことば

鷺田 清一 1804

個が強烈に個でいられる。マイノリティに約束された境地です。

加藤淳

かつてベルリンに長く住んだ翻訳家は、「よそ者」としての怯えを幾度も体験したが、マイノリティとしての自由を味わう術も学んだ。「マジョリティがみなで頭をかかえている問題でも、オレには関係ない、オレはオレの問題で手いっぱいなんだ」と思えるようになった。差別されない側に回ろうという焦りが知らぬまに自分の首を絞めていたと言う。「世紀末ベルリン滞在記」から。

2020・5・2

折々のことば

鷺田 清一 1805

自分は普通の人間である。普通の人間の普通の人生はそもそも楽しくないものである。

町田康

「大酒飲み」の作家は4年前、酒を断った。そしてなぜ「飲むのをやめよう」と思っってしまったのか、探究を始めた。やっと得た洞見は、「楽しく生きなければ負け」という強迫から下りること。自分を「ずっぽりと普通」と考え、それも低めに設定すること。だが、「しかし」「しかし」と後から後から湧きだす小理屈、屁理屈。飲まずとも存分酔える。「しらふで生きる」から。

2020・5・3

折々のことば 1806 ～1810

子供たちには過去も未来もない。で、これは我々には殆どないことだが、現在を享樂する。

ラ・ブリュイエール

折々のことば

鷲田 清一 1806

芝居はめつばう好きでも金銭的には恵まれない生活者にとって「晶頂」は高嶺の花だ。

山川静夫

「そこで安い大衆席の大向うに陣取って大声で役者の屋号を叫び『あんたはすばらしいよ』とほめる」と、元アナウンサーのエッセイストは続ける。「晶頂」は奨励金や褒美で応援するが、それがかなわぬ客は、舞台上に一番遠い席から、歌舞伎役者に感嘆と激励の声を掛ける。コロナ禍の今なら、奮闘する医療従事者にビルの窓から感謝の拍手を送るように。『大向うの人々』から。

2020・5・4

折々のことば

鷲田 清一 1807

子供たちには過去も未来もない。で、これは我々には殆どないことだが、現在を享樂する。

ラ・ブリュイエール

成人は、未来に夢を描き、備えもするが、過去の行為を悔いたり、幸福だった昔を懐かしんだりもする。意識はいつも「まだないもの」「もうないもの」に向かう。子供は「現在」、つまり今ここに在るものしか眼中にない。とすれば、それがなくなるかもしれないという喪失の不安こそ、子供が子供でなくなる最初の一步なのか。17世紀の作家の『カラクテル』（関根秀雄訳）から。

2020・5・5

折々のことば

鷲田 清一 1808

「だから、耳に集中するときには目を殺すんだよ」と教えます。

十代目・坂東三津五郎

鐘の音を聴く場面で「首を傾けて、手を耳にあてるだけ」では表現はまだ曖昧だと歌舞伎役者は言う。その時、目は「死んでいる」はず。妙なしなをつくるより、普段していることをきちんと見よ。逆に例えは長電話にげんやりしている人は電話機の横にあるメモ用紙にあらぬ絵柄を描いたりしている。それもかなり強い筆圧で。『坂東三津五郎 踊りの愉しみ』（長谷部浩編）から。

2020・5・6

折々のことば

鷲田 清一 1809

壁の向こうの庭で何か面白いことが起きていて、一人が登って下の子どもたちに向かっている。壁の向こうで何が起きているかを報告する

柴田元幸

翻訳って作業、こんなイメージでやってきたと翻訳家は言う。こういう暮らしや楽しみもあるんだと、下にいる子が喜んでくれればと。希望は、叶うか、潰えるかだけではない。編みなおし、攷みなおしもできる。壁の向こうに行けずとも、壁越しでもそれに触れたいから本が要る。高橋源一郎との共著『小説の読み方、書き方、訳し方』から。

2020・5・8

折々のことば

鷲田 清一 1810

ただの慰めの言葉より、お経がいいときもある。

奥本大三郎

仏文学者・作家は、小学生の頃、病で長く臥せていた。何度も激痛にのけぞった。そんな時、「代わってあげられたらいいのにねえ」とありえないことを人に言われるより、身近な人が傍で唱えてくれる般若心経のほうが痛みが和らぐ気がしたという。この瞬間を誰かでもなだらかにしたかった、この時間を誰かに一緒に潜ってほしい。自伝エッセー『蝶の咬み』から。

2020・5・9

折々のことば

1811

～1815

発症者二桁に減り良いほうの
ニュースにカウントされる人たち

俵万智

折々のことば

鷲田 清一 1811

嫌なことを我慢することはない、今まで通りでよいのだ。第一、お前には、嫌なことなんてできないし、続かないではないか。

奥本大三郎

こよなく虫を愛する仏文学者・作家は学生の頃、信州で、燃えるように赤い翅をしたクジャクチョウを見て、こう諭されたように思った。だったら「人間の悪意を想定した」法律書なんかより、「美しい文章」を読もうと。生き延びるために隙間をこじ開けるにしろ、退路を設けるにせよ、基本は「つもこい」。自伝エッセー『蝶の唆え』から。

2020・5・10

折々のことば

鷲田 清一 1812

「身の回り」という感覚がなくなって、共有物が増えるんじゃないか。

伊藤亜紗

美学者は、視覚がないと世界はどんなふうになるかを考えるワークショップを開いた。そこで得た洞察の一つが、「身の回りのもの」という概念が消えること。持ち物は、席を離れ戻ってきた時、探るのが面倒だ。これ、あの人の物だけど私も時々使う、という感じでいいんじゃないと。NHK・Eテレ「SWITCHインタビュー達人達」(4月25日)での瀬家・柳家喬太郎との対談から。

2020・5・11

折々のことば

鷲田 清一 1813

私はアートとのつながり方を民主化したいのです。

オラファー・エリアソン

制作者と鑑賞者という関係を離れて、お年寄りから子どもまでそれぞれに楽しみ、また何が大事なのかをいっしょに考える。アートは人びとが行き交うプラットフォームのような場だと、デンマーク出身の美術家は語る。文学もそう。物理的に離れていても本さえあれば、人は何百年も前に生きた異国の人も一対一で向きあえる。NHK・Eテレ「日曜美術館」(4月26日)から。

2020・5・12

折々のことば

鷲田 清一 1814

喜怒哀楽のうち、怒りと哀しみは積もるものであり、喜びと楽しさは積もらない。

有富健

「だからいつも喜びと楽しさを発生させる努力は必要である」と、血管奇形という難病を患う有富は言う。激痛、余病に苦しむつつも、難病指定と患者の相互支援のために活動してきた。苦悶や焦りはつい表に出る。が、それだと周りは退く。作り笑いであっても、笑顔でいれば人は集まってくる。「形から入る」のがまずい大事と。『負けるものか!』(真里鈴構成・編集)から。

2020・5・13

折々のことば

鷲田 清一 1815

発症者二桁に減り良いほうのニュースにカウントされる人たち

俵万智

生存ということがむきだしになる時、人にとって日々の糧は、あるか、ないかである。死も同じように、本人どころか家族にとっても、あるか、ないかである。誰かの死は一つの死として、別の誰かの死と比較も計量も交換もできない。が、人は知らぬまにそういう生の地表を立ち去り、死を上空から数える側に回っている。「280歌人新作作品集」(「短歌研究」5月号)から。

2020・5・14

折々のことば

1816

～1820

世の中ハまめて四角て和らcate と
ふふのやうにあきられもせす

松平不昧の「豆腐自画賛」より

折々のことば

鷲田 清一 1816

「自分は絶対に他人にうつさないぞ」と考えるだけで、周りの化け物は人の顔を取り戻すものである。

吉村 萬世

コロナ禍のさなか、「自分だけは絶対にうつるもんか」と意識を尖らせているところ、周りは化け物だらけに見えてくると、作家は言う。誰かの接近に身構えたり、周りの敵意に怯えたり。が、日々そういう恐怖に晒される人はコロナ禍以前から社会にあった。その立場に身を置けば考え方も変わると。本紙東京本社版4月22日夕刊への寄稿から。

2020・5・15

折々のことば

鷲田 清一 1817

わたしたちがすることは、それがどんなに小さいなことであっても、すべてがある意味では発明なのです。

エリーズ・ポールディング

アインシュタインが相対性理論を着想したのも、少年期に登校拒否したのも、塞いだ状況を切り抜ける工夫という意味ではいずれも「発明」だったと、米国の社会学者は言う。そのためには、状況を違う視角で観察できる場所、じっと身を寄せていられるくぼみ、つまりは「孤独」が必要だったと。『子どもが孤独でいる時間』(松岡享子訳)から。

2020・5・16

折々のことば

鷲田 清一 1818

世の中ハまめて四角て和らcate とふふのやうにあきられもせす

松平不昧の「豆腐自画賛」より

茶人、そして茶道具収集家としても知られる松江藩主は、この墨書で、豆腐の絵の傍らにこう書き添えた。世間は、豆腐のやうに、均しくすり潰されてもいれば角張つてもおり、窮屈かとおもえば妙に融通もきく、何とも不思議なもの。だからこそ飽きない、捨てがたいという、飄々とした思いが滲む。没後200年記念展の図録『大名茶人 松平不昧』(2018年刊)から。

2020・5・17

折々のことば

鷲田 清一 1819

十字路の中心に立ち、なにを加えれば軸がどこへ動くか、なにを引けばいいのか、あれこれ考えてみましょう。

城戸 崎愛

料理家は若い頃、子宮がんを患い入院した。食パンにバター、生卵に牛乳という定番の朝食に飽き、配膳室の片隅を借りてフレンチトーストを作った。匂いにつられ病棟は「教えて」の合唱。料理は古今東西の知恵が行き交う「味の十字路」。この一皿が「料理家への道しるべ」になったという。『91歳、現役料理家の命のレシピ』から。

2020・5・18

折々のことば

鷲田 清一 1820

名と実体との絶え間のない追っかけ(ごっこ)が「生きている」ということではあるまいか

井上 ひさし

恋、メロデー、聖書の一節。名だけ知るものもあれば、実体はあるも名がないものもある。が、それが一つになる瞬間がある。孤児院時代、作家の目の前で、狂乱した米兵が施設の子らに銃を向けた。彼らの「父親」であるカナダ人修道士がすすす前に立ちはだかった。名だけだった「キリストの愛」に実体が与えられた瞬間だったという。『死の前での平等』(「社会とことば」所収)から。

2020・5・19

折々のことば

1821

～1825

今からもう、よく考えておくべきだ。
いったい何に元どおりになってほしくないのかを。

パオロ・ジョルダーノ

折々のことば

鷲田 清一 1821

どうしても越えられない壁があって、いくつかのことが今でもできない。

照井翠

その日、美容室に予約を入れていた。が、店は津波に壊され、スタッフも安否不明。携帯電話が使えるようになって着信したのが、「本日はご来店ありがとうございます」との自動配信のメール。心が凍りついた。悔しかった。以後髪は自分で切ると決めた。この高校教師・俳人には、壁は越えられない以上に越えたくないものだった。随想集『釜石の風』（2019年刊）から。

2020・5・20

折々のことば

鷲田 清一 1822

むしろ下手くそなのに伝わったら、そのほうがインパクトをもつこともある。

遠藤まめた

ギター演奏でも政治活動でも、超絶技巧や組織力がものを言うとはかきらない。「できないことやショボいことのおかげで、前に進んだことがたくさんある」と、トランスジェンダーとして社会運動に関わる遠藤は言う。それも一つの才能だと。たしかに周囲の人が自分にもできると思ったり、はらはらしてか、ずっと手を差し出してくれたり。『オレは絶対にワタシじゃない』から。

2020・5・21

折々のことば

鷲田 清一 1823

私たちは、上手な引き算ができていないのだと思つてです。

小山田徹

アートの世界に「コミュニケーションの可能性」みたいな「ポジティブワード」が並ぶのを、美術家は訝しむ。それよりも、わからない、かなわないといった「不可能性」を体験することのほうがずっと大事だと。多様性とはそういうこと。それに打ちのめされつつ、それを楽しむ。そういう「嬉しい敗北」から出発してこそ人は前に進める。『TURN JOURNAL』春号から。

2020・5・22

折々のことば

鷲田 清一 1824

今からもう、よく考えておくべきだ。いったい何に元どおりになってほしくないのかを。

パオロ・ジョルダーノ

感染者の数、発生地からの距離、マスクの販売枚数、株価暴落で失う金額、検査結果が出るまでの日数と、数えてばかり。恐怖にも浸され頭がいっぱいだけど、それでも「今までとは違った思考をするため空間」を確保しておこうと、イタリアの作家は言う。コロナは今「僕らの文明をレントゲンにかけている」のだからと。『コロナの時代の僕ら』（飯田亮介訳）から。

2020・5・23

折々のことば

鷲田 清一 1825

顔を寄せ合い対話すること。手を重ね合わせる。それがどれほど貴重で脆いものであるかを、私たちはついに知ってしまった。

月永理絵

精神科診療所では患者の、家では認知症を患う妻の声に根気よく耳を傾ける、引退間近の老医師を撮った想田和弘監督の映画「精神0」に寄せ、映画ライターはこう記す。人の尊さや信頼も、生きることの喜びも、見つめ、聴き、手を当てる、そんな行為の積み重ねの中でのしか生まれない。本紙5月1日夕刊の「プレミアシート」から。

2020・5・24

折々のことば

1826

～1830

人間学がしてならないことは人間を中心におくこと、このことである。

ヴィクトール・E・フランクフル

折々のことば

鷲田 清一 1826

私は何を希望することが許されているか

イマニュエル・カント

18世紀ドイツの哲学者は、人の理性が関心をもつ問いは三つに約められるとして、「私は何を知ることができるか」「私は何をなすべきか」に続け、この問いを掲げた。コロナ禍のさなか、本当に突きつけられているのはこの第三の問いかもしれない。自然への人類のこれまでの傲慢な接し方、これは戦争だ」といきり立つ姿を顧みれば、『純粹理性批判』（Ⅱ第二章第二節）から。

2020・5・25

折々のことば

鷲田 清一 1827

人間学がしてならないことは人間を中心におくこと、このことである。

ヴィクトール・E・フランクフル

人間の存在は自立も自足もしていない。人間は「ホモ・パティエンス」（苦しむヒト）、つねに外部の影響に晒されてあるものだと、オーストリアの精神科医は言う。だから人間とは何かと問うとき、自分の側から見たら自分を尺度にしたりしてはいけない。「人間がすべてとなったときこそ、ヒューマニズム（人間主義）は危機に瀕する」と、『苦悩の存在論』（真行寺功訳）から。

2020・5・26

折々のことば

鷲田 清一 1828

失うという事を 知らない人がいる
得るという事を 知らない人がいる
何だか最近 は そんな可哀そうな人ばかり

ブッシュ孝子

持つ人と持たない人に裂かれた社会。けれども、失ってはじめてそれがいかに希有のものだったかを知ることがある。たとえば幸福、あるいは平穏な日常？ 得てはじめて知ることもある。恵まれてあることの意味、これまでそんなものがあると思いがしなかった世界？ 『ブッシュ孝子全詩集 暗やみの中で一人枕をぬらす夜は』から。

2020・5・27

折々のことば

鷲田 清一 1829

大きな動きをつくり出すと、何かカムイが、「まだ早いよ」って言うのです。

宇梶静江

でも「これだけは止めないで、カムイ」と訴えたいほど気持ちちはやると、詩人・古布絵作家は言う。大地、火、水、風。生きとし生けるものを養うもの。それらをアイヌの人々は神と呼び、他の生き物たちと奪いあうのではなく分かちあうものと固く思ってきた。その文化が潰えかけている。だから今はアイヌを「語る」よりも「起こしたい」のだと。自伝『大地よ！』から。

2020・5・28

折々のことば

鷲田 清一 1830

批評されたり評価されたり点数をつけられたり合格不合格に分けられたり、そういうことは一切無縁の場で生きていたい

木内みどり

幼い頃、絵を描いたら「それ、りんごのつもりか」と言われて傷つき、それから描けなくなった。老いて或る日、「毎日、描いてよ。毎日、笑いたいから」という娘の挑発にのり、女優は一年、毎日描き続けた。何が変わったかといえば、この目でまっすぐ見つめるようになったと。画文集『私にも絵が描けた！』コーチは「Witten」から。

2020・5・29

折々のことば

1831

～1835

どんな とき でも まいにち こつ
こつ やること たいせつ です

ブルガリア出身の鳴戸親方

折々のことば

鷲田 清一 1831

文章を書くといふことは文脈を作るといふことになるのです

柳田邦男

大切な人を失ったり、致死の病に罹ったりとすると、人は衝撃を受けてひどい混乱状態に陥る。が、その体験について語り、書くことで、散らかった思いを僅かなりとも整理できる。それは自分がかくあることを納得したいといふこと、そういう形で「生きなおす力」を得ることであると、ノンフィクション作家は言う。講演「物語としての人生」(Living Will 第17号)から。

2020・5・30

折々のことば

鷲田 清一 1832

「三つ葉は生でも食べられる。三つ葉は生でも……」と、おまじないのように唱えながら、塩を入れた熱湯で茹でます。

辰巳芳子

ほうれん草、小松菜、菜の花などのおひたしを美味しくつくる要領は「茹で過ぎない」の一点につきると、料理家は教える。茹で過ぎると「噛んでパツと口中に広がるべき菜の香気」や「歯触り」が損なわれるからと。料理は自然の恵を処理することではなく、よく様子を診ること。「最も理に適った方法で扱う」こと。『お肴春秋』から。

2020・5・31

折々のことば

鷲田 清一 1833

日本人が関心を持つ台湾は、常に日本と関係のある台湾といふことなのでしょうね

台湾の一大大学教授

記者や特派員を経て、長く中国語で執筆してきたコラムニスト・新井一二三は、ある時、滞日中の台湾の教授からこう言われた。新井はその言葉に少なからず動揺した。日本による統治が終わった後の戒厳令の時代から現在まで、台湾の多層的な社会とその心情を丹念に綴った。認識で重要なのは視野を広げること以上に、そこから抜け落ちるものに気づくこと。『台湾物語』から。

2020・6・1

折々のことば

鷲田 清一 1834

違つてこそを感心するってことがなきゃ、人生なんてつまらないんじゃないですか。

羽仁進

1955年にドキュメンタリー映画「教室の子供たち」を撮った映画監督は、製作時をふり返りこう語る。子供だけでなくたとえばリスがそう。リスは樹をどんどん登る。それは「僕」にはとてもできないこと。素敵です、と。そして仲間に入れない子や「教えない子」にじっと目を注いだ。NHK・EテレのETV特集「映画監督 羽仁進の世界」(5月9日放送)から。

2020・6・2

折々のことば

鷲田 清一 1835

どんな とき でも まいにち こつこつ
やること たいせつ です

ブルガリア出身の鳴戸親方

元大関琴歐洲の「鳴戸勝紀のブログ」(5月8日)から。夏場所が中止になっても稽古の毎日。コロナ禍の渦中はさすがに「ぶつかり」はできなかったが、でも「いま」できること、しっかり やります(4月1日)。「あきない ように やること」も たいせつ です(4月5日)と。ひらがなの短い文で日々大事なことを綴る。もちろん日々の糧、「ちゃんい」の話題は頻繁に。

2020・6・3

折々のことば

1836

～1840

生き物として生きる以上、中と外をきっちり分けることなんてできないの。

中村桂子

折々のことば

鷲田 清一 1836

平生よりよく心を用ひ、政府の処置を見て不安心と思ふことあらば、深切にこれを告げ、遠慮なく穏やかに論すべきなり。

福沢諭吉

近代国民が欠いてはならぬ心構えはこれだと、明治の思想家は説く。「政府の事は役人の私事にあらず、国民の名代となりて、一国を支配する公の事務といふ義なり」。そこに「私曲」などあつてはならないと。主はど「こ」までも「人民」。「遠慮なく穏やかに」という表現にその自持の志が漲る。『学問のすゝめ』（伊藤正雄校注）から。

2020・6・4

折々のことば

鷲田 清一 1837

たった今もわたしは、「正しさ」に溺れることなく、自分が言葉にするべきことを言葉にする、その責任の果たし方を模索している

温又柔

飲食店で、作家は隣の席から漏れてくる差別的な会話にたまりかね、抗議の言葉を連ねた。が、窘めるにもひどく氣遣つてしまふ自分が悲しかった。息巻く自分に、異論を挟ませない「頑なさが見えな」るのも怖かった。正しいことを口にしつつも心は引き攣った。随想「やわらかな棘」と「正しさ」の震え」（『対抗言論』1号）から。

2020・6・5

折々のことば

鷲田 清一 1838

これは絵日記でいいんだ。

原田泰治

画家は、各地の風景を絵と文で伝える新聞連載で、文意を正確にしようと取材や資料集めに努めた。ある日もらった年配女性からの手紙に、視力が衰えてきたがこの頃は新聞を触ると風景の感触がわかるとあった。妙な身構えがとれた。不特定多数の人にはなく、誰かに「こつ」旅をして来まして」と日記のように届けばいいんだと。作品集『鳥の目、虫の目 日本の旅』から。

2020・6・6

折々のことば

鷲田 清一 1839

生き物として生きる以上、中と外をきっちり分けることなんてできないの。

中村桂子

呼吸、飲食、排泄、悪寒、そして聴く、嗅ぐ。たしかに物が入りしりたり、互いに共振したり。人はあくまで自然の一部。環境の内、他の生命とのつながりの内にあることを忘れてはならないと、生物学者は言う。そして「地球に優しくしましょう」。それって上から目線よね」とやんわり諷める。インタビュ「生きることは、時間を紡ぐこと」（『暮しの手帖』第6号）から。

2020・6・7

折々のことば

鷲田 清一 1840

Expect the unexpected.

英語の言い回し

防災グッズのパッケージなどでよく見かける言葉。こうやれば予想外の結果を得られるかもしれないという意味でも使うが、ここでは「想定外の事態を想定せよ」という意味。未知のものに既知の枠組みで対処すると、事態を歪めその本質を捉えそこなう。事態に正確に対処するには、予測不能なものを容れる糊代をふだんから作っておく必要がある。いつでも構えをほどき、組み替える柔軟さが要る。

2020・6・8

折々のことば

1841

～1845

親になるとは、許されることを学ぶことなのだ。

三砂ちづる

折々のことば

鷲田 清一 1841

生は言わば、起源も終末も解き明かすことのできないまま、この「まだ」と「もう」の間に……漂い続ける運命なのかも知れません。

沼野充義

「まるで亡命者のように」とロシア文学者は続ける。人生で大事なものは、どこから来たかでもどこへ向かうかでもなく、「どこどここの間にいるか」だと。私たち「日本人」も、偶々ここに生まれ落ちた、あるいはやって来た過客だと考えれば、その自己像も随分ちがってくるだろう。沼野編『芸術は何を超えていくのか?』の序文から。

2020・6・9

折々のことば

鷲田 清一 1842

与えられたものを選ぶという行為を重視するよりも、選べる対象の幅を広げることが重要である。

佐藤仁

「環境保護」といった誰も反対できない政策で国家が地域に介入する時、強制移住や補助金依存などの形で、従来そこにあった自然との関係が壊されることが多いと公共政策学者は言う。社会政策では国家が示す限られた解決策から選ぶより、そもそも問題が起きない方策をみなで幅広く考えるほうが重要だと。『反転する環境国家』から。

2020・6・10

折々のことば

鷲田 清一 1843

二つのレコードプレイヤーのターンテーブルを手で回し、反復して繰り返すダンス音楽。ブレイクビーツという手法は、本来は再生専用の装置の「誤用」だ。が、その装置は、元の用途を無視して使われることで私たちの新しい生存の技法へとズラされたのだと美術家は言う。都市の設備を遊具にするスケボーもその一つ。『あえて間違った読み方』(COMPPOST)創刊号から。

石原友明

2020・6・11

折々のことば

鷲田 清一 1844

死の意識とは、死の日づけを本質的に知らないままに、死を絶えず繰り延べる意識である。

エマニュエル・レヴィナス

犬が逝った。彼女はやがて身を起こる事態がどういふものか知らないまま、従順に死の訪れに呑み込まれたように見えた。人は死を、いつか身にふりかかるものとして意識する。そういう形で、不在の未来を現在の内に組み入れ、死をまだないものとして「遅らせる」ことで、時間という次元を開くのだと、20世紀フランスの哲学者は言う。『全体性と無限』(熊野純彦訳)から。

2020・6・12

折々のことば

鷲田 清一 1845

親になるとは、許されることを学ぶことなのだ。

三砂ちづる

親はよくまちがう。よかれと思ってしたことが子どもを傷つけた、痛めつけていたと悔やむことが本当によくある。だから欠点だらけの「私」を許してほしいと祈るような思いでいると、保健学者は言う。子どもから許しを得ることで、自分の親も「まちがいでだらけで欠点だらけのただの男と女だった」と許せるようになる。『自分と他人の許し方、あるいは愛し方』から。

2020・6・13

折々のことば 1846 ～1850

「ま、長生きせえ」

桂米朝

折々のことば

鷺田 清一 1846

手も首は足だった。

坂口恭平

掴む、集める、分ける。手は足でなくな
ってこういう作業ができるようになった。
料理がその一つ。家でできる、各地で採れ
た物を組み合わせる、そのつと完成する。
だから移動が難しい時には手で旅をしよう
と、「自宅待機のプロ」を自認する建築家
・作家は言う。手で考えること。手をかし
こくしておくこと。エッセー「手の旅のは
じまり。」(『POPEYE』6月号)から。

2020・6・14

折々のことば

鷺田 清一 1847

「ま、長生きせえ」

桂米朝

落語では、「阿呆か、お前は」と言い放てば
いい場面でも、あきれた表情でしばし相手
の顔を眺めた後、軽くいなすことで、笑
いにいつそう味わいが出ると囃家は言う。
奇抜な展開とか「ほんにそうや」と反射的
に笑えるものよりも、そこに間や一呼吸あ
ったほうが、笑いもふくらむ。現に小言
も、じかよりはちよつと隔てたほうがよく
効く。『上方落語ノート 第二集』から。

2020・6・16

折々のことば

鷺田 清一 1848

飽きられないマンネリ、日々新たなマンネリ
というものがあるんだ。

志村けん

このお笑いタレントは意外にも「常識」
を尊ぶ。常識を退屈な「マンネリ」だとバ
カにしていると、常識を超えたこともでき
ない。だから「常識人の変な人」をめざし
てきたのだと言う。マンネリは一つの達成
でもある。それをフレッシュに保つには、
「下ごしらえ」が大事。「やっぱりプロは、
下ごしらえもプロじゃなくちゃダメじゃな
い」と。人生指南の書『志村流』から。

2020・6・17

折々のことば

鷺田 清一 1849

うれしいこともが すわります／かないいこ
どもも すわります／おかあさんも ふさけ
てすわる／ねこも とときき すわってる

谷川俊太郎

「ただひとり すわれないのは わたし
だけ」と続く。いったいそれは何？ ペー
ジをめくると、答えは「わたしの ひざ」
でした。困っているんじゃない。うれしい
んです。いろんな人、いろんな生きものが
わたしの体を行き交うことが。そこを休ら
いの場にしてくれることが。詩人の『えほ
んなぞなぞうた』(絵・あべ弘士)から。

2020・6・18

折々のことば

鷺田 清一 1850

「彼らの仕事は恐怖を芸術と祈りに変える人
間の力の証明です」

「原爆の図展」感想ノートから

米国で巡回展をした丸木位里・俊夫妻の
「原爆の図」。原爆は米国にとって今も勝利
の象徴らしいと言う学芸員の岡村幸宣は、
加害／被害の反転を描く『采兵捕虜の死』
の前で苛立った退役軍人が、後日再び、作
品群に見入る姿を目撃する。一方で感想帖
にこんな文章も見つけ、展示の意味を噛み
しめた。『未来へ 原爆の図丸木美術館学
芸員作業日誌2011-2016』から。

2020・6・19

折々のことば

1851

～1855

我々の社会は、「死」を如何に身近に感じ得るか、という点で、準備がすくなくすぎるのではないか。

村上陽一郎

折々のことば

鷲田 清一 1851

かたちのきれいな松ぼっくりだけ選んじやだめよ。かたちの良くないのだから、面白んだから。みんな同じ松ぼっくりなんだ

万年山えつ子

丸木美術館で長く工作教室を担当した画家の万年山は、「原爆の図」を夫・位里と制作した丸木俊からこう学んだと言う。ペしゃんこの空き缶だって、道に捨てた人と車で轢いた人と拾って工作する人の共同作品なのだと。人が選ぶことの不遜をふと思つ。岡村幸宣の『未来へ 原爆の図丸木美術館学芸員作業日誌2011-2016』から。

2020・6・20

折々のことば

鷲田 清一 1852

もし 世界が あるならば/その 片隅から磨くとして/もし 永遠が あるならば/いつもの 一瞬を 輝かすとして

ななおさかき

世界を放浪し、行く先々でピート詩人たちと詩会を開き、コミュニケーションをつくって山河を護る活動をおこなった詩人は、晩年、こう詠った。こんど生まれる時は、「使えば 使うほど 今日の空に 近づく 瑠璃色の 雑巾になろう」と。もしまだ「世界」があれば、あり続けていれば、との祈りとともに。詩集『ココペリの足あと』から。

2020・6・21

折々のことば

鷲田 清一 1853

パンタナールの野生には誇りがある。動物の目や動きを無視して動くものなら、たちまちシャッターチャンスを失う。

岩倉光昭

パンタナールは南米大陸の中央に位置する広大な熱帯湿地。ジャガーやワニや鳥たちの捕食の一瞬を狙うが、「水の流れを見て動物の動きを掴む」瞬発的な感覚がこちらにもなければ撮れないと写真家は言う。人はきつとこの感覚が痩せ細るのを案じ、スポーツや武術を文明の二項目に加えたのだろう。写真集『パンタナール』から。

2020・6・22

折々のことば

鷲田 清一 1854

眼鏡をかけずに川の真ん中で立てない立てないともがいていても、眼鏡をかけたら本当は浅瀬で、ちゃんと自分の足で立てるから

高沢寛

だから「大丈夫」と続く。薬物依存などに苦しむ人々を、闇の中に仄かに浮き立つように描く『ミック『SAD GIRL』』のあとがきから。自身のかつての経験から、作者は依存症からの回復をめざす人々と家族にこう伝えたいと言う。その過程がいかに辛くとも、「どうよ暗過ぎて笑えるでしょ」と、笑って話せる日がきつとくるからと。

2020・6・23

折々のことば

鷲田 清一 1855

我々の社会は、「死」を如何に身近に感じ得るか、という点で、準備が少なすぎるのではないか。

村上陽一郎

戦時下、人命が余りに軽んじられた反動で、命の「至上の価値」を唱えるうち、日々死の脅威に晒されている人々を支える体制も手薄になっていったと、科学史家は憂う。この社会は「隣にいる成員が日々次々に死んでいく社会」でもあるのに、その過程に人は子細に目を向けていないと。「近代科学と日本の課題」(中央公論7月号)から。

2020・6・24

折々のことば

1856

～1860

はじまったからには、終わらなければならぬのだ。

久世光彦

折々のことば

鷺田 清一 1856

人の世の毎日はへゆうべの残りゝを引きずりながら、次の日へ、また次の日へとつながって

久世光彦

朝の食卓にはよく「ゆうべの残り」が出る。カレーとか煮物とか。一晩置けばさらに味が増し、取り合いにもなる。が、別の「残り」もある。前夜のいざこざや行き違い。促されてべこり頭を下げると、寝かせた味もあいまって空気がほどける。日々を「賢く乗り越え」る、そんな知恵も朝に学んだと、作家・TVドラマ演出家は言う。『触れもせで 向田邦子との二十年』から。

2020・6・25

折々のことば

鷺田 清一 1857

はじまったからには、終わらなければならぬのだ。

久世光彦

映画や小説にはラストシーンがあり、エッセイにも最後の一行がある。が、人生のおち、は誰も自分では書けない。最後に人生の長い物語を閉じようにも「末期の刻」になつてこんなラストシーンのつもりじゃなかったとジタバタする」のがおちだと、作家・TVドラマ演出家は言う。ひとの死は、そのぶんよけいに偲びと悼みを誘う。『触れもせで 向田邦子との二十年』から。

2020・6・26

折々のことば

鷺田 清一 1858

待たれているというところが、これほどまでに人間を抑制的にし、義務感をもたらし、規則正しい生活に引き込むなどは

平川克美

父の介護で毎日、朝夕の料理を作るようになるまでは想像もしていなかったと、珈琲店を営む文筆家は言う。それまでは、人は独りで生まれ死んでゆくものと思い定めていたが、やって当たり前ではなくて、自分が誰かに待たれていると悟った時、暮らしの軸がぐいと動いた。それには自分でも驚いたと。『言葉が鍛えられる場所』から。

2020・6・27

折々のことば

鷺田 清一 1859

かなしみの病床でも
よろこびの花畑でも
こぼれ落ちたところがふるさと

志樹逸馬

13歳でハンセン病を発症。以後30年間「園」で生きるはかなかった志樹は、多くの詩篇を遺した。その一つにこう記す。指が曲がって水がこぼれても、いのちの水はこの手になみなみと注ぐ。誰に顧みられなくとも、そこを拠点に「前に歩くこと」／交替でなく／比較でなく／訣別でなく」と。若松英輔編『新編 志樹逸馬詩集』から。

2020・6・28

折々のことば

鷺田 清一 1860

絵というものは、解るとか解らないとかいう前に、ひと目で、見る者に否応なく頭を下げるようなものがなければ絵とは言えない

洲之内徹

作家で、無名画家の発掘に尽くした画廊主の信条である。絵を見るにも何か標準のようなものを心得ているのが玄人だとすれば、自分はそんなお構いなしの素人ではない。『正体不明』で「美意識の瘡蓋をはが」してくる作品に出会いたいからと。その佇まいにふれるや頭を下げるほかない人も確かにいる。『気まぐれ美術館』から。

2020・6・29

折々のことば

1861

～1865

事情を明らかにすることは百の論説に匹敵するはずである。

長谷川伸

折々のことば

鷲田 清一 1861

世間は牡蠣殻だらけ。
な場所に籠もるばかりで、
狭いと、幕末の志士は姉・
書き記した。別の手紙には、
ほり」の居候に生まれても、
度「せんたく」（洗濯）しう
姉にこまめに書き送った手紙
ぶものもあるといふ。『龍馬』

扱々世の中と云ものハかき
間と云ものハ世の中のかき
おるものであるわい、おか

折々のことば

鷲田 清一 1862

「助けるって、どういふことか？ 言ってる
ん、こわがらないで」「わたしの眼よ」「その
眼がどうしたんだね？」「青くしてほしいの」
悲劇はここから始まった、いやここは極
まった。黒い膚だといふことで受けた侮辱
と蔑視。せめて「青い眼でこの世を見たい」
と願う少女の中にも、差別の構造は映り込
んでいた。彼女を襲った悲劇を語る幼友達
は「これ以上語ることは何もない——な
ぜ」と言つ以外は」と呟く。黒人作家の小
説『青い眼がほしい』（大社淑子訳）から。

トニ・モリスン

2020・7・1

折々のことば

鷲田 清一 1863

最も強いものに従うのは、必然のことである。
すさまじい権力や暴力をふるう者に、人
は最終的に屈服せざるをえない。それは必
然のこと、つまりそうでしかありえないこ
とだと、17世紀フランスの思想家は言う。
ではこの言葉を反転させたらどうなるか。
最も弱い者に従うことこそ自由だといふこ
とになる。弱い者に従うのは、人が何に強
いられることなく選んだ結果なのであ
る。『パンセ』（前田陽一・由木康訳）から。

ブレイズ・パスカル

2020・7・2

折々のことば

鷲田 清一 1864

事情を明らかにすることは百の論説に匹敵す
るはずである。
股旅物で知られる大衆小説家は、綿密な
考証にもとづく歴史小説も書いた。なかで
も『相楽総三とその同志』は資料収集に13
年を費やした。倒幕にあたり重要な局面を
担うも「官軍」の奸計で逆賊の汚名を着せ
られ惨殺された「赤報隊」の志士の行動を
たどる。「維新」を、西日本の、それも公
卿や藩士の功績とする語りに「無言の体当
りを食わせ」たかったと、「自序」に書く。

長谷川伸

2020・7・3

折々のことば

鷲田 清一 1865

国家の内部あるいは外部から難事が起こった
場合、真正面からあたるよりは時を稼ぐほう
がはるかに安全である
国家の危機についてはその機先を制する
ことが重要だが、未だ芽のうちにそれを見
つけ摘み取るのは至難の業だと、ルネサン
ス期イタリアの政治思想家は言う。事がな
まやさしいものでない時はとくに、すぐに
手を下さずにうまくあしらい、最悪の事態
を引き延ばすのが肝要だと。『ディスコ
ルシ「ローマ史」論』（永井三明訳）から。

ニッコロ・マキアヴェッリ

2020・7・4

折々のことば 1866 ～1870

この図書館では、索引カードによって目当ての一冊を選びだすことはできません。

芥川比呂志

折々のことば

鷲田 清一 1866

この図書館では、索引カードによって目当ての一冊を選びだすことはできません。

芥川比呂志

戯曲のことをいっている。台本に書かれたせりふも、語られる言葉として「人物の生理」にまで踏み込まないと「薄手なもの」になると、文学座の名優は言う。「ありがと」「いいえ」でも感謝であるとは限らず、体のよい拒絶であったり、気がよそに行っていたり。蔵書を全部読み込まないと検索すら見つからないようなものだ。随想集『ハムレット役者』（丸谷才一編）から。

2020・7・5

折々のことば

鷲田 清一 1867

われわれの情熱がどれだけ長続きするかは、われわれの寿命の長さと同じく、自分の力ではどうにもならない。

ラ・ロシュフコー

火のような情熱に囚われても、いずれ悪き物が落ちたように色あせる。一方、情熱は「生殖」をくり返し、それこそ反対物へと変態もする。愛が憎しみに、臆病が向こう見ずに裏返る。さらに情熱は知性を弄びさえする。人の核にあるものは思い通りにならない。17世紀フランスの公爵の『ラ・ロシュフコー箴言集』（二宮フサ訳）から。

2020・7・6

折々のことば

鷲田 清一 1868

情熱のある最も朴訥な人が、情熱のない最も雄弁な人よりもよく相手を承服させる

ラ・ロシュフコー

滑らかな口舌は心にひっかかることがなく、逆に相手を用意深くする。信頼は一語一語を確かめるように紡ぐその語り口から生まれる。17世紀フランスの公爵の『ラ・ロシュフコー箴言集』（二宮フサ訳）から。そういえば孔子の『論語』にもよく似た言葉が。「君子欲訥於言、而敏於行」（君子は言に訥にして、行に敏ならんと欲す）。口は重く、行いは機を見てしかとなせと。

2020・7・7

折々のことば

鷲田 清一 1869

子曰、徳不孤、必有鄰

孔子

「子曰わく、徳は孤ならず。必ず隣あり」。誠実な生き方というものは、他人の思惑など顧みることなく、ひたすら孤独のうちで磨かれるもの。だがそれがかならずや他人のところに響く。同時代のなかで孤立していても、密かにその生き方に支えられた人、救われた人がいるからだ。そういう人の結びつきはかんたんには崩れない。『論語』（金谷治訳注）巻第二・里仁第四から。

2020・7・8

折々のことば

鷲田 清一 1870

自分自身を深く投げだして、それ自体の中に救いの路をもとめる以外に正しさはないではないか。

坂口安吾

短編小説「いずこへ」から。作家自身とおぼしき主人公は、「差引計算」や「バランスをとる心掛」を好まぬと言う。が、自らを救うために平然と策を弄し、人に阿り、身を貶めずする一人の女性を「卑劣」だと突き放すうち、「それ以上の何者でも有り得ぬ悲しさを更に虚しく噛みつけ」る。ほかない自分に気づき、この歯きりした。

2020・7・9

折々のことば

1871

～1875

ルールになるものが自から出てくるものだもん。それを信じてるのが人生なんだもん

橋本治

折々のことば

鷺田 清一 1871

ルールになるものが自から出てくるものだもん。それを信じてるのが人生なんだもん

橋本治

原っぱに居合わせた子どもたちがルールを拵えて遊びだす。通りかかった子がじっと見ているので「入る？」と訊き、でも適当な役がないので、仕方なくルールを変えて仲間に入れる。で、またみんなで「盛り上げ」る。社会の「ルールの根本」はそこにあると、作家は言う。でも学校に行くと「序列」があって、そんな自生のルールもかき消される。『ぼくたちの近代史』から。

2020・7・10

折々のことば

鷺田 清一 1872

そつへいのままの海をぐんぐんと飲むな

菅啓次郎

俳句のような一行詩。頭の音が「あ」から「わ」まで50音順に6周連なる、詩人・比較文学研究者の詩集『狂狗集』から。塩水はいのちの元基。人はそれに満たされ、育まれてきた。海は眺めるのではなく浸るもの？ そつへいは「私は海をだきしめていたい」と書いた作家がいた。「なみだは にんげんのつくることのできる いちばん小さな 海です」と記した歌人がいた。

2020・7・11

折々のことば

鷺田 清一 1873

「人口が減っても、地域は簡単になくならない。だが、小ネタが尽きると、あっという間に地域は衰退する」

玄田有史・荒木一男

東大社会科学研究所で「危機対応学」プロジェクトを推進した二人は、その中でこの「仮説」を得た。地域には突発的・段階的・慢性的など複層的の危機が併存する。必要なのは一発勝負の大改革でなく、日々の生活に潜む、無理のない、でもちよつと楽しい、そんな手がかりの集積だと。東大社研ほか編『地域の危機・釜石の対応』から。

2020・7・12

折々のことば

鷺田 清一 1874

それがどれほど小さなささやきであったとしても、「私の名を呼ぶ者の声」を聴き逃さないでいたいものだ。

大嶋義実

フルート奏者が奉職する京都市立芸術大学では、コロナ禍の中で迎えた卒業式で、祝辞の時間は削っても、卒業生全員の名を呼び、それに起立して「はい」と応える儀式だけは守った。呼び声に「ここにいます」と応じることが、その人の個としての存在の第一歩だとの信念から。随想「名前ってなに？」（『季刊ムラマツ』夏号）から。

2020・7・14

折々のことば

鷺田 清一 1875

彼らの日常的な助けあいの大部分は「ついで」で回っている。

小川さやか

タンザニアから香港へ出稼ぎに来る人たちを調査した文化人類学者は、帰郷する時は「ついで」に商品やお金を運んでやるなど、無理なく義理にも囚われないドライなつきあいに着目する。誰かを助けるというか別の誰かが助けてくれるという思いでつながる様子は「洗練されておらず、適当でいい加減だからこそ、格好いい」と。『チョンキンマンシヨンのボスは知っている』から。

2020・7・15

折々のことば

1876

～1880

「君、それ自分で見たのか」

中尾佐助

折々のことば

鷺田 清一 1876

用事がなければどこへも行つてはいけな
云うわけはない。

内田百閒

「用事がないと云う、そのいい境涯」を
味わいたくて、ふと思ひ立つてという気分
で大阪への旅を企てるが、いざとなると意
外に面倒。日付に縛られるのは嫌だが、切
符はやはり予約しておくべきか。金の工面
は？ 体が不安で同行者を、酒はどうで、
と考えだすと切りがない。気儘というのも
存外難しく、渋々体裁を繕う作家先生。ユ
ーモア満ちる短編「特別阿房列車」から。

2020・7・16

折々のことば

鷺田 清一 1877

「地味なことは打たれ強い」

福岡の惣菜店店主

近所の居酒屋は「悔しさ」の滲み張り紙を
して大半が休業。そんななか、お酒の飲め
る惣菜屋を営む夫婦はテイクアウトでし
のぎ、別の店のそれを買って助けもする。
ワイン一杯注ぐほうが移気はいいが、地道
に惣菜や弁当をつくり続けてきたことが今
は生きているという。清掃員、薬剤師、漫
画家ら多業種の人たちが日々を綴った『仕
事本 わたしたちの緊急事態日記』から。

2020・7・17

折々のことば

鷺田 清一 1878

自分の今日も昨日の再放送だなんて悲し過ぎ
る

尾崎世界観

コロナ禍の中、生活までテレビの再放送
番組のようになっていっているとミュージシャン
・作家は嘆く。で、慣れない腕立て伏せな
どして「ぶるぶる震え」てみる。今日が昨
日と違うのは、人であれ感覚であれ、そこ
に思いがけない触れあいがあるから？
ちなみにコンタクトと「偶発性」は同じく
ラテン語の「触れる」に由来する。『仕事
本 わたしたちの緊急事態日記』から。

2020・7・18

折々のことば

鷺田 清一 1879

「君、それ自分で見たのか」

中尾佐助

民族学者の梅棹忠夫は、先輩の植物学者
・中尾に議論をふっかけるといつもこう返
されたという。自分の目で見て、自分の頭
で考えよと。梅棹は後輩たちにその矜持を
しかと伝えるとともに、時評など書かず文
明論を書けと言った。遠近遥かに隔たった
二様の視点を持つこと。虚実を見極めるに
はこの二つが欠かせないと。梅棹の『梅棹
忠夫 語る』（聞き手・小山修三）から。

2020・7・19

折々のことば

鷺田 清一 1880

うそをまことしやかに語るのが「芸」。ほん
とこのことをほんとうにやっていたは芸にな
らんのです。

七世竹本住大夫

文楽は演じ物。そして演じ物は虚構。「粹
に語るころはもっさり」と、粹にやっては
粹に聞こえへんのです」と、浄瑠璃語りは
言う。人が演芸場に通うのも、きつとその
「うそ」に騙されるため。それに人が笑い
涙するのは、〈私〉という存在もまたそれ
ぞれが自分で自分に語る物語でしかないか
らだろう。『文楽のころを語る』から。

2020・7・20

折々のことば

1881

1885

折々のことば

鷺田 清一 1881

合わせにいったら、おもしろうなくなります。互いに勝手に語り、勝手に遣って、それでいてピタッと合うようでないといけません。

七世竹本住大夫

文楽のある演目で、人形が柱に頭をぶつけて「アイタッ、アイタッ」と言う段で人形遣いが浄瑠璃語りの太夫をうかがい、調子を合わせようとしたので、太夫は後で「僕をうかがうのではなく、君は君でやったらええ」と言った。一体になるより違いをうまく共振させること。文楽はなかなかモダン。『文楽のこころを語る』から。

2020・7・21

折々のことば

鷺田 清一 1882

自分にとって特別なだけで、他の人からしたら、なんでもない夜なんですよ

桑原裕子（原作）、高橋泉（脚本）

映画「ひとよ」（監督・白石和彌）から。子どもに暴力をふるう夫を殺め、15年ぶりにタクシー会社を営む家に戻った女と、運転手として働く男。男は長く離れていた息子と再会し、束の間の幸福に浸る。が、息子は薬物に手を染めていた。それを知って荒む男に、同じく不在の時の重さに喘ぐ女がこころ声をかけた。「でも、自分にとって特別な……、それでいいじゃない」

2020・7・22

折々のことば

鷺田 清一 1883

遺言って、実際に書いてみると悲観的な内容にならないんですね。

ドミニク・チェン

情報学者は昨年のおいちトリエンナーレで、誰かに宛てる遺言を募集した。寄せられた2300の文章の大半が、自分がいなくなっても幸せな世界を生きてほしいとの祈りだったという。自分がいない未来にいちど自分を置き、そこから現在を眺める。これがきつとこれからの倫理になると。独立研究者・森田真生との対談「未来をつくる言葉を語ろう」（「波」6月号）から。

2020・7・23

折々のことば

鷺田 清一 1884

明日って何々だろ 全部今日の 全部今の続きなんじゃないの

雁須磨子

「ミミック」あした死ぬには、『1巻から。映画宣伝の職場では職務が続き、体調も崩して感う42歳独身の主人公。その彼女にある日、同じく苦境にある知人が映画制作への思いを切々と語る。が、その話は地に足着かず、「やる気はあります 明日にでも」とすべてが未来形。話に涙を誘われながらも、夢物語のかたちで問題を「明日」に持ち越すその生き方に、ふと違和感を抱く。

2020・7・24

折々のことば

鷺田 清一 1885

きれいな音であればあるほど、それが何か悲しくひびくのはどうしたわけだろう

吉田秀和

モーツァルトのクラリネット協奏曲は、響きが「あんまり平靜」なので、「明るい長調の光の中で起る出来事」なので、よけい痛切に響くと、音楽評論家は言う。それに共振するのは、「自分がどこから来たか？」という問い。一度かきりで消えゆく音。それは「私」という存在の寄る辺なさとその寂寥に、どこか「安らぎ」をすら伴いつつ人を浸すのか。『私の時間』から。

2020・7・25

折々のことば 1886 ～1890

折々のことば

鷺田 清一 1886

僕は、僕を甘やかすもののなかに敵をみないわけにはゆかなかった

金子光晴

戦時中ひそかに書き溜めた詩篇が戦後、次々と目の目を見ることがなった詩人は、時代に抜け目なく添い寝した人々が戦後あつさり民主陣営に転向し、自分を「安手の抵抗派の一員」として遇することに今いちど絶望する。彼らが謳う「ヒューマニズム」にかつての「団結」という過ちの反復を見て、以後ジャーナリズムに距離を置く決めた。『詩人 金子光晴自伝』から。

2020・7・26

折々のことば

鷺田 清一 1887

この世界に人の力を加えることがものをつくるという意味だと言ふのなら、私はつくらない。

内藤礼

人は世界を、そこに生きるものたちを、どうして向こうへと遠ざけてきたのか。生きものはみな「水の中の水」のようなものなのに、と美術家は言う。生きものたちは私たちより「先に」に「くつろいでいた」。私たちは「後から来た」。怖さと懐かしさを醸すその空間に、自分を今いちど溶かし入れたいと。『空を見てよかった』から。

2020・7・27

折々のことば

鷺田 清一 1888

それは「他人に過大な期待をかけてはいけない」ことを、過去の人生で学んだ人たちからにじみ出る、一種のやさしさの形でした。

岩井志麻子

新宿・歌舞伎町はワケありの人が多い街だと、在住の作家は言う。散歩中に犬が逃げ出すと、出勤途中の水商売の人が次々と追跡に加わり、落着すれば「よかったね」と言っただけに去る。それは地域の一体感や連帯とは違つ、「期待しすぎなければ裏切られもしない」と知る人たちの温みだった。本紙「耕論」（7月21日朝刊）から。

2020・7・28

折々のことば

鷺田 清一 1889

絶望していいこと、換言すれば自分が絶望していることを意識していいこともまたまさに絶望の二つの形態である

セーレン・キエルケゴール

何かについての絶望は本当の絶望ではない。そうした絶望に囚われている自分にさらに絶望し、しかもそこから眼を背け、抜け出そうとするのが絶望の定式なのだ、19世紀デンマークの思想家は言う。時代の危機もおそらく同じで、危機を危機として受けとめる感覚の消失こそ真の危機なのだろう。『死に至る病』（斎藤信治訳）から。

2020・7・29

折々のことば

鷺田 清一 1890

彼等は暗くなる理由がないのである。

長谷川雅巳

脊髄損傷で下半身の自由を失った長谷川は、生涯を療養所で送るはずだった。だから、日本初のパラリンピックへの出場を要請されたときはひどく戸惑った。が、会場で出会った海外の選手たちがごく普通に、陽気に生きる姿に衝撃を受け、社会の「理解」が全然違つと手記に書いた。この経験が彼のその後を変えた。稲泉連の『アナザ1964 パラリンピック序章』から。

2020・7・30

折々のことば 1891 ～1895

折々のことば

鷺田 清一 1891

想像力のなさは、知らぬうちに人に刃を向けることがある。

田尻久子

熊本市にある橙書店の店主は、テーブルの下で寝そべる猫の気持ちになりたくてそこに身を横たえる。何が安心か、何に怯えるか、ありありとわかった。そのあと子どもたちの眼の高さから、車椅子の人の眼の高さから書棚を見つめ、「想像力だけではいつでも足りない」と悟る。そして彼らが「信頼して声をかけられる」店をめざそうと思う。エッセー集『みぎわに立って』から。

2020・7・31

折々のことば

鷺田 清一 1892

さみしいといふは、楽しかったといふのだよね

ある小学生

熊本市の橙書店の店主・田尻久子の随想集『みぎわに立って』から。帰省のたびに書店を訪れる元店員は、別れが苦手で、帰りに田尻とハグしては涙を浮かべる。横にいた元店員の息子は後で「言ったという。」「そうか、さみしいってことは、いいことだ」と田尻。いつ何が起きるかわからないのは震災で痛感したこと。いかに「小さくとも」別れはつめやかにできないと。

2020・8・1

折々のことば

鷺田 清一 1893

誰も見る人のいない真夜中の母の正装は、しっかりと瞼に焼きついた。

信吉貴美子

戦争末期、信吉さん（当時12歳）の母は女手一つで姉妹4人を育てた。食糧の配給も乏しい中、農家を訪ね、思い出の着物と交換にわずかの米を得る。前夜、母が独りそれをまとう姿が忘れられないと、信吉さんはいう。着物はいわば心の操。だが戦地では、兵隊の多くがそれすら奪われ、餓死していた。戦争体験を集めた『戦中・戦後の暮らしの記録』（暮らしの手帖社編）から。

2020・8・2

折々のことば

鷺田 清一 1894

色々な人たちがいるってということに自分も含まれているんだってことに気づけることが大事だよ

障害者支援NPOのスタッフ

浜松の知的障害者支援のNPO、クリエイティブサポートレッツの職員の一人は、小学生たちの体験訪問では何よりこのことを伝えたいと言う。自分も同じく生きづらさを抱えた一人。もしその「色々な人たちに自分を含まないでいると、人はつい上から目線になってしまう。地域活動家・小松理度の『ただ、そこにいる人たち』から。

2020・8・3

折々のことば

鷺田 清一 1895

支援の現場にいる人たちが、支援の質を高めるのではなく、同時に支援を逸脱することも考えている。面白いと思った。

小松理度

福島の地域活動家は、障害者が思い思いに過ごす浜松の知的障害者支援のNPO「レッツ」を足繁く訪れる。職員たちは、支援する／されるという関係を外れ、まるでアートを楽しんでいるみたいだという。地域のリサーチもそうだが、いずれもベクトルが「社会」に向いているところに惹かれると。『ただ、そこにいる人たち』から。

2020・8・4